

曆史
講義

日本無三四

中村兵衛講演

東京大學館發行

259
29

097709-000-0

特12-621

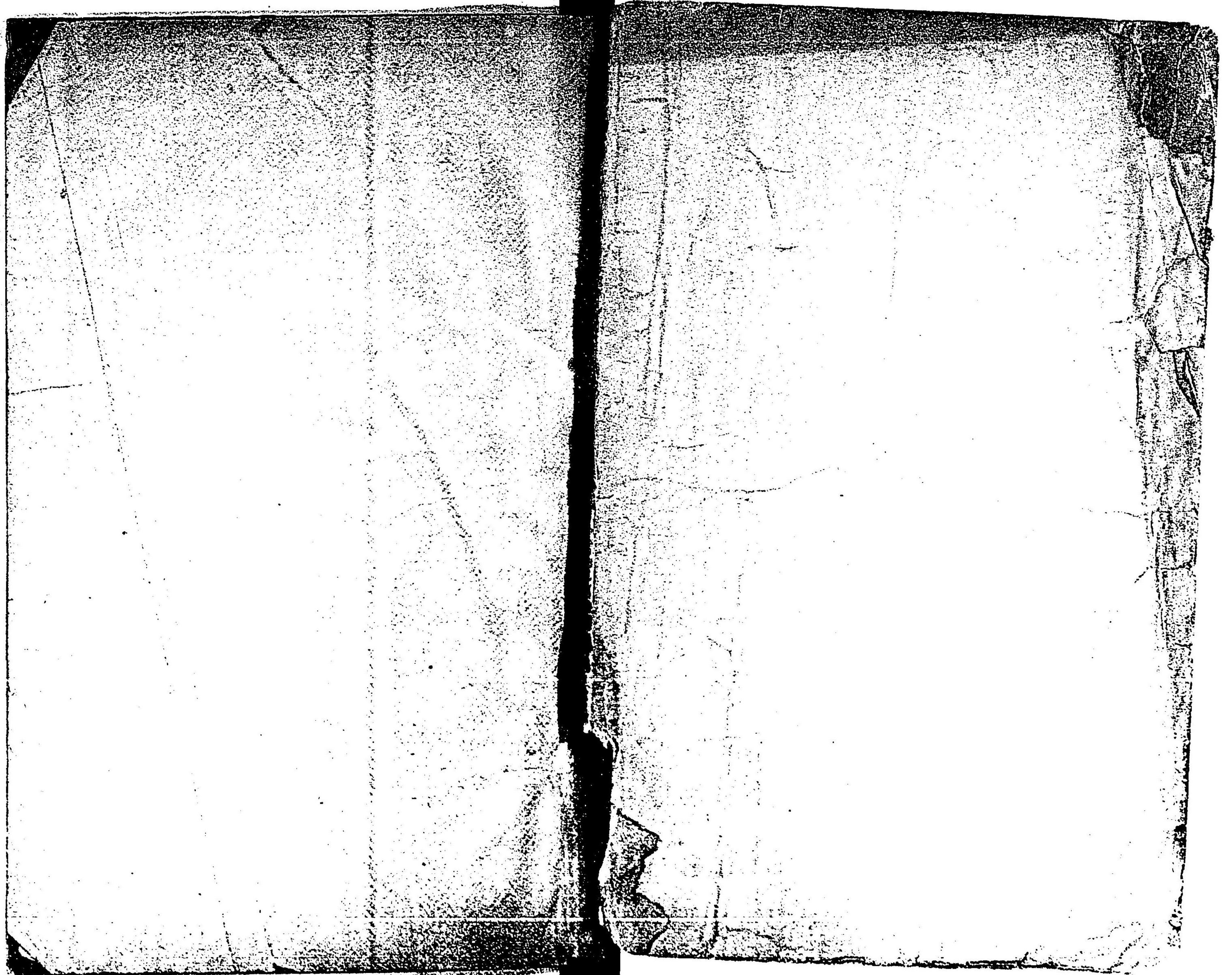
宮本無三四（歷史講談）

中村 兵衛／講演

M41

DBS-1644





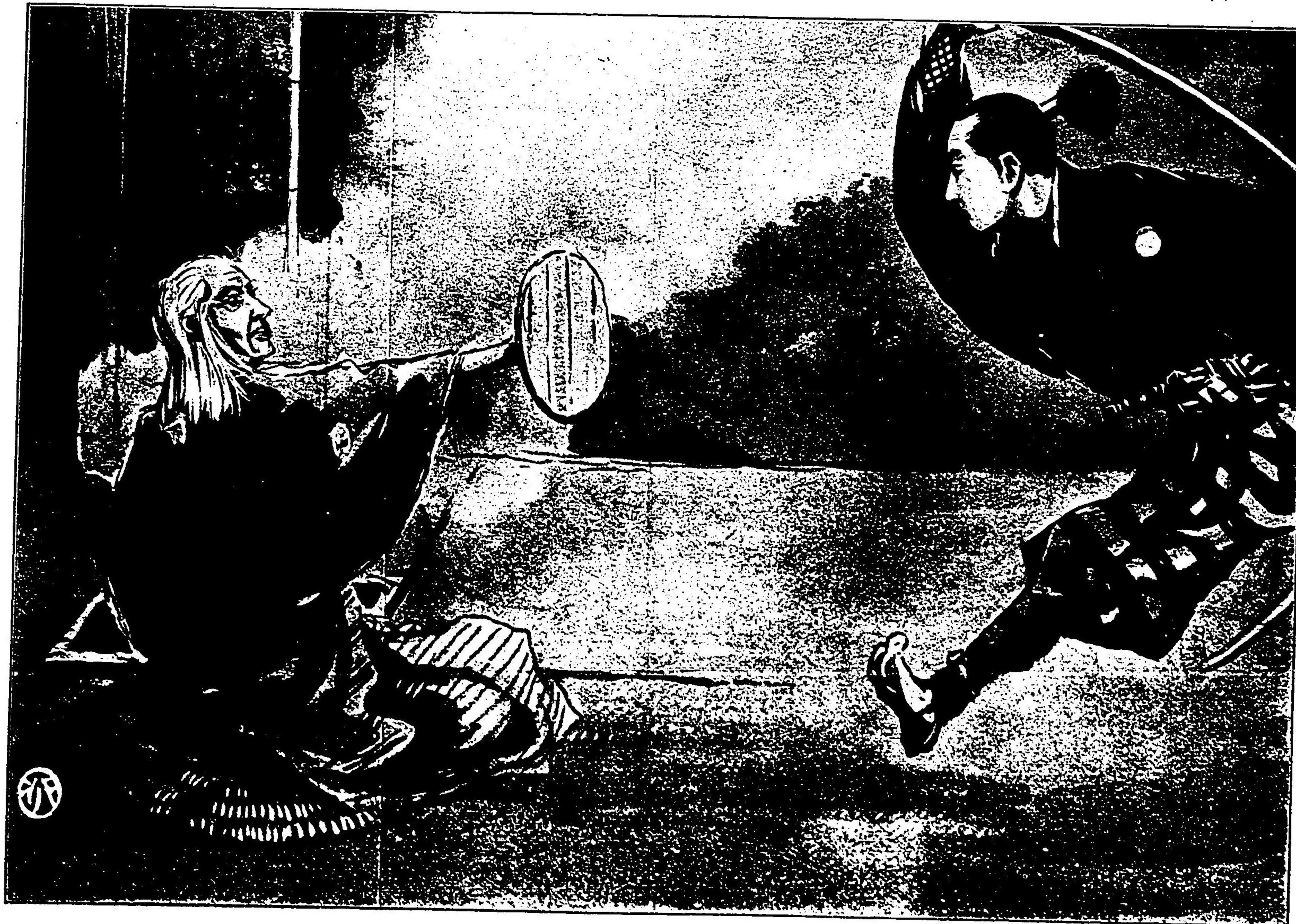
はしがき

宮本無三四言へば、兩刃使ひの劍術の達人として天下人みなこれを
知る、されば劇に、講談に、落語にこれが逸話を仕組みて、皆喝采
を博せざるなし、本書は實に無三四が生ひ立ちより説き起して、少
年時代の腕白、豪膽、深山に於ける劍法修業、有馬家に於ける妖怪
退治、塚原卜傳との鏑、仕合、毒殺の危難など或ひは手に汗を握ら
しめ、血を湧かじ肉を躍らしむその奇談珍話を始め、困難苦辛、災
厄危難の數々を述べたる。殊にその實父の敵佐々木巖流との試合の
一節の如きは、壯絶快絶にして巻中の白眉なりとす。宮本無三四が
一代に於ける詳細は本書これを悉く講演し盡せり。

十二月下旬

雨聲山人識

7
内表



特 12
621

第 一 回 (一)

歴史 講談
宮本無三四

第一回

中村 兵衛 講演

播州は楳保郡石海村の内に宮本村といふが今でもございまして、石海神社といふ村社に宮本無三四の靈魂を合祀してあります、此村へ何處よりか参つた吉岡無二齋といふ浪人がありました、倅七之助と唯兩人、田舎の事で弟子もないが武術を教へまして唯氣樂に日を送つて居ります、或る日の事悪戯者の七之助を呼んだ、七之助もモ一十三歳になる、無七之助、お前もモ一十三歳ウカくとして居ては成ません、少し力量のある處からして近所の子供と喧嘩三昧ばかりするが、父母より給は

る身体髪膚傷けるは不孝の第一、豫て教へし劍術は喧嘩争論に用ゆべきものではない、唯其身を護の楯ぢやに依て、人の争ふ處なぞへは決して立寄るものではないで、一朝天下に事ある時には其術を顯はして其名を擧げよ、此太郎左衛門も足利將軍義輝公に仕へ自見流の劍道を以て御家人に教へ、諸人に並びなき無二齋さまで將軍のお詞を賜はりし身も、時世とは申し乍ら三好松永の謀叛より足利の天下も十三代にして滅亡、榮枯盛衰は世の習ひと聞けど今は斯る片田舎に詫住居して味氣なき世を送る身の上、お前の兄清三郎は沈着けれど、病身頼み少なの父の心察して此後は悪戯はするな』と諭されましたが、七之助は生れ付ての武術好き近所の子供を集て合戦の真似から果は喧嘩で尻を食ひ、何時も相手の親から八釜しく掛合れるといふ腕白ものです、ドーモ此英雄豪傑にでもなるお人は幼少の頃から亂暴な處があるやうです或日のこと吉岡無二齋先生が庭へ立出まして向の築山へ覗つて手裏劍を打れ慰みがてら練磨の功を積でお在になる、流石名人のこともへ百發百中、的と目指す草花を

パツ／＼と散らす、スルト今『エイ』と打出した手裏劍が外れて花に當らなかつたから二本目を放さんとする時、背中で『アハ、』と高聲に笑ふ者が有ますから振り返つて見ると例の七之助、お爺さん忿つたの怒らないのつて『コレ悻子の分際として親を嘲り笑ふといふことがあるかモ一度口を開いて見ろ其儘には差置かんぞ』七之助恐れ氣もなく『お父上、笑つても能いちや有ませんか人間は可笑い時笑ひ悲しい時泣くが當り前、喜怒哀樂が色に顯はれぬといふは賢人君子の事、我々凡人の淺ましきには可笑いと思へば笑ひます』父『何が可笑しい』七之助かの間敷に覗ひを外したから笑ひました』父『已れ憎つき申し様、最早勘辨罷りならぬ』と腰なる一刀引抜きざま、七之助望んで斬り込んで来る七之助と飛鳥の如くに身を躍らし庭を飛廻る、父は怒つて追て来る、七之助は笑ひ乍らに駆け出すお爺さん猶怒つて追駈けるが迎も及びません、今泉水の廻りを追つて石燈籠から右へ追ふと見せて置て左りへ廻つた此計略で七之助危ふくも父に追留められ『ヤツ』と一喝、肩口を斬

下げられたかと思ふと乙鳥が袖の下を潜るが如くスリツと抜けて身を起すと見る間に隣家の境竹垣の己が身体より高いのを飛越へて何處ともなく逃げ去りました、イヤ呆れ返つたお父上無二齋が切齒みをして口惜しがりました、此方は隣村野村と申す處に光勝寺といふ禪宗のお寺がありまして住職の島長善師が法用の戻り道、見ると近村評判の悪太郎彼の七之助が飛んで行くから「コレノ其處へ行くのは宮本の七之助ではないか、又喧嘩でもしに行くのか困まつたものぢやコレ七之助何處へ行く」

第二一回

七「今貴僧の處へ行こうと思つて……」光「何かお父さんの用か」七「イヤ、エさうぢやア有ません、今日お父さんが手裏剣の稽古をして居たのを、私が外れて可笑しいから笑つたんです、處がお父さんが大變怒つて刀を抜て斬る様子ですから逃げ出

しましたが……人を助けるのは出家の役ドーカートツお父さんへ詫をして下さいまし」長「ウム又そんな事をしたのか、お前の詫言も二度や三度ではない、又十三や十四の子供が父を嘲けるといふことがあるか馬鹿メ、マア一トつ詫をして見やうか是から決して親を馬鹿にしてはならぬぞ」と光勝守の長善老師が一ト先寺へ連れ歸りまして、自分一人で宮本太郎左衛門無二齋の處へ参りまして一ト通りの詫を述べますと無二齋が「イヤ再々禪師の御厄介を掛けて相濟みません、然し此度は勘辨致しません七生迄も勘當仕ります」とキツパリいふ長善も無二齋の一徹を氣性を存じて居りますから長「然らばお詫は後日のことと致さう」と何か四方山の話をして其日は歸りました、ソコで此趣きを七之助に申聞かせ「マア兎も角も當分は寺に居て辛抱をしろ全体お前は武術に計り心り傾けたから自然氣が荒くなつて仕舞つたんだチツト學問をしろ」と是から毎日漢學を教へる、七之助も改心したか窮屈を辛抱して能く勉強して居りましたが、或る日の事、住職の用事で姫路の城下へ参りますと

不斗耳に這入つたのは例の竹刀の音で「ヤア〜」といふ掛け聲まで聞へる、立寄つて見ると冠木門に如輪奎の看板に金字を以て日の下開山劍法の元祖、有馬喜平次一陽軒信賢としてあるいま門から一人の武士が面小手脚を肩に懸けて出て來るから七「モシ此家は劍術の先生ですか」武「ウーム是は今姫路の城下で三百人の門弟があつて朝日の昇る勢ひの有馬一陽軒先生の道場だ」と威張て行つて仕舞つた、七之助心中で大に笑ひ三百や四百の門弟があるかどらいつて日の下開山だの、劍法の元祖とは片腹痛いヨシ〜我れ天に代つて彼れに異見を加へてやらんと、腰なる墨斗を取出しまして其金看板へ墨黒々と、井の中の蛙大海を知らず野村光勝寺内宮本七之助認之愆々として立去りました、此方は往來の者が是が讀んで驚ろいた皆寄り集つて七之助とは何者であらう大膽不敵の奴もあるもの有馬先生の看板を汚すとは無法の奴だと大評判、表の方が騒がしいから有馬喜平次が門弟を出して見せること此有様イヤ先生忿つて「宮本七之助とは何者であらう、我看板を汚せしは我顔を汚せ

しも同然此儘捨置く時は有馬の耻辱此上なしイデヤ其七之助と真劍の勝負を致し唯雄を決せん誰かある光勝寺へ参り彼が襟髪引摺んで否應いはさず引摺つて参れ」と大立腹、門弟共も一同腹を立てて「ソレツ行け」といふんで四五人の者、野村を指して参りました光勝寺の玄關へ「御免〜」といふ聲、幸はひ長善老師本堂に居りましたか「コレハ〜お武家様、何の御用でございます先づ此方へお通り下さい」門弟「當寺に宮本七之助なる者が居るかな」長「ハイ居ります」門「拙者共は城下の劍客有馬一陽軒の門弟ぢやが、七之助なる者が先生の看板へ井の中の蛙、大海を知らずと書いたに依つて、是は何か心あつての落書と心得るにより、是より直に其七之助を同道致し、先生と真劍の立合ひに及ばれたく、我々が其迎ひに参つたんだ」イヤ驚ろいた坊さん、夫は大變な事に成りました、然し其七之助と申す者は未だ十三歳の少年で、此頃慢心の病氣が起つて居りますゆへ、左様なことを致したものでありませう、兎に角當人に一應尋ねて見ます」と詞を濁して置て奥へ参り「七之

「助お前はマア大變なことをしたではないか、御城下の有馬の門弟衆が怒つて来たぞ、真劍の立合ひをするからといつて連れに来た」七ツム、連れに来ましたか有馬といふ奴はいよく禮義を知らん奴だ、先方から立合ひを望むなら此方へ出て来いといつて下さい」

第三回

光勝寺の住職は、據もなく玄關へ出て参りまして「唯今本人に申聞けました處、當人は慢氣の亂心でございますか、唯御詫は申しますが何分病ひの事で夫れに僅か十三歳の子供でございますから、愚僧が代つてお詫を申し上げます、何卒有馬先生へは貴方方から然るべくお詫を願ひます、愚僧も又お詫に罷り出ますに依て平に御勘辨の程を願ひます」と丸い頭を式盛へ擦り付けて誤まられて見ると門弟さうも八釜しいこともいへず「然らば一應先生へ左様に申上げて見る」とドヤ／＼歸つてしま

ふ、住職ホット一と息吐いて、是から七之助へ段々異見を加へました、此方は有馬の門弟が道場へ立歸つて此趣きを申しますと喜平次が「ウム亂心の小兒では致し方もない、能く幼少の折は疝症の爲に左様な病ひに罹る者もある、然し有馬の看板へ落書きされて、此儘にしたと有つては世間へ對して外聞宜しからず、何とかして相手が亂心の子供であるといふことを知らず工夫はあるまいか」と申しますから、門弟の中で一番高弟の折本久馬が前へ進みまして「私に一策がございます、斯様致しては如何城下に於て人通りの最も多く且廣やかなる處に於て、光勝寺の住職と其七之助と兩人を呼出し、大勢の人の前で首を下げさせましたなら、明らかに世間へ事が解らうと存じます此儀は如何でございます」有「成程夫れは能いな」折「ソコで兩三日前から辻々へ筆太に書いて張り札をましたなら、當日見物も群集致し宜しからうと存じます、又處は城下外れの並木が宜しいと存じます」有「然らば貴殿方に於て宜しくお取計らひ下さるやう」と其處で光勝寺へは今日より三日の後、住

職が七之助を引連れ城下外れの松並木へ参り、有馬先生へ詫を致せと申込む。住職も否といへば又た其の祟りがあらう、相手が剣術遣ひで門弟が大勢あるんだから、マアいふ通りにした方が能からう」と承知の由を答へる。折本久馬は姫路の城下辻々木へへ張札をしました、當日は城下外れの松並木に於て、野村の七之助へ對し、有馬先生が教訓を加へるに付諸人來つて見物を致されるようといふ趣き、聞くと皆城下の者は「ハ、ア此間の看板落書き一件だ、相手の七之助といふはドーフ人物が落書きをしたのはドーフ量見かしら、詫る積りか夫れ共試合ひでもするのい、教訓といふのは何をするんだらう」と大評判でござります、愈々當日となりますと並木は人で埋まる計り立錐の餘地も有ませぬ、有馬喜平次に於ては駒寄せの中に於て床机に懸れる打扮を見てあれば、黒羽二重の小袖に紫縞子の野袴、穿き揚羽の蝶の大紋付きたる紺緞子の野羽織を一着なし、白檀磨きの大小を殿めしく帯し、尺餘の鐵扇を右手に携さへ年齢四十二三、頭は四方剪り下げ髪に致して威有つ

て猛からず其風采は四邊を拂つて見へたりける、門弟凡そ五十人列を正して居流れ七之助遅しと待受けをする、老若男女の見物は有馬が教訓の有様を見ようとして並木の前後へ群れ集りました、稍暫らくして正午の刻と相成ります、是が合圖の時刻と相見へまして數多の見物人を押分け會釋して出立したる野村光勝寺の住職は袈裟衣の法服を着し、水晶の珠數を爪繰り乍ら七之助を召連れて参ります、見物見ると驚いた、七之助といふは雲突く計の大の男かと思ふと、十二三の少年だから、不思議に思つて居る、光勝寺は有馬喜平次の前に進み出まして「エー是は有馬先生でございますか、愚僧が光勝寺の住職長善にございます、今日は仰せの如く七之助を召連れ罷出しました、先日七之助が失禮は全く持まして少年の無戯と思召し平に御勘辨下さいまするやう願ひます、又本人は少し劍術の出來まする處から慢氣亂心の病ひが發して居ります、何卒宜しく御教訓を願ひます」有馬喜平次は最と尊大に「貴僧の詞添へなくば活して置くべき奴ではないが……コレ七之助とやら申

す小僧、其處へ出る……汝は予が看板に落書きを致したるは、如何なる所存あつて致したのちや、今日は其罪は宥して取らすが、其方の心体に困つては教訓を差加へて、門弟とも致してやらんと存するのだ』七「ウーム汝が有馬喜平次といふ平凡か」

第四回

有「平凡とは何んだ」七「俺のこころを慢心だといふ其方こそ表の看板に、日の下開山劍法の元祖などと、認めたるは是慢心のなす處、夫れゆへ井の中の蛙大海を知らずと認めただんだ、落書きではない是は其方への教訓だ、今日は七之助が喜平次に、教訓をして取らすんだ、……一同見物の人々お聞きなさい、今日は野村の宮本七之助が、有馬喜平次に教訓をしで取らせませす」と大音に呼ばつた、見物は面白がつて「コリヤア面白い、有馬先生が七之助に教訓を加へると張り札したのに、アノ七

之助がアペコペに教訓するんだとよ、子供でも七之助といふ者は大層なもんだ然し有馬先生も黙つては居まいドーなるだろう」と一同片唾を呑んで控へてる、此時有馬喜平次は怒り心頭に發し烈火の如くに成つて「子供と心得容赦致せば付け上り唯今の雑言過言最早勘辨罷り成らぬ、然し他人の劍法を平凡と罵るからは其方も太刀筋は覺へあらんイザ立上つて勝負を決しろ」と聞くが早いか七之助は懐ろに隠し持つたる一尺二寸の木劍出すよと見へしが飛懸つて喜平次が眉間を太たかにスパーつと打つた何かは以て溜るべき喜平次「アツ」と叫びもあへず眉間砕け目の玉は飛出し「ウーム」とバタリ倒れて相米てました、是を見ると門弟輩「スワ狼藉者逃すな」と早くも一人飛懸るを七之助は身を轉じ腕首掴んで投付ける隙間もあらせず二人等しく組付くを足を上げて一人を蹴飛ばし一人の頭上を木劍でポーン、此有様を見るより多くの門弟等「子供なりとて油断をすなソレ討ち留めろ」と一同に大刀を抜き速れて五十人が押取圍んで一度に斬て懸る七之助は身を陽炎稻妻の如くに振舞ひ多勢

を相手に争ひましたが、先方は真劍、此方は木劍逆も敵ひませぬ、光勝寺の長善老師は餘りのことに驚ろいて齒の根も合はず唯ウロ／＼と狼狽へるを七之助側に近寄りお「師匠様暫く窮屈乍ら御辛抱遊ばせ」といふより早く肩に引掛き逸足出して只驅出すを門弟は「ソレ逃るぞ押へろ」と追駆ける見物も七之助の働らきに驚いて只アレヨ／＼といふ計り七之助は播州龍野街道の綱干へ向つて飛んで来る五十人の有馬の門弟一散に跡追駆けて来る此時姫路を指して参ります立派な武士、供廻り十五六人召連れ槍、乗物も最と美事に徐々々来懸る体を見て七之助は駆寄りまして一禮を致し「お武家と見て御願ひの一儀あり只今間近き敵に追詰られ難義仕る者、某しは兎も角此法師一人御助けを願たく存じます何卒法師をお隠まい下さるよう」

来りまして「一寸物をお尋ね申す只今此處へ十二三の少年が坊主を背負ふて参りは致さんか何れの道へ参りましたかお示しを願ひたい」武士は頭を打振りまして「イヤ左様なる者は少しも見當申さぬ外をお尋ねあれ」門弟是迄は一筋道此處より追分けの二筋道何れか相解らぬのだお隠しなくお示しを願ひたい」武「イヤ知らぬと申したら存せぬ」門「御存知ない筈がない他に通行人がござらぬから尊公等より外に知るものはない」武「是は又怪しからん仰せ、左様に拙者をお疑ひあるは何故か御尊名を伺ひたい」門「拙者共は常城下に道場を開く有馬喜平次生先の門弟、折本久馬と申す者他は皆相弟子でござる」武「劍術の門弟たる者が武士の詞を疑ふとは其意を得ぬ武士の一言は金鐵の如し二言はござらぬ」といふ時に一人が「コレ折本氏其乗物の中が怪しいぞ」折「ウム成程、此乗物の中を拜見願ひたい」武「ナニ無禮なことをいはつしやるな若し断はりなく指でも指さば其分には捨て置かねぞ」と大刀の柄へ手を懸けました。

第 五 回

彼の武士の機幕が恐ろしいから門弟輩も見す／＼乗物の中が怪しいと思つたが仕方がない狐鼠／＼として立去りました。跡を見送りまして莞爾と笑ひましたる彼の武士は家來に乗物の戸を開かせ兩人を出し「最早御心配召さるな、拙者は肥後の國熊本の城主加藤肥後守清正の家來宮本武左衛門と申す者なり尊公等は如何なることに大勢の者に追駈けられたるや、御姓名もお差聞へなくば御打明しを願ひたい」此時長善が土に兩手を突きまして「拙僧は姫路在の野村と申す處に光勝寺と申す小寺の住職光善にございます、是なる七之助が子供にあるまじき振舞を致し其末、斯様な有様になりましたを危急の場合お救ひ下され有難う存じます其仔細を申しまするは斯様／＼と前々からの話を致します、宮本武左衛門は七之助の大膽な振舞を聞きまして且驚ろき且感じ』して七之助殿の身の上は』と尋ねられて七之助も大地に

手を突き『今日虎口の難をお救ひ下されましたお禮は詞に盡されませぬ、私事は元は足利の臣にて當時は野村の隣村新見村に住居致す吉岡無二齋と申す瘦浪人の大男にございます』と聞いて驚いた、宮本武左衛門が「扱は御身は吉岡無二齋殿の御子息なるか某しも其の以前は室町殿へ仕へ一者其折御親父とは武術の話し友達にして水魚の交はり淺からざりしが計らずも足利家退轉の砌り別れ／＼と相成り其の後御親父の行衛も知らざりしが播州にお住居とは神ならぬ身の知るよしもなく今日不思議にも御子息に逢ふとは喜ばしい定めて御不自由のことも候はん鬼に角久し扱りにて御親父に面會致さんイザ御案内を下さるよう』いはれて七之助は赤面して頭を掻き『面目次第ないことですが私は父より勘當受けて居ります』武『ウム價か十二や十三の幼少で勘當とは合點が參らぬソリヤ又たドーいふ譯でござる』今度は光勝寺が口を出しまして前からの一件を物語る、武左衛門又た驚ろいて何れもあれ拙者に思ふ所もあれば光勝寺殿吉岡殿へ御案内を願ふ』と是から新見村へ起きます、此

方は吉岡無二齋は親の慈愛の心から我子七之助を勘當致しましたが聞けば此頃姫路の城下にて有馬の看板に落書きをしたとの噂、又光勝寺が迷惑して居ることならんと心配の處へ十四五人の供人を連れ光勝寺を案内に立派な武士が参りまして「頼む」といふ聲、長男清三郎が立出まして「何か御用にごさいますか」光「是なるは御父上の御舊友宮本武左衛門殿今日計らす途中面會致したる處より御案内を申し上げたお父上へ宜しく御披露をお頼み申す」清三郎此ことを父へ通じますと驚いた無二齋が一間へ通す貧乏の中ゆへ心計りの茶菓盆、時の挨拶済んで酒肴の待遇し是ごても尾羽打枯した浪人のこと、ホンの手造りの野菜を肴に濁り酒、然し舊友の間柄却つて數の珍味より格別の味、武左衛門は不自由を察して、吉岡氏此後は又打絶へぬよう御入懇に願ひたい御不自由あらば何なりと御申開けを御遠慮なく願ふ」無二齋何時に變らぬ御厚意千萬忝けない」武「ソコで吉岡氏拙者より改めて願ひがござるが舊友の交み義に御承知下さるか」無二齋何なりと此身に叶ひしことなれば……」

武「夫れ聞いて安堵致した、お願ひは余の儀でもない、御勘當なされた七之助殿を拙者養子に申受けたい……コレ光勝寺殿七之助殿を伴ひ是へ」と申すから長善が七之助を召連れる、流石に猛き無二齋も勘當はしたものの、惜いとは思はぬ親子の情、茫然として詞もない、猶武左衛門は膝を進ませて「拙者子に縁なくして四十を越へて家督相続致すべき者なし、然るに尊公は二人の男子を持たれ長男は無論御家督ならん、御勘當なされし七之助殿は何れ他へ御養子ともなざるゝことか又此儘に一生の御勘氣なるかは知らねども何卒拙者へ養子として下さらば有難く存するが何と此願ひ叶へては下さるまいか」

第六回

太息を吐きましたる無二齋が「ア、持つべきものは親友なり、拙者の心中を察し亂暴なる次男を養子にと望まれる其お志、實にお禮は詞に盡されぬ如何にもお望みな

七之助は勘氣を許し改めて宮本家へ遣はさん、無法なる小作御遠慮なく御折檻下され何卒人らしく御教育下さるよう』武御承知下すつたか忝けない、七之助殿異存はござらぬか 七私如き無法者を望んで御養子となさる段有難く存じます』
無七之助今日よりは亂暴を慎しみ武左衛門殿を父と敬い孝道を怠つては相成らんぞ』と是から段々教訓を加へ、日頃可愛がつた光勝寺も大層喜び安心をして門途を祝ふ、七之助は兄清三郎に父の身の上を頼み名残りを惜しむ無二齋は食しき中にも何かと旅の装束支度萬端を致す、武左衛門は金子百兩を紙に包みまして』是れは些少なれども申し受くる養子の祝儀結納としてお納めを願ひたい』と差出しまして無二齋の辭退するのを無理に收めさせる、無二齋も我子の身祝ひなりといはれて是非なく是れを收め、是より名残りは盡きませぬから程能く致して其の日の中に發足致します無二齋、清三郎と長善も村外れまで共に來つて影見ゆるまで見送ります親子兄弟の愛情は左もあるべきこととございます、翌日光勝寺の住職は有馬喜平次の方

弟が如何なることをするかと其の崇りを恐れて當分は身を雲水に任せて飄然として何處ともなへ立り出ました、此法師は琵琶の上手でございまして後年道人となり諸國を漫遊致し其の頃ほひ琵琶道人と世に珍重されたるは此人でございます、扱又有馬喜平次の方は門弟共が光勝寺へ翌日参つて見ると住職は行衛知れず是非なく我師を殺害したる悪童子、官の成敗を受けせんと城主木下勝俊殿へ訴へますと檢屍の役人出張して取調べ城主へ上申すると七之助を御成敗になるかと思ひの外一劍道指南者にあるまじき十三歳の童子に殺害されるとは自業自得なり』と其儘にお捨置き、門弟共は據るなく泣き寐入りと相成りました、吉岡無二齋は後年毛利輝元侯に付へて英名を揚げられました、先づ一方のお話は枝葉でございますから段落を付けて置いて是から宮本無三四の出身に取掛ります、夫から仇敵佐々木巖流の生立ちも申上げなければなりません、家を作るにも先づ石の土臺から築上げなければなりませんので此一二席は土臺から手斧始め建前上棟式と思召してお開濟みを願ひます

宮本武左衛門に於ては七之助を引連れまして日を経て肥後の國熊本城下へ歸り
ます先づ登城に及んで主君加藤清正公へ京大阪の御用の次第逐一に言上に及び、清
正公より遠路太儀とお詞を蒙り、扱夫れより吉岡無二齋と古朋輩でありし頃より
此度養子として其一子七之助を貰ひ連れ歸りたる趣きを申上げると、素より武勇の
清正公「豫て承はる無二齋といへる名人の一子其方の養子となりしは過分に存する
難ては召出すべき間、大切に養育せよ」との御懇命を受け武左衛門而自身に餘り御
禮を申上げて下城致し此旨七之助にも物語り、「扱七之助、明日は當國阿蘇ア蘇に鎮
座まします阿蘇大明神に參詣致せ是は當國第一の神にして靈驗も著るしきことゆへ
先づ熊本城下に住む者は皆一人として信せぬ者はない、參詣致して參れ」七「委細
承知仕りました」と翌日家來草履取り二人召連れまして登山致しましたる處、幸
ひ其日は祭日に致して參詣者と群集致し御神樂料を納むるもの引きも切らず、樂師
は妙なる樂を奏し巫女は衣の袖を翻へして舞ひますが七之助主従は參詣後、御神樂

料を納めて武運長久の祈禱を致します、然るに七之助は女巫の一舉一動に目を着け
一心に舞ひを見て居る、餘り長くなりますから家來も「若様モ一お歸りなつては如
何でございますか」といつたが「ウーム」と迂鳴つて見て居る、家來が草履取りに
「ハ、ア若様は巫女にボット來たんだな十三や十四で女に恍惚るとは未だ色氣は早
い」と小聲で話をする、七之助は未だ詠めて居る。

第七回

暫く経つて七之助「ア一思ひの外、手間取つたイザ歸宅致さう」といふから家來草
履取りも後に尾いて戻りました「七」お父上只今戻りました「養父の武左衛門が、
「ア、七之助阿蘇大明神は宏大な物であらう」七「へー見るからに神々ぞ致した宮
でございました、仰付けの如く武運長久を祈つて参りましたが今日改ためて御父上
へ七之助が折入つての御願ひがございます」武「ウーム……其願ひとは何事だ」

七「今日より一ケ年の間御暇を頂戴致したく心得ます」武「ことに依れば以て遣はすが、何處へ参る」七「阿蘇山へ籠ります」武「彼様な山中へ籠つてドーする積りだ仙人にでもなるのか」七「少々思ふ所もあり且大明神に祈誓を掛けまして武藝上達を願ひ、一心に膽を練り山中の修行が致したうございませう」といふ、武左衛門も流石に人物ですから七之助の將來を見込んで養子とした位ひゆへ「イヤ宜しい一ケ年暇は遣はす、其方思ひ通りに致せ」七「有難う存じます」武「して食物等は如何致す」七「其御心配は御無用に願ひます、衣は一枚を以て寒暑を凌ぎ、食は草根木實で足りませう、臥す處は木の根を枕に草を床、岩の狭間に夜露を避けませう、武術者は此位ひの難義苦行を致さねば名人とは成れませぬ」武「イヤ流石吉岡無二齋の子七之助、能く申した然らば随分共に怠りなく修行致して参れ」と茲に暇を告げまして七之助は阿蘇山へ昇りましたが其後で七之助の供をした家來が「旦那、若様は何處へ行らしたんです」武「武術修行の祈禱を神へ懸ける精神を以て一年の間、

山籠りに阿蘇山へ登つた」家「駄目です」武「駄目とは何んだ」家「折角旦那様が播州からお連れなすつた御養子を悪くいふのではございませぬが、私は彼の若様には呆れ返りました」武「ウーム今日阿蘇山に於て何か妙なことがあつたか」家「ありましたとも……東のお神樂殿でわ十三四の奇麗な巫女が兩手に劍を持つて踊りますね」武「ウム」家「彼の巫女がねチョイと鼻筋の通つた目のパツチリとした口許の締つた愛嬌のある飛んだ能い女で折々見物の方をロヂリ〜と可愛い目付きで見ますドーも溜らない色目で……ねへモー十三四ですからエヘ、」武「妙な笑ひやうをするな」家「彼の目付きに若様が見惚れて半時もお神樂殿の前に立往生……呆れ返りましたね今時の子供は、若様は軀は大きくても未だ十三だといふちやア有ませんか今から助兵衛では」武「黙れ、譬へ女に見惚れやうとも差問へはない男は女を愛し女は男を慕ふが人の情だ、七之助が女の爲に自籠りを致したか又は全く神への祈誓を懸けに参つたかは後に相解る、子を見る事親に如かず、汝等の知つたこと

ではない」と其儘に相成りました、滿一ケ年を経て戻つて参りました七之助、見る蔭もない姿で玄關へ頼むと音づれます、家來式臺へ出て見ると驚ろいた黒羽二重の紋付きは赤羽二重の黒紋と變じて袴はどどくに破れ跣足で髪は鬘を以て束ね色黒く目計り光つた男、能く見ると七之助ですから、ヲ、若様でございませうか大變なお姿にお成んなすつたねへ」七「お父上に七之助只今戻りましたと申上げて呉れ」家「へい畏りました」と奥へ取次ぐ武左衛門殿飛んで出立して「ヲ、七之助か、一ケ年の心勞察し入る先づ奥へ」と手を取つて奥へ入れ「して其方阿蘇山へ籠りしは如何なる處に感じての思ひ付きぢや又如何致して一人修行して参つた」

七「左ればお父上お聞き下さい、昨年阿蘇大明神参拜の砌り神樂殿に巫女が二た振りの劍を携へて舞ひまする姿を見るに閃めく刀は天地に象どり陰陽の左右に別れ、又合して一刀は上段、一刀は青眼となる自由自在の變化極まりなく其妙に感じ考へまするに、今劍道は種々あれど兩刀を持つて戦ふ者なし何れ左右の手を分するものな

れば右劍を以て敵を防ぎ左劍を以て是を斬らば一舉兩全とは此こと、存じ一ケ年の間大明神に祈誓を掛け松柏の枝葉を師と頼み修行致してございませう」武「ウーム然らば其兩刀は利あるか害あるか父と立合つて得失を試みよ」

第八回

宮本武左衛門は赤檜蛤刃に削り上げたる木劍を取り、庭の芝原へ飛下りた、七之助に於ては阿蘇山中に於て刀物も無ければ檜の木を枝を割つたる石の尖りに削り叩いて鍛へたる木劍、右劍二尺三寸、左劍一尺八寸を兩手に携さへ「父上御免」の聲諸共、同じく庭へ立出でた左右の手に素振りをして前に進む、武左衛門も夫へ出で双方構へて立上る、家來驚いた「お神樂の巫女に惚れて山へ登つたと思つたら修行して來てお父さんを打殿る積りなんだ、養子も養子親父も親父、變り者の寄り合ひだ」と感心して居る「ヤア」「ヤア」と呼吸を計つて打合ひとなる、七之助天地に

擧げて氣合ひを窺がふ此時養父武左衛門は「エイ」と嗚叫いて打込んだ。一之助は兩刀を十字の形に直して打込む父の木劍を十字に受け止めた武左衛門は十字に狭れた、木劍を引こうとするが引けない、押切ろうとするが押切れない、木劍は前へも後へも外れず膠を以て粘着たる如く離れない、是非なく自見流の極意及返し骨切りの奥の手で「ヤツ」と十字の兩刀左右に崩して開かせた、七之助又天地に構へると武左衛門は木劍を投げ「ア、天晴れなり僅か一年の修行にて斯ばかりの上達感服致す、然し乍ら今受止めたる十字の兩刀を一劍を以て破らるゝ様では未だ修行が足らぬ此上とも一心に出精を致し家名を擧げよ」七之助も兩刀を下に置き、未熟乍ら自身に心を凝したる二刀流、玄妙を得るまで出精仕ります」と平伏しました是が後年に至つて宮本の十字止めと申して眞面二刀流の極意でござります、十字に打込んだらば、後へも先へも始末が付かないといふ此十字を破つた人は天下に唯一人しかない是は又後のお話でござりますが、武左衛門は猶も我子を思ふの一心から

戒しめますには 武七之助、汝少しく武術に秀でたりとも決して心を慢じては相成らぬ又嗚呼がましく自身に一派を立て二刀流を開くと申すが劍術には其法あり因縁あり起因あり、其起因を承はらう」七「夫れこそ心中に考へあり」と左右に二刀を持つて立上りまして「抑も二刀流と申すは左劍を以て陰とし右劍を以て陽とす、陰陽何が發するやを知らず、是れ天地未だ開けざる以前、混沌たる形なり是を一變して兩儀となす、是天地開闢の形容なり、右劍は陽にて天なり依つて太陽の構へと名付け左劍は陰にて地なり名付けて太陰の構へとす此陰陽合して萬物生す、因て兩劍合して十字となる又左劍を右へ寄せ右劍を左へ延す是即ち七曜九曜の法にして二十八宿の千變萬化、變に應じ機に臨みて進退自在に働らく、然りと雖も左右の劍に心を散らさず敵に向つては眞面して面を振らず、故に稱して眞面二刀流と申すなり、開かんとする流名の因縁件の如し」武「ウーム思ふに優りし汝が智識成心を致した」七「然し未だ少年の淺識、何卒父上の御太刀筋を以て御助力を仰ぎます」

是から父武左衛門に付いて二刀流を鍛錬致します、扱是からお話が二つに分れて佐々木巖流といふ宮本無三四の仇敵の傳記に取懸ります、此巖流は又古今の達人、無三四に取つて大敵でございますが、仇討ちの講談は十中の八九は、討つ者ばかり豪くて仇は只悪黨のみでございますが巖流ばかりは中々立派な傳記があり無三四より家筋も宜しいのであります眞の英雄ですから、此一二席は仇敵の方を申上げてから本傳に移ります、永祿年中に江州の守護職たる佐々木六角入道承禎といふ人に一人の妾がありまして其名を松ケ枝と申し生國は出羽の國最上在で容貌人に勝れたる處から承禎は殊の外松ケ枝を寵愛して居ります中に男子出生致し其幼名を久三郎吉高と名乗らせました、是を後に佐々木巖流となる者、然るに六角入道承禎は足利將軍義昭公に背くことがありまして、義昭公には尾州の織田信長朝臣に命じて是が居城たる江州觀音寺の城を攻めさせました、承禎に於ては逆も織田の猛勢に敵し難きを覺りまして永祿の十一年九月十二日城を明渡し家の子郎黨とも皆散り、くゞ成りました

上を下への大騒動の中、妾松ケ枝は懐ろに久三郎を抱きまして承禎の生死も知れず多分は討死を遂げたるものならんと、断念めまして泣く／＼城を遁れ出で、貯への金子を持ちまして、慣れぬ旅路を漸く出羽の國最上の己が生れ故郷へ歸へりました。

第九回

生國の最上へ歸つて見れば、杖柱とも頼む父母は何日か冥途の旅立し、近隣の者に慰められました、彼是れ致す中には貯への金も失なり今は是非なく松ケ枝が變らぬ色香も振り捨て、乳香兒を抱へて賃仕事、廻らぬ世帯の糸車、細き煙りも一ト筋に廻せば早き年の數、隙行く駒に十三年、久三郎は十三歳ですが此童子生れつき骨太くして力量は人に勝れ才智あつて容貌逞ましき相恰です、母は貧苦の中にも是のみ樂しみとして居りましたが、不斗松ケ枝は風の心地と打臥しましたが基で途に枕も

上らぬ大病、早旦夕に迫る一命實に人間は病ひの器と申して俺は壯健だなんて自慢はいへぬものでございます、母の松ヶ枝は早臨終を察しまして久三郎を枕近く呼び寄せ「コ、コン久三郎、母はモー今日翌日を知れぬ命死んで行く身に未練はないが斯る片田舎に木樵山賤と同じに暮せど、御身は賤しき人の胤ならず、誠は近江源氏の嫡流にして佐々木六角入道承禎殿の胤なり我亡き後は一心に文武の道に志し、家名を興し美名を天下に擧げて下され、假にも悪き道を學び邪しま非道の行ひある可からず、是のみが冥途の障りお前の出世が我爲に千部萬部の經文より名僧智識の引導より嬉しく成佛、ますぞや」と咳入る聲も枯れ、涙乍らに申します、久三郎も目をしばた、きまして「お母様、御心配なさいますな吃度天下に名を擧げるやうな英雄豪傑になつて御覽に入れます、況して近江源氏の末と聞きますれば御先祖様も守つて出世さして下さることでございませうマアお母様心細いことを被仰るな未だ、御病氣は見直す處もありますから氣を大きく持つてお在なさいまし」と

愚めたが、早追々に迫り来る呼吸の忙しく哀れや其夕べ亡き人の數に入りました、久三郎が「ワツ」と泣く聲に村人も駈け付けてこの体を見たがモー仕方がない正直な田舎の人々寄つて群つて葬式から萬事の始末を付け、久三郎には力を添へて七七日の供養を濟せ、是れから農業や柚の仕事で久三郎に教へて食ふだけの賃錢を取らせるやうにしてやる、處が久三郎は母の遺言に近江源氏の末なりと聞いてからは唯百姓や柚を賤しき者と見下げ果て仕事をしないで、隙があれば、薪を木の枝に釣して自分も薪を取り「ヤツ」と其薪を打つ薪は勿ね返つて来て久三郎の面上へ向ふ、是を又「ヤツ」といつて打返す、近所の者は是を見て「松ヶ枝後家の倅は妙なことをするなア」と不思議に思つてる久三郎は是で劍術の稽古をして又或る時は谷川の深淵へ飛込んで水練の稽古をする「ヤア此寒いのにな久公め、川の中へ飛込んで彼奴此頃氣が違つたかしら」と評判をして居ります、茲に出羽の國山形の城主其高二十四萬石最上出羽の守義房殿の家臣に野田大膳といふ劍道師範役がありまして今日

は一日の暇を得ましたる處より櫻山へ花見を催さうといふので辨當吸筒を小者に持せ夫婦の外、一子豊丸といふ二歳の愛兒を乳母に抱かせまして櫻山へ参りました。時は彌生の中旬、花は爛熳として咲き亂れ宛然銀世界の如く、岩間の躑躅は恰かも毛氈を敷詰めたる如く、得もいはれぬ春景色、遠近の老若男女皆笑ひさやめいての樂しみ、大膳も莞爾り笑つて「ア、極樂世界とは此事、ア、愉快なる事である、コレ此邊へ毛氈を延べろ……乳母よ其芝生の上で豊丸を遊ばせたら浮雲無くて宜しいサア奥や割籠を開け」と主従五人が一つ薙に睡まじげに盃を舉げて一日の樂しみ一家團樂の愉快とは此事でございませう、スルト頑是なき幼兒の常で野邊に咲き亂れましたる莖、蒲公子の花を彼れよ是れよと欲しがる乳母は摘みとつては手に持せて居りましたが不斗彼方の谷間の方に數多の子供が遊ぶ様を見て是を指さしまするから乳母は何心なく豊丸を抱いてその谷間へ下り立ちました、數多の子供は苔蒸したる岩の邊りに落散る小石の白き青き色々を拾つて居る乳母も共にその小石を拾つ

て和子に持せ、喜ぶ顔を見たいと思つて左りに豊丸を抱へ右の手を延す途端、ドいふ工合ひか体は前へ反る左りの手が緩んだからザブーンと豊丸の軀は逆巻く急流の谷川矢を射る如き早瀬へ水煙りを立て落入る、乳母は後ろへバツタリ尻餅を沓ましました。

第十回

漲ざる急流は最上川の枝流で水深く蒼々として水面に浮きつ沈みつ豊丸は僅二歳を一期として水底の藻屑とやらん有様に乳母は泣聲を上げて「助けてへ〜」といふ聲に飛來つたる野田大膳二十四萬右の指南役とはいひ乍ら親子の情は格別、人目を耻ぢず「豊丸よ〜」と呼びつゝ下流へ追ひ行く這入るにも這入られぬ急流、奥方は女のことゝて狂氣の如くになつて同一唯「アレヨ〜」といふ計り、この時下流の方に釣を垂れて居りました一人の童子、己が衣類を脱ぐよと見へしが、ザブー

リ水中に躍り込んだ矢を射る急流に押流さるゝを事ともせずして豊丸に近寄り小脇に抱いて片手薙りに泳ぎつゝ岸に着いて攀ち上り「ホッ」と息を吐きあへず、豊丸の水を吐かせて介抱した一心通じて「ワッ」と泣き聲を上げたる處へ飛んでまいりました野田大膳が「何處の童子かは知らぬが早速の働らき過分に存する拙者ことは當城の主最上公へ劍道御指南を致す野田大膳と申す者、先刻より御身の相好を見るに賤しき姿はせられても自然と備はる勇士の相貌、定めし由緒ある人の子ならんいかなる次第にて落魄れ給ふや、御身分御打明しに相成れば又御相談相手とも相成らう」と最と慇懃に陳べましたる處から童子は面にかゝる濡髪を掻き上げまして大地に跪き「これは有難き仰せ私ことは、この最上川の遊りに詫しき住居を致す孤兒にて佐々木久三郎と申す者、遠く先祖を尋ねれば近江源氏の流れを汲む佐々木六角入道承禎が妾腹の一子、父は江州観音寺の城に亡びてより母の故郷に引籠り世を忍ぶ中、母に死に別れ便りなき身の上何分共に御引立てを願ひます」と答へました。

大「さては我目鏡に違はず由緒ある人なりしかこの上は我子を助け下されたお禮に我方に於て御教訓致し申さん是より直に我家へお引取り申す」と運よくも野田大膳へ引とられました、野田の太刀筋を受けて文武兩道の修行に及ぶこと五ヶ年、別にお話もございませぬ、モ一久三郎も十八歳師匠大膳の代格古も出来る身の上と相なりますと、この久三郎は巧言令色といふ性質で口が旨い、上に諂ひ下を蔑ろにいたし己れを慢じて人を誹るといふ佞奸邪智の曲者、英雄には違ひないが心が曲つてる奸雄といふ人物、其上大志を抱いて居る、俺も先づこれだけの武術が出来ればこんな出羽などの山中に居ては一國一城の主とはなれん、是から日本國中を巡つて腕を磨き一國一城の主となつて父六角入道の後を継ぎ美名を天下に輝かさん」と決心しました、ソコで師の野田大膳へは体よく武術修行に出ると暇を乞ひまして遂に出羽の山形を發足いたし越後國新潟の津より越中に渡り加賀越前より近江へ出で不覺に母が昔のことなど思ひ出まして夫から五畿内を廻り伊賀路より伊勢の大廟を拜し五

十鈴川の邊りに憩ひまして石に腰掛けて居ると夏のことで涼風颯々として肌に通ります。久三郎眠氣がさしてグツスリ寝込んだが何かは知らず頭にバザ／＼と障る物があります。目を覺して首を上て見ると川邊の柳が頭に觸れるので「ハ、ア無心の柳が風のまに／＼我顔を打つたるものか、吹けば靡くといふ劍道の奥儀は茲にあり心なきの柳とて唯徒らに見過すべからず、今日よりは岸の柳に因みて佐々木岸柳と名乗らん、又野田大膳の子を救ひしも最上川の巖の流又音は巖流に通ず左なり／＼」と自分で感じて自身に佐々木岸柳と名乗ることゝしました。是より尾張國へ出で熱田太神宮へ詣で三河を過ぎて遠江國へ差懸り秋葉山へ參詣致さんと山へ登つて來ると松柏は生ひ茂つて晝猶暗き深山、世に名高き三尺坊へ登山の途次、爪先上りに登つて來ると此方の藪よりヌツと現はれたる二人の大男、淺黄大紋付の帷子、尻引かちらげて何れも大刀を携さへ「コレ武士、我等二人は此邊りの野武士だが此頃は仕合せ悪く一杯の飲料にも乏しき折から通り懸つた掠鳥の懐ろ重げの足運び、衣服まで

は剥ぎ取らぬ財布だけは置いて行けツ」岸柳呵々と打笑つて「ウームさては汝等は此街道に旅人を惱める山賊だな、我こそは近江源氏の流を汲ひ佐々木岸柳吉高なり龍の願の珠に戯れ眠れる虎の尾を踏むとは汝等がことだ、ならば手柄にとつて見ろ」賊「エ、無益の間答聞く耳持たぬソレツ殺んで仕舞へ」と立向ひました。

第十一回

山賊二人を相手に岸柳が上段下段虚々實々暫らくは火花を散らして戦ひましたが、逆も山賊は敵ひませぬ受け太刀となる處を隙さす一刀背打ちに一人を打倒し躍り込んで、一人の首筋掴んで頭顱倒、投げ付けた、逃げんとする兩人を一所に引摺つて大地に押伏せ、一人づゝ刺殺さんとなりました、イヤ驚いた兩人の賊は手を合せまして「暫くお待下さいまし 岸」此期に臨んで卑怯な奴、汝等非道の働らきをなす良民を惱ます大悪人、天に代つて某が誅伐を加へるんだ」賊「斯様な英雄の劍士と知

らすして無禮をいたしました段は幾重にもお詫申上げます、何卒一命だけはお免しを願ひます」岸「意久地のない弱虫輩、然し先刻よりの太刀筋は相應の覺へある技量であるが過つて改むるに憚ること勿れと申す金言もある汝等愈よ心を改ため本心に立歸るとあらば随分勘辨もしてとらすが汝等の生國は何國ぢや」と兩人を引き起してやると「へー我々兩人生國は甲州にて姓名は青山門平、これなるは押田佐吉と申し元は武田入道信玄に仕へ居りましたが武田家滅亡の後は浪々の身となり寄邊なき儘、斯様なことをいたして果敢なき月日を送り居りました、哀れお慈悲に一命を助けられ今日より先生の御門下となしくださるならば身を碎き骨を粉にして一命の大恩を報じます」と涙を流して申す偽はりとも思へませぬから岸柳も幸はひ何國へ行くにも門弟一兩人ある方がなにかの都合が宜しうございますから「然らば兩人が望み通りにしてとらす、後日決して又悪心を起しては相成らぬぞ、我は出羽の國山形に於て最上公の師範野田大膳が高弟にして其先祖は近江源氏の嫡流江州の守護

職たる佐々木六角入道承禎が一子なり、邊境の地に居つては英名を擧ぐることを叶はずと思ひこれより京都へ登りて雄名を輝さん聞説惣臣秀吉公は今日日本の主將として武威四海に輝やき専ら武勇を好み給ふとある、我も又これに仕へて一國の主とも相成らんと存するなり、汝等も左様心得ろ」と申聞かせますと兩人は「それは願ふてもなきよき師に出合しました我々の幸ひドーカ御同道下さるやう」とこれから二人の弟子が出来て佐々木岸柳は大手を振つて東海道から日數を経て入浴いたしました、先づ四條の橋詰大和屋へ宿を定め宿の主人に相應な家を探させ松原通りに一軒の賣家を買ひまして大和屋には金を遣つて諸事世話させ立派に道場を構へました、表構へは人の目を驚ろかす計りの大看板を上げた日本一劍術指南所、柔術十人詰、廿人詰飛道具試合所、佐々木岸柳源の吉高と楷書を以て書き現はしました、サア浴中の評判は一ト方ならずア一いふ看板を擧げる位ひでは餘程の名人であらうとその頃は太閤の御治世ですから百姓町人でも皆それく劍道を學びまたし時分、その

評判を聞いて入門する者も多く道場は大繁昌、スルト洛中洛外の劍客者并に諸國から入り込む武者修行の浪人共はこの佐々木の大看板を見て岸柳の高慢を憎み一ト手立合つてこの看板を外させ呉れんと折々は試合にくるが大略負けて逃げ出すが多い、愈々岸柳の名は旭の昇る勢ひ日本一と譽めそやす、これを聞いて大に怒りましたるは豊臣家五奉行の一人増田右衛門尉長盛の家來にて浮島嘉膳といふ自見流の達人、早速主人長盛の前に出まして「恐れ乍ら申上げますこの頃松原通りに於て日本一劍術指南所、柔術十人詰廿人詰飛道具試合所と大看板を上げましたが大閣殿下お膝下をも辨へずして廣言、因て君のお許しを蒙りなば彼が道場に赴むき取控さ候上着板を取外して呉れんと存じます何卒この儀御免仰せ付けくださるよう願ひ奉ります」と申上げると増田右衛門尉殿一寸御思案遊ばされて「ウーム高慢の大言は憎さも惜しと存するが我今五奉行の一人として斯様なことを家來に許し萬一汝が彼に打負けたる時は我家計りか豊臣家の耻辱なり、その岸柳とやらんが大看板は浪人の身

過ぎ渡世に弟子をとらんが爲の手段なり、僅かの薬法にて萬病を治すといふ薬の能書きと同日の論、皆世渡りの常なれば決して咎むるに足らず捨置け」嘉然しながら片田舎の地は兎も角一天萬乗の君が御座遊ばす王城の地に於ては太閣殿下の威徳を落すに似たり、曲げてもお免しを蒙りたうぞんじます」

第十二回

増田右衛門尉も是非なく「然らばその佐々木岸柳といへる者を當家へ呼寄せてその方立合つては如何」浮島嘉膳も大に喜びまして「然らば御邸内の馬場に於て御見物遊ばすやう」とこれから家臣横井瀬平次を以て岸柳方へ使者に遣はしました、明日正午より御尊來を乞ふといふ鄭重なる申込み、岸柳はそれと聞いて心中大に喜び「委細長り奉る」と返答をして使者を返し、門弟の青山と押田に向ひまして「先づ日頃の願望成就の時到了た、日本一の大看板をだしたる處より計らず太閣殿下の

お耳に入つて、増田右衛門尉を以て俺の腕前を見ようといふんだ明日こそ増田を驚かして一國一城の主ともなる階梯ともする心得、汝等兩人と小者の仁助を連れて行こう」とその日の中に何かと支度を致し翌日の正午過ぎと待受ける、此方も浮島嘉膳が明日は腕を擦つて待受けます、扱翌日の正午と相成りますと増田邸の玄関へ佐々木岸柳主従四人が音信れますと、昨日使者に立つた横川瀬平次と山川半平兩人出迎へまして「能うこそ御尊來、先づ此方へ」と案内をした一ト室の中、懸て立出ました浮島嘉膳が「拙者は當家の臣浮島嘉膳と申す者、昨日は主人より御尊來を願ひましたる處早速の御來駕、満足の至りに存じます、何卒先生の日本一といへる劍道、并に飛道具試合拜見仕りたく偏に願ひ上げ奉ります」岸「イヤ承知致した五奉行の随一たる増田殿御面前に於ての晴れの業、拙者も譽れのこと存じます」

浮「然らば暫時休息の上、馬場へお運びを願ひます」暫らくして馬場へ案内を致す、正面に假に棧敷の設けあり三方に幕を張らせ右衛門尉殿棧敷へ出座になる左右

には増田の家臣山川半平、家所帯刀、福田源次郎等始めとして一同居流れる、岸柳の姿を見ると剪下げ髪は肩を打せ黒羽二重に四ツ目結びの紋附たる小袖に紋綾の十徳を着し縹珍の袴を穿き朱鞘の大小を帶し右手に鐵骨の扇子を携さへ悠々として一禮に及ぶ、此方は浮島嘉膳同じく黒羽二重の小袖に緞子の踏込みを着用して罷り出で互ひに一禮に及び、さて岸柳に向ひまして「今日主人の命に因つてその許のお相手を仕る……お手柔かに……」岸「拙者よりも願ふ所……然らば御免」嘉膳に於ては三尺八寸ある刃引きの居合刀を以て立向ふ、岸柳は鐵扇を以て向ふ様子嘉膳心中大に怒りを發し、岸柳なりとて鬼神にては豈夫あるまじ、隙を得たれば唯一刀に打据て彼が驕慢を挫いで呉れん」と二尺八寸を一段に構へ鐵壁も砕けよと計り振り下ろした岸柳透さず飄然と潜つて手元へ近寄るよと見へしが持たる鐵扇にて嘉膳が肩口ボーンと打ち其儘飛下つて一禮に及びます、この早きこと電光石火の如く、目にも見へぬ位ひ、浮島嘉膳赤面して引退ぞく、岸柳は自若として「兎相の段御免

しや下さるやう此上は得物は更に嫌申さず槍薙刀なりとも苦しからず今一ト勝負仕
つらん」と鼻高々と申しますが今増田家無雙といはれた嘉膳が今眼前に何の手もな
く打負たることゆへ誰あつて一人立合はんと申す者がありませんの然るに一人夫へ進
み出ましたは松並平兵衛と申す者「某未熟には候へども寶藏院流の槍を遣ひ候へ
これにて勝負を決し申さん」岸柳莞爾と打笑ひまして「槍は又願ふ所なり貴殿は眞
槍にて向はれるよう拙者は鐵扇にてお相手仕らん松並平兵衛大に怒りまして其許いか
に業に長せしめて某を小兒の如く侮るは無禮でござろう」岸「こは又御尤なる仰せ
なれども是は決して貴殿を侮るに非ず、眞劍の立合致す時は某しは素より浪人の身
もへ只今此處に於て落命致するも一命惜むに足らず劍道に死するは此身の本望なり
夫に引替貴殿は御主人のある大切の御身因て拙者は鐵扇にて事足すイザお相手仕
升」松並愈怒て二間柄穂長の槍、鞘を拂て小脇に抱込リウ〜と引捨て前へ進む
岸柳鐵扇を搦てヌーツと立デリ〜と進で来る「ヤツ」と松並が稲妻の如く突て掛る

第十三回

岸柳に於ては眞槍の閃めくを事ともせず、鐵扇を以てあしらう、松並平兵衛焦つて
突掛る槍はビュ〜と岸柳の胸元望んで来たヒラリ體を開かれたから槍は空を突いて
松並が「残念」と取直して手許へ繰込み又も電光の如く繰出すを、岸柳透さず鐵扇
を以てポーンと下から上へ刎上げた松並は其餘力でト、トと背ろへ下つたが「無
念と」又取直す槍の千段巻きをスパツと岸柳が鐵扇にて打ちました平兵衛先生腕首
痺れて思はず槍を取落した斯うなると平氣の平兵衛では居られない……岸柳遙かの
後ろに飛下つて「失禮御免」と平伏をしました、一同は手際に感服致して唯酔ふた
る如く茫然として再び立向はんと申す者が御座いませぬ、増田右衛門尉を始めとし
て列座の面々互ひに顔を見合せ舌を巻くのみ岸柳は形容を改めまして「此上は槍劍
の勝負は是迄として飛道具の勝負、弓鐵砲の類にて御相手仕つらん、此時末座の方

に當つて一人大音上げまして「只今岸柳が申す處傍若無人なり弓と申したるこそ彼が運命の盡きたる處、不肖乍ら某し覺への強弓受けられるものならば受けて見よ」と躍り出るを人々誰ならんと見てあれば増田が家に自慢の三傑其一人たる早瀬左太夫と申し無双の強弓、矢繼早の名人塗込藤の弓に矢三筋を取り添へて立向ひます、岸柳少しも騒ぐ氣色なく右手に鐵扇を持ち泰然として控へました早瀬左太夫手練の強弓を満月の如くキリ／＼と引絞り岸柳の眉間の眞正中を狙つてビューと切つて放つ、岸柳心得たりと頭を縮めて除けると其矢は空しく空を走つて行過ぎました、早瀬は二の矢を番へて胸板を目掛けて放つ、岸柳は悠然として飛來る矢を鐵扇にて打ち落す、程もあらせす三の矢又飛來るを身を翻して脇の下に挟む其早業は目にも留らぬ位凡人の業とは思ませぬ、右衛門尉長盛殿大に感じられ、今日は是にて暇を取らず」と數多の褒美の品をお遣はしになり、厚く御賞美の詞をも賜はる岸柳面目身に餘つて歸宅しますその心中には豫て一國一城の主じともならんの大望最早大半

成就したりと思ひ欣然として門弟等にもその首尾を物語り又の沙汰を相待つて居ります、此方は増田長盛殿翌日伏見へ登城に及び太閤殿下に佐々木岸柳を推舉に及びました、或る日の事岸柳の道場へ町奉行より家主同道にて速刻出頭致すべしとの差紙が到來致しました、門弟扱こにお出たと喜びまして「先生、來ました町奉行から家主同道にて速刻出頭しよ」といふ差紙で御座います愈よ増田右衛門尉殿が推舉に依てお召抱へですぞ」岸「イヤ然うあろう、早速支度を致すよう青山氏押田氏外に下郎と四人で参ろう」青「畏りました……先生一萬石でせうか、五千石でせうか」押「イヤ一萬石より下といふことはない」岸「先づ一萬石であらうな」怒張つた主従四人家主共五人で打揃つて町奉行所へ出頭致す應て呼込みとなつて家主九郎兵衛と佐々木岸柳兩人、白洲へ這入りました、時に町奉行薄田隼人正出座に相成り兩人を見て「佐々木岸柳とは其方か」岸「ハ、ッ如何にも拙者岸柳に御坐いまする」薄田家主九郎兵衛「九「へイト」この時薄田隼人正殿聲荒らげ「如何に岸柳、其方

松原通りに住居致し殿下御膝元をも憚らず大なる看板を差出し諸人を迷はす條不屈
きなり屹度罪科申付くべきの處格別の御憐愍を以て京都の内追放仰せ付けらるゝ者
なり、家主九郎兵衛取計らひ今日中に引拂ひ申すべき者なり」と殿重の御沙汰に及
ばれました、岸柳は案に相違して開いた口が閉がらず、當事と越中禪、青菜に鹽々
として主従四人立歸つた、岸柳チツとも其譯が解らず是非なく住馴れし松原を引拂
ひます、岸柳心中の不平を僅かに門口の戸へ洩しました。

千里獨行 駭足嘶 惜哉未逢其伯樂 不至時者則空去
再開時勿有後悔

負け惜しみに解らぬ事を書残して中國へ向ひました、愈よ宮本無三四の父無二齋に
面會の一席

第十四回

流石秀吉といふ人は大層な人物、尾張の國愛知郡中村の百姓から出て従一位關白太
政大臣とまでなつた大偉人ですから、増田右衛門尉長盛が佐々木岸柳を推舉して用
ひなかつた、我看板に日本一と書くは馬鹿の行止り、兵法にも已れを知り敵を知る
時は百戦百勝と云ふ岸柳は己れを知らず斯の如き小人を洛中に置くは益
なしと云ふ處から追放されました、お話は轉じまして宮本無三四の實父吉岡無二齋
に於ては當時中國十一州の大守藝州廣島の城主毛利右馬頭輝元朝臣に召抱へられま
して食祿八百石を領し何不足なき身の上と相成りました、無二齋も早六十の上を越
し老體となるに隨ひ、動もすると昔時戰場萬馬を往來したる時の古疵の痛みが差起
りまして筋骨の釣る爲に起居が思ふに任せませぬ處から暫く養生の爲に攝州有馬の
温泉に湯治致したいと存じましてこの趣きを大守へ願出でますと早速のお許しが
出ましたから早々旅の支度に懸りましたか湯治は氣の保養が專一の事ゆへ家來を連れ
ると却つて心中に隔てがあつて氣詰りだから日頃出入の八百屋久助が氣輕者で能く

働くし此男を連れて行くと當人へ話すと久助大喜こび「夫は有能う存じます一生の
中に一度は湯治もしたいと存じて居りますが貧乏人の悲しさその日の風呂にも参れ
ぬ勝で御座いますドーカお供を願ひます」といふソコで久助を僕と致しまして主
従二人が攝州有馬へ参り湯治いたすこと二週りで温泉の効驗著るしく身心も健全に
なりましたるより旅宿を出立しその歸るさに播州の名所、高砂曾根の松を見物し又
姫路の天守を久助にも見せてやらんと姫路の城下福井町旅籠屋次郎兵衛は以前より
の定宿ですから、以前居た新見、野村邊の話も聞かんものと此家に一泊して兩三日
は逗留して居ります久助は元より氣輕の男ですから旅宿の者と心安くなりまして次
郎兵衛の伴が當年八歳の悪戯盛りの梳白を可愛がつて連れて歩行き菓子など買つて
やりまして遊ばせる、今日も子供は春戸に遊んで居りました「伯父さんくちマイ
と来て御覽よ」と手招きします、久助は例の氣輕に「金チャンや又鬼遊の相手なさ
せるのかへ」と云ひ乍ら庭へ下り立ちますと子供は隣家の境ひの塀の上へ指さして

「伯父さん」トつ取つてお呉れよ」といふ見ると隣家の柿の木に熟したる柿の實が
垂下つて眞赤な色合旨さうに見ゆる「金チャン彼れはお隣りのだから可けないよ」
表へ行つて買って上げるよ子供は首を振つて承知しませぬ、久助は悪い了見もない男
で俗にいふ子煩悩といふ性質と見へて「マアお待ち取つて上げるから」と四邊を見る
も誰も見る人もなく宿屋の裏で離れた庭、晝は客も居ず隣家は静かですからチヨイ
とトつ位ひ取つても可からうと何の氣なしに此方の石を踏臺として手を伸す、此
方は隣家に住居致すは京都追放の後當所へ來つて道場を開きたる佐々木岸柳が今
獨り庭を詠めて居りますと隣の塀の上から手を伸して柿を取ろうとする岸柳笑つて
居る處へ青山門平、押田佐吉の兩人が参りまして「先生何を笑つてお在になります
岸」塀の上を見ろ、隣りから柿盗人が手を出して居る」押「憎つくき奴、豫て柿の
失なるは彼奴の仕業目に物見せて呉れん」岸「イヤ、高の知れたる果物の一つや
二つ捨置き青」一體隣家の旅籠屋は當家を侮つて居ります日々塀の隙間から下婢共

が覗ひたり無禮な振舞を致します今日こそは以後の懲しめ」と血氣に逸る兩人が細引きを取出しソツと抜き足して塀の側に近寄り木に登つて今伸す久助の手首を押へてキリ／＼と縛つた久助驚ろいて御勘辨下さい」といつたが忽ち塀の上へ引上げて置いてドーンと塀の内へ投落し柿の木へ縛り付けました。此方は子供が吃驚仰天、奥へ飛込んで此由を話すと主人次郎兵衛も驚き吉岡無二齋の座敷へ参りまして「旦那大變なことが出来ました隣りの佐々木岸柳といふ劍術遣ひの柿を取ろうとして久助さんが捨になりました」

第十五回

吉岡無二齋老人、大きに驚きまして「夫は困つたものぢや久助は悪心ある者ではないか……マア隣家へ詫入るより外はないナ」亭主も小首を傾けまして「隣家が普通通の町人なら能うございませうが何分劍術遣ひで殊に評判の悪い先生で横車を曳出し

ではなか／＼むづかしんでございませう。無事なら猶の事拙者が出ると思つたかしくなる、お前亭主役に詫に行ってお呉れ相手が武士だといふと屹度面倒になるから町人の召仕ひだといへば穩やかに濟う、氣の毒だが詫て来てお呉れ、主「マア一トつ平誤りに詫て見ませう」と是から次郎兵衛が表の玄關からとは思つたが遠慮しまして勝手口の腰障子を明けまして「御免下さいませ」青山門平立出で「何んだ、主「私は御隣家の宿屋次郎兵衛と申す者でございませうが手前方に逗留の客人が召仕ひます僕が何か失禮を致しましたさうにございませう其お詫に参りました、先生に宜しくお取次を願ひます、」ウム隣家の御主人かマア此方へお通り……先生も唯今庭へお立出でになつて居る此方へ來なさい」と案内して庭の切戸口から通ると庭前の柿の木に久助が繋がれて居る佐々木岸柳と押田佐吉の兩人が庭下駄を穿て椽側に腰掛け居る 主「へー先生始めましてお日通りを仕ります私には御隣家の旅籠屋の主人次郎兵衛にございませう、今日夫なる下郎が私共の小兒が取つて呉れと申し、せがみま

したる處から御當家様の柿を拾取らんと致しましたを斯くお取押へになつて實に申譯がございませぬ、私共の奉公人なら宜しうございませぬが私方に御逗留の客人の召仕ひでございませぬ私共の小供が勝手なる我儘から斯ういふ始末になりましたんで……ドーカ今日の處は私に免じて御隣家の交義にお赦しを願ひます、岸成らぬ先日より度々柿を盗取り且又下婢共が折々當家へ對して無禮なる振舞ひを致す、今日は勘辨罷りならぬ譬へ果物一つでも盗めば盜賊である斬捨て差聞へはないんだ首級にしてから歸してやる」傍から青山も口を出して「主人其客人といふは何者だ、主」へ……廣島の商人衆でございませぬ、岸「イヤこの者の主人は町人ではなからう衣服の拵へがドーやら仲間造りだ、必らず武士であらう包ます申せ若し又隠し立を致すに於てはその方もその分には差置ぬぞ」といはれて主人も少し驚ろきまして三人の權幕が恐ろしさに次郎兵衛は後の崇りが怖いから「實はお侍ひ様で……、岸「ウーム左もあらんシテ何國の者で姓名は何と申す、主」へ……蕪州廣島の毛利様

の御家來で吉岡無二齋といふお方でございませぬ、岸「然らば愈よ勘辨相成らぬ、普通のものなら赦しも致すが吉岡無二齋は有名なる劍客者である日本一の看板上げたる岸柳が吉岡の家來なりとてその腕前に恐れを抱ひて赦したとあつては武士道の名折れ諸人の嘲りを招くの理であるこの上は主人、立歸つて吉岡無二齋に斯様申せ、縁で噂に聞及びたる無二齋殿の家來であるか何故御自身詫に參られん人を頼んで詫るとは近頃我を侮りし無禮の致し方、自身參らば兎も角人頼みにては聞濟み難しと申せ、主「先生左様ではございませうが夫では私が中間へ這入つて誠に當惑仕りますますドーカ御勘辨を……岸「罷り成らぬ早々立歸つて此段無二齋に申聞ける」是非なく次郎兵衛立歸りまして「旦那様、實は是々の挨拶でございませぬ」といふから無二齋が「モー斯うなつては仕方がない久助の一命にも懸る一件又お前の家の迷惑にもなることゆへ拙者が參つて自身に詫て來やう」と隠當な人物ですから唯一人岸柳方へ參り案内を乞ひますと門弟が案内して一室へ通す、岸柳も夫へ立出まして一

ト通りの挨拶も済み 無「扱今日は拙者召仕ひが無禮を働らさましたる由、一時雇ひの匹夫の事ゆへド一命だけはお助け下されお歸しを願ひたく推參を致しました、岸「イヤ折角のお頼み勘辨致してお歸し申す然し吉岡氏尊公は日本一の無二齋拙者は日本一の佐々木岸柳一本勝負致さう」

第十六回

無二齋はワザト詞を卑くしまして「イヤ拙者は最早六十を越してなかく先生には及び申さぬ此儀は平に御容赦を願ふ、岸「然らば僕久助とやらの罪は赦す譯には参らぬ、無二夫は又御無體でござらう 岸「無體とは何事だ、ハ、ア尊公は岸柳の腕前に恐れを抱いて逃げられるなア、藝州廣島の毛利公は能い家來を持たれた天下に名高い吉岡無二齋でも麒麟も老れば驚馬に劣るとやら、斯様な老耄を召抱へられたる、利公の心中が解らぬ」と主人のことを悪しざまにいはれて流石堪忍強い無二齋も腹

に据へかね「佐々木氏左まで試合がお望みなら拙者も主人持ちゆへ私に勝敗を決する譯にも参らぬから當姫路の城主木下公のお許しを得て表向き立合を仕つらう、岸「ア、夫は素より望む處だ、然らば今日直に願ひを上げてお許しを待う」と是から久助の繩を解ひて連れ歸る、此方は岸柳から願書を認めて持て來る双方の印を捺して此段木下公へ願ひに及ぶ、此木下公と申すは豊臣太閤の甥君にして播州姫路其高二十四萬石の主、木下權少將勝俊朝臣でございませす木下公は殊の外岸柳を御最負でその上家中の者指南を受けられる事ゆへ、早速お許しあつて明日當所龜島に於て試合致すべしとの嚴命になる、當日檢使として雨森縫殿助、正木采女その外鬘固の役人龜島に渡りましたこの龜島は二町四方の小島でございまして姫路に近い海上、誠に試合なぞには屈竟の處でございませす、定め時刻は己の刻役人は兩人運しと床几に腰打掛けて待受ける、處へ左右より小舟二艘にて上陸致します佐々木岸柳は内弟子青山門平、押田佐吉を従へて進む、此方は吉岡無二齋久助を召連れて上陸

双方共に檢使へ式禮を行ひまして佐々木、吉岡互ひに挨拶も終り作法の如く左右に立別れる、城下より近在までこの評判を聞きまして集りましたる老若男女この試合を見んものと各々船に打乗りまして龜島を取圍み見物を致す、久助は無二齋に向ひまして「旦那緊り岸柳を打つてやつて下さいまし私の粗忽から斯んな騒ぎを引起しましたんですから私が悪いとはいひ乍ら岸柳といふ奴が餘りといへば餘りの高慢、昨日旦那へ色々難題を申した時私は面が憎くて溜らなかつたんですその替り今日はウンと殿つてやつて下さいまし、無左様なことを申すものではない」と戒めまして扱式場へ進む一同兩人を見ると岸柳は身の丈六尺一寸筋骨逞くして岩石の如く面は美玉の如く肉肥へて大兵肥滿の好男子、朱鞘黄金造りの大小に縞珍の野袴、四ツ目結ひの紋付いたる衣服褌十字に綾なし手に三尺の木劍を持て立上る有様、如何なる天魔鬼神なりとも取挫ぐべき氣色でございませす、吉岡無二齋は身の丈漸く五尺餘り月星の紋付いたる小袖に緞子の野袴年は積つて六十一歳頃は半白にして柔和

なる老人僅が一尺二寸の木劍を取つて徐々と立上る 見物「ヤレ〜可哀相に老爺さん一打ちにやられるなア」×「年寄りの冷水とやら止せば能いに……」と取沙汰の聲轟ましく聞へます、岸柳莞爾り笑つて「イヤ何吉岡氏、今日は某しを美事打負して日本一の看板を外し國許への土産にさつしやい」と高慢の鼻高く廣言を放ちまして三尺の木劍中段青眼の位ひにさる、吉岡無二齋も同じく一尺二寸と中段にして、相青眼と云ふ構へ奴方啊呷の呼吸を計つて「ヤッ」と構へを直してポーン〜と海中の離れ島に赤橙の木劍が當る音、誠に勇ましく大海に響き渡つて聞へます、岸柳大喝一聲天地も砕くるかと思ふ計りの意氣込みにてヌバーツと打込んだアツヤ老人微塵になつたかと思ふと退いて後ろにあり、又も岸柳叫んで「ヤッ」と拂へば老人翻つて前に現はれる、何れも手練はあるんですが岸柳は無二齋には及びませぬ今一喝叫いて岸柳が勢ひ鋭く振下ろす下より横に無二齋がお胴の邊をスボンと打つた、岸柳痛いが強情な人物、打れぬ積りで又打て掛る今度は無二齋が岸柳の腕を攫つて

第十七回

左より右へボンと明らかに雨の小手を打ちました是では仕方がない、未だ強情な岸柳その木剣を投げて無二齋に武者振り付いたサア是から組打ちとなる

吉岡無二齋は六尺一寸有餘の大男を引摺いで片膝打敷き「エイ」一聲叫んでスポーシと三間計りの向ふへ投げつけた、見物は是を見て「ヤア老人強い……親玉ア……」と譽める、手を打つ、羽織を脱いで投げる、相撲と間違へてる、今は岸柳もモ一仕方ない」三尺後へ飛下つて大地に両手を突き「ア、實にや井の中の蛙大海を知らずといふ古語今思ひ當りました某し趣味にして貴殿の如き神妙の奥儀を得給ひし英雄あるを知らずして日本一などは嗚呼がましき看板を出しましたる段今更耻かしく後悔仕りました此上は豫てお約束申したる如く某の看板を撤しお國許へのお土産となし下さるやう願ひ上げまする 無」イヤ何岸柳殿左様に仰せあつて、痛み入る

勝負は時の運にして一時の勝にて優劣の定まるといふ道理はござらぬアア板の儀は其儘にお懸け置きを願ひたい 岸「夫れでは拙者が心苦しいのでドーカ…… 無」イヤ此儀計りは……」と双方辭退する此時彼の久助ツト前へ出しまして 久「夫はモ一お争い御無用、今日の勝負は始めから此久助が承知して居ります、私の旦那が勝つに極つて居りますから今朝宿を出掛けに看板は外して宿へ持歸つて置きました」イヤ是を聞いて岸柳面目次第も無い 無「コレ久助汝は主人の許しも得ずして怪しからんことをする奴、左様な心得であるに依て此度の騒動も引起したのである控へて居う」と叱つたが、岸柳の門弟押田と青山が久助を睨んで居る久助この二人を見て「昨日宿屋の亭主が誤まりに行つた時、深く勘辨すれば斯んなことはなかつたに、餘り威張つたから……若し御兩人昨日は能く私を柿の木へ縛つて下さいましたア」と虎の威を借る狐とやら主人の勝の心嬉しく久助喜んで兩人に向つて冷笑つたが是を遺恨の端となつて大騒動を惹起すの基でござります、檢使も引取りまして一同此場

を退散しましたが、岸柳に於ては數多の見物の中に面目を失ひ且城主よりの檢使の前といひ無念骨髓に徹し遺恨止み難く、此上は如何ともして此恨みを晴さんと思案を廻らし青山押田に金子を興へまして一時別れを告げ唯一人吉岡の跡を慕つて莖州廣島へ着致し無二齋の舉動を窺ひましたが八百石の吉岡無二齋他出するにも供廻り多く、姫路へ來た折とは大層な違ひ夫はさうでございませう、湯治に行く爲め久助一人連れて出たんだが廣島に居ては其勢ひは高大なもの、城下で不斗耳へ這入つて岸柳が又腹を立つたのは姫路より聞いて來た人があつて毛利公のお耳へ達した岸柳といふ者が日本一の看板を外させたといふ評判、毛利公御感服あつて百石加増になり吉岡無二齋は九百石となつたこの城下の噂、猶腹を立つたが致し方がないソコで岸柳が奸智を絞り出して一トつ考へ込込は廣島城の片傍りに今戸、といふ處があつて非人乞食が此處に年中ゴロ／＼屯／＼して追拂はれても／＼又集まつて來る、或る夜のこと岸柳は今戸の非人小屋へ來た「コレ乞食や此方へ出て來い能いものを持

て來てやつたぞ 乞「お有難うさまでございます、目の見へない覺や、腰の立たない盲目にドーぞや 岸「泡を食ふな目の見へない覺や、腰の立たない盲目とはなんだ 乞「へー旦那様お手前は御面倒様でもドーぞや 岸「そんな聲を出さなくつてもやる、やらうと思つて持て來たんだ、サア一同中能く食へ喧嘩をするな」と犬に物をやるやうに出した、大きな竹の皮包みの饅頭が澤山、一トつの包みは鱈の乾物、外に三升樽に酒が一ばい、オヤ喜んだ非人達十五六人手を合せて岸柳を神か佛のやうに拜み懸てはムシヤ／＼手掴みで食もあれば缺けた椀で酒を呑むもあり大喜こび、此饅頭鬼道の非人の中を岸柳チツト見渡しまして其中の三人チヨイと度胸のありさうな奴を「お前方三人に少し頼みたいことがある一寸向ふの森まで來て呉れんか、乞「ソレ來たそんなことだらうと思つた、旨い物を食せて置いて新刀の試し斬り一名貰ひ受けたといふんだらう

第十八回

岸柳莞爾り笑つて『イヤ決して左様な儀ではない安心致せ此十五六人の中からお前方三人を見込んで頼むんだ試し斬りならワザ／＼断はつて置ては斬らぬ……マア一寸来て呉れ半信半疑の非人三人が怖／＼乍ら此方の森蔭へ岸柳に屋行て這入る、岸柳四邊に眼を配つて小聲になり、拙者は奥州邊の去る諸侯の藩中であるが……當國の毛利公が家臣吉岡無二齋に父を討れ遺恨止み難く君父の仇は俱に天を載かれずと仇討ちの目的を立て先日來當所に来つて、忍び／＼に無二齋を付け覗うと雖も流石九百石の祿を取るだけ供廻り嚴重にして其意を果す能はず、永年の艱難辛苦も水の泡如何はせんと思案の中不斗思ひ付しは其方等城下近くに住み城中より出入りの人も能く相分ると心得るに依り無二齋が夜中他出致し供揃ひの少なき忍びの折を見張り早速に注進をして貰ひたく……是拙者が一生の頼み禮は成就の曉は充分に取ら

す積り何分父を打れし無念の心中……三人共に察して呉れよ』と岸柳空涙を流して物語る、恐かなる非人乞食は是を聞いて共に貰ひ泣きを致し 甲『宜しうございます敵打ちの御手傳ひ申ませう、ナア三州ヲイ仙臺、旦那が艱難辛苦して親の敵をお打ちなさるんだ悪いことの手引きをするのと違つて孝子の導きをするんだ、手傳つても立派なものだ其上本望達したら禮まで下さるつてんだ、斯んな旨いチョコポーはねへテ『さうだ／＼其吉岡無二齋とかいふ奴の出入りに氣を付けて成るだけ供の少ねへ時、旦那の處へ駈付ける役は仙臺お前が能いや 丙『して旦那お宅は何處でございます 岸『是より程近き大手町の花屋五兵衛が拙者の宿であると』是から段々と打合せをしました、旨く欺かれた非人は唯仇討ちとのみ信じて居ますから、非人乍らも孝子を助けやうといふ丁見で毎夜無二齋の他出を窺がつて居ります、此方は岸柳が花屋と申す旅宿で毎夜裏の庭を詠めては酒を飲んで非人の便りを相待つて居ります、ポーンと石を投げた者がある岸柳莞爾り笑つて庭下駄を穿いて飛石傳ひに裏の

竹垣春延びをして見ると『お旦那』岸『ヲ、非人か』非『先づ首尾は上々吉です今夜は若黨草履取りの二人切り主従三人で田子権左衛門様といふお方の處に猿樂の興行があつて忍びの見物、本町から左りへ切れて並木から裏田甫を行くまで探つて御注進致しに参りました是から直にお濠に付いて堤の近道を行けば藪小路あたりで出合ひます』岸『ウム、忝ない三人の親切、一所に参れ本望達すれば褒美は充分やるぞ非』へ『お有難う様でございます』と喜ぶ三人が道案内を致して参りました、遙かに見ゆる提灯の明りは慥かに吉岡無二齋、岸柳大に喜こび追々近寄るのを相待つて居ります、非人は 甲『旦那様モ一近くなつて参りました彼の邊が廣くて斬合ひには丁度能うございますナア奥州 乙『ウム私も生れてから仇討ちといふものは拜んだことが有ませぬドーカ一トつ斬合ひを見せて下さいまし 丙』ヲ、モ一大分近くなりましたぞ 岸『静かに致せと悠々として小高い處へ上つて眼下に見下ろす、非人はドーすることかと思つて居る吉岡主従三人は今四人の居ります下を通る時、岸柳

が覗ひを定めてズドンと一聲高く放した種ヶ島の短銃、誤たずして無二齋の咽喉へ貫ぬきました、若黨草履取りは提灯を投げ捨て後をも見ず一散に逃げ去ります何程武藝の達人でも飛道具ちやア敵ひませぬ非人は何にも知らぬ人間だが不思議に思つた仇討ちをする人が卑怯に名乗りもせず欺し討ちに種ヶ島で討つとは解らねへこともあるもんだと思つてる岸柳は非人に向つて『サア首尾能く本懐を達したから約束通り褒美の金をやるぞ』へ『お有難う存じます 岸』サア受取れ、金は金だが延べ金だぞ』と一刀引抜いて三人の目先へ突付けた、イヤ驚いた非人共『旦那殿云つちやア困ります』岸『仇打ちとは偽はり全たくは武術の遺恨で無二齋は欺し打ちに殺したんだ 非』へ『エー 岸』汝等を活して置けば後日露見の基、共に一命は申受るか 左様心得ろ』

第十九回

非人三人は呆れて仕舞つた、然し命は惜いから『それツ逃げろツ』といふんで一目散に逃げ出す、佐々木岸柳は逃げられては悪事露見の基と追駆け二人まで斬り殺しましたが一人は行衛が解らず、是非なく岸柳は其儘何方へか姿を隠しました、茲に吉岡無二齋の若黨仲間足を宙に飛で歸り旦那は只今曲者の爲に鐵砲にてお打れに相成りましたと狼狽へての知らせ長男清三郎は吃驚仰天、直に若黨と共に其場へ駆け付けて見ると種ヶ島の丸疵にて敢なき最期最早締切れて居ります、清三郎は死骸に取付いて男泣き、斯くては果ぬことと思ひ直しまして死骸を取片付け早速主君毛利輝元公へ此段申上げる、輝元公も御愛臣のことですから非常の御立腹何者の仕事であるか曲者も遠くは行くまじと役人に申付けて細かくお調べになつたが知れない、清三郎に於ては父の葬式萬端を濟せまして七七四十九日の忌も終りましたから誓討

ちの願面を認めて主君へ差出しますと聞届けにならないソコで君命には長男清三郎は誠に病身なれば虚弱のものにては仇討ちは覺束なし萬一返り討ちとも相成らば不惑、又途中に於て雨露霜雪の爲に身を冒され徒らに死することあらば勞して功なし無二齋には他家へ養子として遣はしたる次男ある趣きなれば此者を以て仇打ちを致させるが宜しからん清三郎は父の家督を相續して當家にあるべし父の祿は其儘遺はすとの有難き上意です、是が總領の願祿と申すのでございませう東京では随分間違つたことを申す、總領即ち長男が少し甘いと總領の甚六だなど申すは是は間違ひで馬鹿を甚六なんといふことはありません先年は大阪で源助だなんて詞が流行しましたか……總領は順に祿を繼ぐから願祿と申す、清三郎に於ては父横死の一件君命に依り肥後の國熊本城主加藤清正公の臣たる宮本武左衛門養子七之助へ兄に代り仇討ちを致すやうと書面を以て早飛脚で急報致しました、宮本武左衛門と七之助は是を承はつて驚きました七之助は天に哭し地に歎き稍暫くは顔をも得上げません位

ひ武左衛門は七之助を慰めまして『モ一唯今となつて歎いても七日の暮滿十日の菊
 此上は主君清正公へ仇討ち免許を願ひ出でお許しを蒙つたる上一ト先廣島へ参り篤
 と敵の様子を糺し其行衛詮議を致し目出度く本望成就の曉再び歸参して當家へ忠
 勤を勵め、左すれば忠孝兩道 全く眞の英雄なり亡父無二齋の名を汚さぬやう又我
 家名を擧げて呉れ』と義ある養父の詞に七之助も大に喜びました、速日宮本武左衛
 門が七之助を召連れて加藤清正公の御前へ罷り出て『豫て御披露仕りました私養
 子七之助の實父吉岡無二齋儀此度藝川廣島に於て何者の爲にか殺害いたされました
 に依り長男清三郎儀仇敵の行衛詮議に旅立ちまする筈なれど生れつき虚弱にして本
 懐を達する見込み無く、然るに次男七之助は私へ養子とは仕りましたが青年に似
 合はず武藝執心の者にございますれば武術修行かたへ發足致させ仇討ちを致させ
 ますれば亡父へ七之助の孝道も立ち又私も親友への義理も立ちますることゆへ、仇
 討ち免許の儀御免しを蒙りたく罷り出ましてございまする』是をお聞きになつたる

清正公が『ウム吉岡無二齋が横死に付き汝等の愁傷察し入る且又武左衛門の儀、七
 之助の孝道は感じ入るが一ト度我家臣の養子と相成らば是我家來なり我家來を以て
 他家の家來たる無二齋の仇討ちを致さすことは許し難しコレ七之助其方は養家を重
 しとするか實家を重しとするや、抑も仇を討つには一命を的に懸けて其身を無きも
 のにいたさければ叶はざることである、其方一命は豫て我に差出し置しならずや萬
 一返り討ちとも相成らば何を以て償ふや決して此儀は許し難し』と以ての外なる御
 氣色ですから宮本父子は『ハッ』と赤面しまして 武『當然なる尊命恐れ入り奉りま
 す』とスゴくとして退出しますお廊下まで來ると飯田覺兵衛正友と云ふ名代の豪
 傑が宮本氏御兩所とも暫く待つしやい』

第二十二回

宮『コレハト飯田氏何御用でござる』 飯『一寸此方へ……』 飯田覺兵衛が一室

へ宮本親子を伴ひまして 飯「扱唯今我君の御せに仇討ちの儀は相成らんとお差止め相成つたが……拙者トント合點が參らん、彼れ程臣下を愛し給ふ智仁勇兼備の我君がマア理屈は理屈として置ても君父の仇は俱に天を戴かれずといふ古人の金言もあるに夫をお許しのないといふは近頃その意を得ん……處で一トツ御兩所の御所存はこの上何と召さるゝか承らんと一寸お呼留め申した次第でござる」宮「御厚意の段有難く心得るが、全く主君の御意は理の當然で……御當家の家來へ養子に來たものが他家にある實父の仇討ちはお許しなきが當然……又夫婦は二世親子は一世主従は三世とある位ひその主君の命に背いても父の仇討ちをするとは人道に背きます況してや君に捧げし一命苟にも餘事に輕々しく果すことは出来ません、是は何處までも君命に従ひ、仇討ちは思ひ止ります」飯「ウームして七之助殿御所存は……」七「私とても其通り君命に背いて仇討ちは仕つらん、思ひ止りました」飯田覺兵衛、大口開ひて打笑ひ「アハ、宮本武左衛門も養子七之助も評判程にな

い心體だ、今いふ君に捧げし一命を實父の爲に仇討ちに果すことの出来ないのは最初から知れ切つて居る、夫ならば願ひ出さぬ方が能い唯一寸世間體を繕ひ人前だけ景氣に仇討ち願ひをしたんだらう……近頃は兎角に山師の流行る世の中だからア、イヤモ、何も申すまいお呼留め申したが是で御免を蒙る」と立上つて行かんとする、堪忍強き宮本武左衛門も怒りの面色凄まじく「アイヤ飯田氏待つしやい武左衛門新參なれども古參の貴殿等と肩を並べて大祿を食む身の上、山師などは近頃以て聞捨てにならん仕儀に依ては城中なりとも容赦はござらんぞ」と大劔の中柄へ手を掛け今や鯉口を寛げんとす様子、覺兵衛又笑て「コレ宮本氏、城中に於て狼藉を致さるゝな君の御座間近の處、静かにさつしやい……拙者山師と申したるは貴殿よりその七之助が第一山師ぢや年端も行かぬに自分から真面二刀流を編出したなどとの大言片腹痛いイヤサ兩腹痛い十七や十八の少年が何程の腕前やある先づ夫からして山師だ然るに父の身として子の山師を喜んで自慢をするのが即ち山師の受

け賣り親馬鹿の行き止り、夫ゆへ親子の山師と申したが、悪いか」宮飯田氏、我々親子が山師であるか、ないか尊公と試合ひを致さう左すれば雌雄は立處に相分るサア尋常の勝負をさつしやい飯」是は面白い、願ふてもなきことだ、然し尊公は室町時代の老人立合つても面白くない先づ真面二刀とか云ふ七之助が劍術の真似事から見やう、ドーセ祿なことは出来まいが拙者が少し教へてやる、斯くいふ飯田覺兵衛正友は主君清正公に従つて數十度の合戦に一度として不覺をとつたることなき豪傑だ、山師の看板ばかりでない眞の豪傑だぞ、マ一庭へ出る玩弄にしてやる」と庭へ出た、イヤ宮本父子は怒つたの怒らないのつて二人とも眞赤になつて怒つた、七之助は若いだけ額に青筋を出して『ウ、ウ、』と迂鳴つてる、覺兵衛は若侍に申付けて木劍三本を取寄せて『七之助、拙者は一本取る、其方は二本持つのであろう何本持つても駄目なことだ然し枯木も山の賑ひといふこともある何本でも持つてど、何處までも馬鹿にして居る、武左衛門も怒つては居るが内心は心配して居る悔り難き

飯田覺兵衛といふ剛敵だからドーカ旨く七之助が勝て呉れば能いモシ負けたら俺が出て一番覺兵衛を打めてやらう』と思つてる『七之助左右の手に木劍一本づつ、を持って立上つた、覺兵衛も流石に豪傑一分の隙なく身を固めて立上つた、靜かなる奥庭、覺兵衛は足場を極めやうと四邊を見て芝原の平らかな處を見計つて段々跡の方へ下つて行く、七之助も段々前の方へ進む知らずく奥庭に進入る、お縁側に空り骨一間のお障子細目に開けて加藤主計頭清正公透見をして居らつしやる

第二十一回

飯田覺兵衛と宮本七之助の兩人は十五六合打合ふ處は目にも見へぬ互ひの早業、然るに覺兵衛がポーンと打込む木劍、七之助兩刀を十字にして受止めた、覺兵衛木劍を取直さうと引かんとしたが引けない、仕方がないから前へ押切らうとしたが押切れない左右へ拂はうとしたが拂ひ切れない二本の木劍に挟まれて木劍は不思議や三

本を漆か膠で着けたる如く『ビタリ』と喰付いて離れない、大力の覺兵衛が『ウーン』と満身の力を出すんだから七之助も骨が折れる『ウーン』と打止めて居る兩人が稍暫らくは『ウーン』『ウーン』と迂鳴つて居る兩虎が風に嘯いて今や牙を鳴らし噛み付かんとするかと思はれる勢ひ、武左衛門は我子に勝せたいから心中にモ一少し堪へて居るモ一少しの辛抱だぞ、我慢しろく此くらいの辛抱が出来なくつちやア何處へ奉公しても辛抱は出来ないぞ、是は外の仕事ですが……讀者諸君でも相撲でも御覽になつた翌日は肩が張りませう、他で見えて居ても中々草臥るもんで……況してや武左衛門我子の身の上、山師と云はれたが残念だからドーカ勝せたいと一生懸命に『ウーン』とこれも迂鳴り始めた此時大音に『兩人とも勝負に及ばぬ控へよとの命お障子左右一文字に開きますと加藤清正公左右には四虎二十八將の面々、加藤清兵衛、同美作、同與左衛門、同五郎左衛門、森本儀太夫、齋藤立本、出田宮内、斑鳩平次、井上大九郎、木村又藏等始めとして左右に居流れる、三人思はず後の方に

飛下つて一禮に及ぶ、清正公莞爾りお笑ひになつて、天晴れなる七之助が二刀流、威服致した此上は良師を撰み修行致して参れ、本日より武術修行の爲め諸國遍歴の暇を取らずと夫れといはぬが清正公より仇討ちに出立せよといふ命、喜んだ、宮本親子 武ハ、ツ有難き君命、武左衛門御禮申し上げます、七之助御禮申し上げます、此上は日本六十餘州を遍歴致し良師あらばその人に就き出精致して歸参仕ります、清七、助諸國遍歴の途中如何なる者なりとも武術者と聞かば一ト手試合ひに及び、已れに優れるものを師と頼むべし随分共に心腹を練り其身の目的を達すべし今日門途の祝儀として此品を取らず」と志津三郎兼氏の一刀を手づから下し置れました、『猶其方幼名七之助は今日より改ためて無三四と名乗るべし實父無二齋の無二に因み、無は養父武左衛門の武に通ず、又我清正の一字を取り宮本無三四正明と名乗るべし』と残る方なき御計らひ、父武左衛門も共に感涙に咽びまして御禮を申上げる、飯田覺兵衛は武左衛門に打向ひまして、先刻よりの失禮の過言はお許し

下さるやう願ひたい、實は我君へ七之助殿腕前を御一覽に供へたく立合はせる爲め
ワザと悪口を致した、武左衛門又平伏致して「飯田氏が御厚意と知らず拙者も立腹
致して今更面目次第がござらん」主従打解けて、是からお盃を頂ひて、七之助の無
三四目出たく出立致します、最初に申し上げましたが宮本武藏も武三四も無三四
とも色々書いてあります、徳川時代に至りましては武藏の二字は濫りに私の名に
は出来ません、備前の池田様でさへ武藏守を願つても將軍が武藏國にお住居なさる
のですからお許しがなかつたら、實際宮本は實父の無二齋から取れた名で無三四
が事實だそうでございます、他のものがイヤでも武藏と書くといへば伯海が此
件を一番地方裁判所へ訴訟を起し……た處でモ一昔のことその甲斐がありませ
ん先づ無三四として申し上げます、又清正公が今仇討ちをお許しになるなら初め願つ
た時、お許しになれば能いと思ひますが夫では道理が違ひます處から賢明なる清正
公、一時はお許しがなく後に夫となくお許しになつたといふ流石豊臣の名臣正路深

白の主計頭様でございます、此方は宮本武左衛門が無三四に旅中萬端の注意を申聞
せて旅の用意を調べてやり先づ第一に藝州廣島の亡父の許へ参り兄清三郎に對面し
て仇敵の舉動を探れと申して出立致させます、サア是からが復讐の御物語りとな
つて始めて面白味の出る處に相成ります

第二十二回

七之助改名した宮本無三四正明に於ては藝州廣島へ参りまして毛利輝元公の臣吉岡
清三郎、即ち實の兄です此人に對面致して父が横死の有様を細かく承はり無念の齒
噛みをして兄弟が涙に暮れる、扱亡父の墓参りした後「兄上、貴郎は殿様
のお諭しに従ひ毛利家に止まつて忠勤をお勵みなさい、貴郎のやうな虚弱なお體で
は逆も野山に起臥しをして復讐の大事を達することは出来ません吉岡の家名を立つ
て居られるも孝の一トつです、私は幸ひ主君清正公のお許しも得て参つたんですか

ら薪に臥し膽を嘗るとも六十餘州を探し仇敵は天を翔らうとも地に潜まうとも急度押へて復讐は遂げます。清何分とも舍弟、私に代つてお父さんの御無念を晴して呉れるやうに……處で先日も話した通りお父上は温厚篤實なお方で人に怨みなど受けるやうなことはなさらないのに今度の御災難、唯心當りは有馬の湯治にお出遊された節、姫路に於て佐々木岸柳といへるものと龜島とかいふ處で木下様御檢視の前に於て立合ひをして打負したことがある其岸柳とかいふ者が殊の外了見の能くない奴だと其時お供をした久助の話をお前にもして置たが又其久助が妙な處から不思議なことを聞き出して來た、夫は御城下の今戸といふ處に乞食の寄場があつて澤山の乞食が居るがお父上が非業の最期をお逃げなすつたその晩二人の非人が斬殺されたが別に仙臺といふ異名の付いた乞食が俺は彼の晩命拾ひをしたと大聲でいつた處から久助が段々探つて見たらスツカリ分つた、佐々木岸柳が三人の乞食を頼んでお父上の出入りに氣を付け供の少い然も夜中の外出を幸ひ、乞食には父の仇討た

と偽はり案内させて種ヶ島の短銃でお父上を狙撃したんだ、其跡で三人を殺さうとしたが乞食も命が惜いから一人だけは逃て二人は岸柳に斬殺された處から生き残つた一人が、命拾ひをしたと人に吹聴をしたんだとの話、又其岸柳の人相は年三十ぐらゐる色黒く鼻平らに唇厚く眼大きく、肉肥へて頭は四方剪り下げ髪、背高き立派な人物の由なれば其積りで詮議をしたが宜ひ、夫に岸柳は近江源氏の末流で江州の守護職たりし佐々木六角入道承頼が妾腹の一子にして姫路城下に日本一の看板を上たる名人の由非人の話だけでは信じられないから實否を糺して随分共にぬからぬやう無成程益々手續さが解りました、譬へ岸柳匹夫の勇ありとも邪は能く正に敵する能はず、天道争でか許し給はん不肖乍らも無三四必死の勇を奮ひ懸て本懐を達し吉左右お聞せ申しませう』と是から兄弟が種々何かと打合せをして立別れ無三四一人は廣島より中國筋を順に備前岡山へ參り此地は都會であるから又岸柳が潜んで居るまいものでもないなど五六日逗留して探しましたが居ない、夫から播州姫路へ

出まして又此地も前に岸柳の居た處ゆへ詮察したが居ない、是から北國へ入り岸柳の母が生國と聞く出羽の國を指して参り出羽に聞へし烏海山までお話がございません、抑此烏海山と申まするは富士山に似たる高山にして山神を祭つてありますから無三四も武運長久と仇敵に廻り逢ふやうとの願ひで登山致し祈誓を凝して下山致さうとしますと何分にも險しき山で登る時は登山したいと思ふ一心で登つたが下山には餘程困難な處があつて自分でも「能くマア斯んな處を登つたな」と獨り言をいつて下つて来る、今四方を見ると屏風を建てたやうな巖石の峩々として聳へた山又山の九十九折、時は冬の初めで松杉も落葉して木枯しの裸木は寒さうにシヨンボリ立つて居る、何となく心細い無三四は枯草の上に腰を卸して淋しさうに谷間を眺め見るともなしに流の上流を見て居るとガサリ／＼と枯草を踏んで来る足音が聞へる「ハテナ向ふにも道があるのか」と思つてる處へ生茂る熊笹の道なき處を押分けて出て来たは見上るやうな大男が何やら袋を背負ひ白衣に兜巾褌掛の山伏姿腰に利

劍を帯し金剛杖を突てやつて来た

第二十三回

山伏は宮本無三四の前に突立上つて「コレ武士、俺は此の秋山太郎といふ山賊だが此頃は仕事がないので一寸姿を變へて参詣道へ出て来たんだ、飛んで火に入る夏の虫とは汝がことだサア身ぐるみ脱いで置て行けッ 無ウーム扱は汝は山賊だな、退屈致した下山道汝が取るか拙者が取らるか、力競へも退屈凌ぎ取れるものなら取て見ろ 山」ヲ、いふにや及ぶ」と六々三十六角に削りなしたる金剛杖を持って無三四を目懸けて打込む、無三四は右手に携さへたる鐵扇を以てあしらひ、隙を窺ひ「ヤツと金剛杖を打落した、山賊は「モー是迄」と腰なる佩劍反り刃の二尺三寸振舞して斬込んで来る、無三四に於ては「シヤ物々しや」と南壁鐵一尺三寸の鐵扇を以て打込む太刀の下を搔潜り「ヤツ」と眉間を打つた「キヤツ」と一聲其處へ打倒れる

無三四は引起して介抱し異見を加へてやろうと能くく見ると雨眼飛出て息が絶へて居る『ヲヤ〜可哀相に死んだか脆い奴だ』といったが脆い奴でなくつても無三四の力で鐵扇で眉間を打たれては溜りません 無殺す氣もなかつたが……』と獨り語をいひつゝ下山して来る、彼是したんでモー黄昏スルト若干歩行いても道らしい處へ出ない『コリヤア道に踏み迷つたんぢやアないか』と思つて居る處へ後ろの方から『ヲ〜い〜』と聲を掛ける者がある、扱は先刻の山賊が手下でもあるかと振返つて見ると鼠色の衣類に腰衣を纏ひました一人の老僧が慇懃に禮を致し『唯今お見受け申す處道にお迷ひなされ御難義の様子とお察し申す恐僧は此奥の山寺に居る者ですが今宵は愚僧の庵室へ御一泊なされ明朝人里のある處まで御案内申上げては如何でございませう』といふから無三四も能く見ると惡意のある僧とも見へません 無然らばお詞に甘へて一泊を願はうか 僧『サア御案内を仕ります』とスタ〜光へ立つて案内をする體で一里半も来たかと思ふに未だ寺らしきものも見へません

から 無御老僧に伺ふが御庵室は未だ大分ありますかナ 僧『イヤモー接近でございませう、此山を越へば直に見へます何分日が暮れますと山中のことですから淋しうございませう……お武家様迎ひが参りました』といふから無三四見ると松明を照して五六人の者が近付くから安心をしてモー間近であると思つて居ります彼の五六人の者を見ますると何れも丈高く垂延び髪を振亂して皆長脇差しを打込んで居る氣味の悪い人物計り、然し叮嚀に禮をして老僧の先に立ち案内をする、無三四不審に思つたが、する儘に連れられて行くを 僧『サア御武家様、愚僧の庵へ参りましたド〜此方へ』といはれて見ればコハ如何に寺といふ形なく天然の岩窟の中に丸太を以て門を造り、段々這入つて見れば中々奇麗に掃除も行届き立派な住居、座敷は床の間もあり置物、花瓶、軸、相應な器具は揃つてる益々不審晴れず座に着くと膳部が出る山中にしては珍らしい養應です、流石の無三四も夢のやうに思ひコリヤア狐に魅まられたんではないかと眉に唾を付けない計り唯身體に疎なく四方に眼を配り用心をし

て居る、老僧も是を察したか前に進みまして「お武家様御心配なく悠然召上つて下さいまし、愚僧がお毒見を致してから献じます」と手づから銚子の酒を飲み、肴を喫べまして「サア一盞差上げます」と斯ふいはれて見れば飲ない譯にも行かない、無三四も快く盃を受け「扱御老僧失禮乍ら伺ふが……斯様な山中にお住居なされて……家の作りも寺院庵室とも思へません拵らへ、察する處貴僧には由緒ある人の零落し給ひし成れの果にては之無きや、お差聞へなくばド！カ御身の素性お打明しを願ひたい……拙者は肥後國熊本の城主加藤清正の家來宮本無三四正明と申す者でござる」老僧は莞爾り笑つて「左様でございますか、御身分を知らず失禮を仕りました、私は出家でもなく又由緒ある武士でもござりませぬ

第二十四回

彼の老僧は無三四の前に涙を流しまして私の身の上話、只今懺悔致しますから一

通りお聞き下さいまし……何をお隠し申ませう私は非義非道を働いて妻子存性を養ひまする盗人でござります今日貴郎様を見込んでお頼み申たき一儀がござりまして偽はつて此處までお誘い申しました、其仔細と申すは某し事若年の頃より人の財寶を奪ひ取り人の妻又は娘の嫌ひなく容貌麗はしと者とさへ見れば拐引して姦淫を恣まゝに致し其外人を害せる事數知れず、數十年此山に隠れ住みまして悪行をのみ致し手下の悪黨も彼是百人も有ります、然るに近頃此山の山神を信じて邪道を忌み正しき道に入らんと改心仕りました」と涙を流しての話 無イヤ其處に心付いて改心致し悪事を懺悔すればその罪も滅するといふ位ひ況して神を信じて改心とは流石悪に強きは、善にも強しとの譬の通り能く改心をいたされた 老「夫に就いて一トつの難儀がござります私に一人の忤がござりまして當年十六歳に相成りますが姿に似合ぬ大悪無道にて、何程異見致しましても改心仕らず其上不思議の術がありまして親の手に合ひません然るに今日貴郎様が私の子分秋山十郎を御打取りになつた

お腕前を蔭乍ら拜見致し感服の餘り悴の成敗をして頂きたく此處までお連れ申した
んでございませす悴は逆も改心は仕りませんから貴郎様の武術で悴を斬殺すとも打
殺すともして戴きたいのでございませす 無「ウム世には様な事もあればあるも
の世間の親達は我子の爲に其身を捨てても苦勞するに他人に我子を殺してよと頼む
御老人が心中察し入る宜しい拙者面會して武術の立合ひを致し術と理で屈服致させ
改心させて、お目に懸けやう 老「何分共に願ひます、夫では早速乍ら道場へお立出
を願まして、悴には武者修行が参つたから一ト手立合へと申して引出します……お
疲ではございませうが直に……」と酒宴 兼に道場へ案内をいたします。道場は七
間四十二間にして子分は入口より道場の中まで篝火を焚き白晝の如くに明るくして
宮本を案内する。聽て立出たる彼老僧の悴年齢は十六歳の若衆姿、面美玉の如く美
くしき少年一禮をして支度に及ぶ晒しの鉢巻に玉櫛を綫取り木刀を持って立向ふ、無
三四見ると怪しいのは何流なるか名付け様なき我流の構へ、ハ、ア山中で師もなく

勝手に覺へた劍術だなど思つたが中々侮り難き太刀筋、無三四兩手に二刀を取つて
付け入るに少年が木刀の使ひ方に逆がある、天地人三才に象るべきを逆を以て陰陽
を顛倒して全然、劍法に適はない然し玄妙不思議の術といふべきは少年の打込む太
刀風に無三四の眼が眩んで先が見へない、若しや妖術ではあるまいかと無三四は心
中に豫て祈誓を懸けたる肥後國阿蘇ヶ嶽の阿蘇大明神に祈り口の中に「破邪顯正眞
面二刀を授け給ひし神威を以て刀妖劍魔を退散なさしめ給へ眞面二刀破邪顯正眞
と三度唱ふる途端、彼の少年はフト身を起すよと見へしが不思議や箒は消へて眞の
暗、道場の窓を破つて行衛知れず無三四拳を握つて口惜しがり「我が鑑定に違はぬ
妖術、取逃したは残念なり」と初齒をして居る處へ彼の老僧が燈を持って立出まして
「大先生の御手練恐れ入りました、お疲れの處を又御苦勞を掛けまして、申訳がご
ざいませんマア此方へ御出遊ばしてモー一盞召上りますやう……」無「シテ彼の子
息は何處へ参られたんで……」老「左様でございませす、彼れが術は及ばぬ時に姿を

隠すと燈火を消して立去るが得手でございます、然し如何に妖術ありとも大先生には及びません、兎も角子分に申付けて行衛を詮議致させます……マア寛々御逗留なすつて御休息遊ばすやう願ひます……コレ汝等は悴を探して来い、汝等は大先生が御臥床になつても次室に警固をしる、又悴奴が何か意趣返しでもすると大變だから……『へー』と子分等は十人計り戶外へ出で行き三三十人が無三四を警固する、無イヤ左様な心配は御無用其位ひのことに恐れては武者修行は出来ん捨て置つじやい」

第二十五回

宮本無三四が一生の中に不思議だと思つたは此出羽國鳥海山の一件とモートつは播州姫路城の天守中に悪狐退治の折の不思議、今一トつは有馬秀種に十字を破られる此三ツでございます講談にしては姫路御城内天守の不思議が一番能い處でございます

ます、天守をお楽しみにお聞濟みを願ひます、彼の山寨に老賊秋山武悪齋が引止めるので四五日逗留したが妖術家の若衆も何處へ行つたか戻つて来ず、子分も探したが分らない無三四も永くは居られない大望のある身ですから、此處を出立する武悪齋老人も名残りを惜みまして人里の見へる處まで見送り「大先生、悴に就ては種々御心配を掛けました、然しモト悴の行衛が分らなければ在金を子分に分け與へまして私は出家姿を幸ひ是までなしたる罪滅ばしに六十余州廻國をして神社佛閣を参拜し相果ますと、全く改心の様、無三四も何かと申聞かして別れました、老僧は是きり分りませんが若衆の悴の方は後に法華ヶ嶽に無三四が出合ひます、岸柳の故郷山形の町最上出羽守様御城下を詮議しましたが手懸りが無い、是非なく奥州街道へ出て仙臺から松島、鹽竈、東北へ行つても仕方がないから戻つて郡山から白河へ出道を左りへ取つて常陸へ入り江戸崎には諸岡一羽と云ふ高名な劍客者が居ると聞きましたから是へ参つて對面しました、名にし合ふ關東名代の諸岡先生、此人は諸岡

一羽とも申し又一説に一羽齋とも申す、一羽も無三四の一刀に感服し、無三四も一羽の技量に驚嘆致し一羽先生も教へを受け、又先方へ譲る術もあつて手厚き待遇しを受けて逗留致して居ります諸岡方に三人の高弟がありまして岩間小熊の助、土子泥之助、根岸兎角之助といふ是を諸岡の三之助と云つて聞へた高弟でございます此時代には亂世の後ですから種々變名を用ひたんでございます、或る日此三人と無三四を招いて奥座敷に一羽先生が酒宴を催ふしました、宴酣なる頃に根岸が「扱宮本先生に先日から申上げやうと存じて居りましたが、取紛れて失念を致しました先生には佐々木岸柳の行衛御詮議と承はりましたが拙者少々聞込みましたことがございましてから申上げます播州姫路にはお立寄りはありませんでしたか無イヤ夫は忝けない……姫路は先頃立寄つて木下侯の家來衆から町家は亡父が止宿致した旅籠屋まで取調べたが岸柳は居らず又再び此地へは参るまいといふ説では是非なく姫路は夫れなりに相成つて居る次第根「サア左様であらうし存じたから申上げる拙者の朋

友に當國笠間より姫路へ養子に参つて居る者があつて先頃實母の年忌で歸國いたし種々姫路の話を承つたが岸柳は一時門弟、青山門平、押田佐吉に別れて出奔した

が木下侯の御意に入りなれば何日かは姫路へ忍んでも歸らんと密かに或る者の許へ文通を致したる由でござる拙者が考へでは先生が諸國を徒らにお廻りなさるより少し姫路に足を留めて岸柳の舉動を窺つては如何で、其上愈よ來ぬ時は又六十餘州を限なく御詮議なさるが宜しからうと存する、岸柳も去る者ゆへ姫路の餘熱が冷めた頃又々参るやも計られません、失禮乍ら先生が唯表ひきお調へになつたんで一寸解りません、無三四も大に喜びまして「イヤ左様に承はれば一トつ早速播州へ参つて岸柳の舉動を見ませう……能いことを承はつて先づ満足」と大層な喜び、斯ういふことは何處から知れるか分らんものでございまして、無三四は姫路のことを聞きますと早速出立するといふ一羽も引止める譯にも行きませんから「では又首尾長く御本懐をお達しに成つて又再會致すこともござらう」と餞別を送りまして翌日門

途を祝します三人の門弟も町端れまで見送ります。無三四に於ては江戸崎から龍ヶ崎へ出て江戸から東海道へ懸り五十三次きの驛路も事なく越へて京より大坂に入り便船を求めて海上遙かに乗出します。兵庫も越して和田の崎、何日か仇敵に淡路島前に舞子は見乍らも須磨ぬ心は播磨灘、一ト夜明石のはのくと、陽も高砂の浦に着き是より陸を歩いて名さへなまめく姫路の城下へ乗込んで参りました。

第二十六回

播州姫路の福井町に小西屋市助といふ旅籠屋があります。亭主中々世話好きで面白い男だといふことを宮本無三四聞込んで、是へ泊り込んだ。處が無三四の拵らへが田舎からポット出の郷士といふ風俗ですから宿屋も扱ひは餘り能くない、合ひ客といつて四人も五人も一所に一トツ座敷へ投げ込む。丹波邊から出て来る柳行李の商人や、大阪から来る小間物屋、京都から来る縫針屋、讃岐から来る竹細工屋なんざい

ふ小商人、茶代などやる者は一人もない、無三四考へて正午頃亭主に閑暇を見て一寸二階へ来て貰ひたいといふ。亭主が心配さうな顔付きを見て女房が「お前さん、愈よ夫に違ひないよ此間から妾が宿錢の催促をしろ〜といふのにマア能い〜といつてト〜一兩も溜つて仕舞つたぢやアないか、今呼ぶのは拂ひが出来ないから此衣類と大小を賣つて呉れといふんだよ、彼んな穢ない着物やガツクリ大小なんぞ一分にもなりやアしないよ。亭「俺もさうだらうと思ふんだ困つたなア」と濫面作つて上つて来た。亭「お客様何か御用でござりますか……近頃は誠に不景氣でございまして……へー實に困つて居ります。無「イヤ毎日邪魔計り致して迷惑であらう、此金は誠に些細であるが茶代の驗、又此金は下婢輩へ遣つて呉れ」と差出したを見るに、茶代として一兩別に二分は下女として二包みある、イヤ亭主驚ろいて急に様子が變つた「是は〜恐れ入ります左様に銘々……に有難う存じますエへ、誠に奉公人根性と申しまして下女共が行届かぬ勝ちでお腹も立ちませうが御勘辨

遊ばして……コノ竹や、お金は居ないか旦那のお火鉢に火がないぢやアないか……マア御悠り御逗留下さいましてエへ、無其處で亭主折入つてお頼みがあるんだ亭へ何かお拂ひの品ですか、矢張り大小か何かですか……手前共近所に能く貸す質屋がございますお賣りになるより質物の方が又御入用の時の御都合が宜しうございませう……お召物ですか無イヤ賣り物でもない質物を頼むのでもない亭へ違ひましたか飛んだ失禮を申し上げます無一寸承はるに御亭主お前は人の世話が好きだといふことだが、拙者を一トつ木下候へ奉公住みをさせては呉れまいか亭夫は難かしようございます、仲間や下女の世話なら能く致しますがお歴紳様のお世話などはしたくつても出来ません無イヤ其仲間でも草履取りでも宜しい、なるだけ下様の役が望みだ亭旦那ソリヤア物好きぢやアありませんか下郎などは一寸見た處では紺の法被に梵天帯、眞鍮巻きの木刀で粹なものです、他で見程樂ぢやア有ませぬ骨折業でね馬糞の掃除もしくつちやアなりませんし水も

汲なくつちやアならず、お供の時は土用中でも寒中でも素足で合羽荒を擔がなくつちやアなりません是はお止しなすつた方が宜しうございませう無成程尤もの話だが拙者は九州の者で長い間浪人して居るが親類がマア相應にして居るので小遣ひ錢ぐらいには困らないが、拙者性來耻かしい事だが學問が嫌いで字は書けず劍術は好きだが下手の横好き、誰にでも勝つたことのないといふ腕前だソコで迎も五十石だの百石だのといふ直打ちはない實はマア何人扶持といふも難かしい人間だ然し遊んで居るも退屈なものといつて知り人のある土地で下郎奉公などしては親類の顔にも拘はるといふ様な譯だ、姫路なら知り人がないから何んと御亭主一トつ當地の城主でも家臣でも構はない草履取りでも宜しい世話をして呉れんか、禮は多分なことは出来ないが三兩や五兩なら誰にでも世話料として進せるが……亭成程分りました旦那は字が書けない劍術が下手だがら王取りが出来ない、遊んで居るが退屈だから何でもやつて見やうといふんですな……宜しいさういふ譯なら禮も何も入りませ

ん私が兩肌脱いでお世話をしますイヤお困りでございませう字が書けなくつて劍術が出来なくつちやア……能がすお世話をします」此人劍術が出来ないどころぢやない眞面二刀の流祖宮本無三四、夫を知らずに亭主獨り吞込んで階下へ下りて來ました

第二十七回

亭主「アイ嗅ア 女お前さんドーしたい彼の侍錢がないんだらう 亭馬鹿をいふな、お茶代が一兩下女へ二分、それで遊んでるが退屈だから奉公がしたい草履取りにでも世話をすれば三兩でも五兩でも禮をするといふんだ 女「マア人は見懸けて寄らないもんだねへ、世話をしてお上げよ 亭「するともく、チヨイと羽織を出しな御家老様へ行つて來るから」と氣輕な小西屋市助、旅籠屋のことですから木下様御家中には知る人が澤山ある、況して御家老には基のお相手をしたことがある

んでお心易い是を幸ひにお目通りをして願ひ其晚歸つて來た、早速無三四の座敷へ出まして「旦那、マアお喜びなさいまし、今日御代様へ出まして願つた處が丁度宜しい處で、明日からでも參れる事になりました、私も貴方様のことを大層譽めて賣込んだんです、處が御家老のお詞にはその位ひの男ならば足輕が勤まるだらう、足輕ならば人が足りないから召抱へる然し人物を一寸見なければならんと被仰いました、夫から私もへー御覽下さいまし男は能し骨組みは能し、劍術も少し出來て手も書けます足輕には惜しい人ですが故郷で少し宅に折合ひの悪いことがあつて私を頼つて出て參つたんでございまして、口から出任せに申して願ひましたら兎も角明朝連れて來いとのこと……私も斯う早く口が出來やうとは思ひませんでした、夫に中間と違つて足輕ならば貴方のお國へ聞へてもよし私もお世話甲斐があると思つて喜んで歸りました 無「夫は有難い足輕ならばモ一申分はない何分頼む 亭「エー貴方足輕ならば大威張りで結構です」可衰相に宮本無三四何處へ出しても千石や二千

石取れるに卑しき足輕で結構だノ、といはれて翌朝家老の目見得に参ります、大層
氣に入つて明朝から城内へ詰めるこいふ仰せ、一ト先づ小西屋へ戻つて『扨亭主、
有難いことだ中間奉公でも苦しくないといつたを足輕になれるとは全く以てお前の
骨折りだ今夜はマア家内中呼んで此座敷で一抔呑んで貰ひたい、酒と肴の支度をし
て呉れるやう』と二兩の金を出した、亭主又驚いて臺所へ飛んで來た『サア皆喜こ
べ奥の旦那が今度御城内へお勤めになる出世祝ひだ、家内中に御馳走をして下さる
んだサア此通り二兩あるから何んでも食はせるぞ』皆喜んで『夫はお目出たいこと
ですなア、然し私は酒を飲みませんから甘い物をお頼み申します』なんて勝手なこと
をいつて居る亭主は是から馳走を拵へる其頃の二兩の金ですから随分贅澤が出来る
んで山海の珍味とは行かないが、幾種も料理を調進へ夕方から座敷へ運ぶ、その晩
は商賈休みで家内中が、無三四の座敷で飲めや歌への大騒ぎ、宮本先生は一同快く
飲食ひして騒ぐを見て唯喜んでその夜は一睡の夢を明して翌日愈よ播州姫路御城内

へ入り足輕奉公を勤めることとなりました、家老始め唯一人としてこの人を眞面二
刀の宮本無三四とは知りません、尤も名も七助といつて幼名の七之助の之の字を抜
いて假名をして居る、足輕二十人計りの同役があるから『へー私は九州の生れで七
助と申します、ドーカ以後はお心易く願ひます……是は輕少でございますが御一同
へお交際に一ト口差上げたいと存じます、勝手を存じませんから是で酒肴を御注文
下さつて……』足輕連中が見ると五兩の金ですから『イヤ七之助殿とやら、御可憐
なお近付き恐れ入るな……』ヲイ久平折角のお詞だから汝チヨイと酒の支度をして
來いよ』サア是から又足輕一同が大馳走になる、下等社會の常で是を新參でも無三
四の七助を馬鹿にしない、七助殿くと敬まふ、處で無三四は樂な役ばかりして骨
折り仕事はせずと濟む、或る日の事足輕の組頭が『七助殿、今晚から天守の番が當
つた相役は木田善兵衛と久平の二人で三人は天守へ泊り番だ、善兵衛と久平の二人
は『イヤトト』廻つて來たが、外の泊り番は能いがお天守許りは閉口だ、實に薄

氣味が悪いから……」無三四の七助不思議に思つて「木田氏、お天守はナゼ氣味が悪うございますな木御存知ないかアリヤア大變だ

第二十八回

同役の足輕が嫌がるも道理、この姫路城の天守には不思議の怪異があります毎夜三人づゝの足輕が詰めて泊り番をするんですが、丑滿の頃になると家鳴り震動して怪しき聲音を發し、或ひは笑ひ或ひは泣く、又或る時は泊り番の髯を根からブツ、リ剪り落し又は糞尿を夥しく降らし火を燃して炎を立てる、その物凄きは身の毛も彌立つ許り夜が明けて見れば何の事もない、斯ういふ譯ですから皆天守の番となる風を引いたの、腰が痛い頭痛がすると云つて休む、この天守番に當つた宮本無三四の足輕七助は是を聞いて望んで泊り番を勤めます、其處でこの天守の因縁を一寸申上げて置きますが抑も播州姫路城の天守には小刑部大明神といふ守護神が祀つ

てあります、元來此姫路城は別所小三郎長治の持城でありましたが太閤殿下秀吉の手に入つてから少し築城の法に適はない處があるといふんで名代の軍師竹中半兵衛重治と小寺官兵衛孝高の兩人に命せられまして繩張りをお改めになり要害を堅固に築き直された時、天守を築くべき地所に五輪塔の形をしたる古墳がありますからその墓を避けて地形を固めると少し圖面に異動が出来るし取壊すも餘り心無さやうに思われる處から、竹中と小寺の兩人相談をしたが、殿下へまで御覽に入れた圖面を變更する譯には参りませんので兩人が人夫に命じ取除け毀たんと致しました、今人夫は墓石を動かして取除けたかと思ふ時、不思議や一陣の暴風サツト吹起り樹木を鳴してゴ〜〜と響くかよ見る間にザア〜と大雨車軸を流すが如く物凄く相成りました、役人も人夫も仕事が出来ないからその日は人夫を休めました、然るにその夜伏見桃山聚樂の館にお在になる太閤殿下、御寢所に於てトロ〜と睡ろみ給ふ折から誰とも知らず揺起す者がある秀吉公驚いて兩眼を見開かれると柳の五ツ衣を重ね

たる美しき官女が桃花の如き唇を動かして、公願はくば妾が申すことを叶へ給へかしと申して

うつゝなら跡の印を誰にかは問れしものゝ有てしもかな

と三度口吟みました、秀吉公は言葉懸けられんといたしますと妾は忽ち掻き消す如く相成る、秀吉公怪しきことに思召す中に、俄に百雷の轟く如き音耳に貫ぬき響き渡つた『アッ』と身を起されると是南柯の一夢にて秀吉公此時お夢が覺めて茫然といたされました、然し彼の歌はお耳に残り不思議の思ひをいたして居られます、翌晩に相成りますと又このお夢を御覧になる、益々奇異の思ひをいたして居られますと三日目に姫路城御普請奉行竹中半兵衛登城をいたされしました、半「恐れ乍ら申上けます、姫路城石垣、總曲輪、出丸橋臺一式は御指圖通り築上げますが天守の位置を十間計り南へ移しましても宜しうございませうか他の場所は小寺官衛とも、相談いたし變更へいたしすまが肝要の天守のことゆへ御伺ひとして推参いたしました

秀ウム如何なる儀にて場所變へをいたすのぢや半「左れば斯様でございませう、五重の古墳が妨げに相成りまするゆへ、取除け壞たんといたしますと俄に暴風大雨と相成りました凄まじき日和と相成りましてございませう、何か祟りあることかと存じ土地の古老に糺しますと是は足利將軍尊氏公の執事高の師直が娘小刑部姫と申すが禁中へ宮仕へをいたし不斗伏見中將の次男出羽介諸道と密に通じ、こと現はれて出羽介は左遷の身となりしが、姫此人を慕いて姫路へ尋ね來りしに出羽介は配所の憂に堪へかねて終に空しくなりしと聞き小刑部姫はその歎きより物狂はしき風情となりて世を去りましたを心ある人々が哀れに思ひ厚く葬り五重の碑を建てましたる由申傳へにございませう或ひはこの祟りではないかと恐れ乍ら存じます」秀吉公膝を打つてウム扱は過ぎし夜より見續けたる奇夢は是なり清少納言の詠歌を口吟みて我に墳墓を守つてよとの諷言と覺へたり、ア、不惑なる者であるこの上は天守の中に何れなりとも一重を構へて是を祭り當城の守護神となすべしと、仰せになつて小刑部

姫といふ處から小刑部大明神と崇めて天守に祀つてあるんでございます無三四この天守に不思議を見るの一席、一寸一服

第二十九回

足輕の善兵衛と久平の二人は宮本無三四の七助に向ひまして善七助さん御當家の足輕は他家と較べては樂でチヨイと餘徳もあるから能いが唯困るのは天守の番だよ書は能いが夜になるとね、草木も眠る丑滿つ時、遠寺の鐘は陰に籠つてポーンと来るだらう……深々と更け渡る夜風が身に染みて……ゾツとする、サラ／＼と裾を摺る音が聞へる振返つて見るとね髪の毛を振亂して色のマツ青な目の怖い鐵漿を塗けて黛を入れた官女か物凄可笑ひ聲で……ゲタ／＼、久「止せ怪談話しは……だが七助さん怖いよ三ツ目入道が鐵の棒を突いて出るの、轆轤首が顔を嘗めるなんと云ふは當り前の化物だがこの前の當番に生憎雨が降つてね四ツ頃から風が出

てゴザーと云ふ雨風で淋しいの淋しくないのつて、夫も九ツ迄は何ともなかつたが次第に雨は降りしきり風は益々吹き荒み唯夜は更け行く計り水の流れも一時は止り屋の棟三寸下るとも云ふ真夜中……ウーラーメーシーヤアと交たね、見ると大髪、年頃十八九の凄いやうな美しい女が顔から咽喉は血塗血がひになつて頬の邊りはベツトリ生血が垂れて……善「分つた／＼今夜當番だつてえにモー止せ、薄氣味が悪くなつて来た……又今夜も過日のやうに鬚を切られやアしないかア、否だ／＼」と二人が怖がる、七助は莞爾り笑つて「イヤドーも解らない話ですなア、當城の守護神たる小刑部大明神が此の天守を守つて下さるが當然なのに、番人の鬚を剪たりなぞしては神が道理に違つて居ますなア」久「道理ではないが全くあるから仕方がないんです七「ソコで私の考へには狐狸の仕業に違いないと思ひますから今晚は是非御一所に參つてその有様を眼の當り見たいと思ひます」七助さんも物好きだねへ、然し何方にしても今夜は當番で仕方がないモー六時でせうソロ／＼

出懸けませう』と是から三人は天守の五重の階下の番所に詰めましたその中に夜も追々更けて来る、善兵衛久平の二人はモー小さくなつてお念佛を唱へて居る七「ド」ですなモー出ますかな妙な奴は……』善「シート、奴だなんて勿體ない、そんなことをいふと猶ほお祟りがありますマアお惜しみを受けないやうに……ナア久平久「南無桑原萬歳樂〜』といふ中に、グワラ〜と何の響きか凄まじき物音がするかと思ふと俄に家鳴り震動して雷の如くに轟き渡ります、二人「南無阿彌陀佛〜、桑原萬歳樂……七助さんお念佛をお唱へなさい七「ナゼです二人「お祟りが始まりました七「御心配なさるな、何か出て来れば私が引捕まへて打殺して御覧に入れます善「シート勿體ない……今夜は飛んだ人と一所に當番をした久「愈よ罰が當るに違ひない南無阿彌陀佛〜私は七助といふ男と同類ではございまん善「七助さん私を助けると思つて妙なことをいつて下さるな南無阿彌陀佛〜七助の宮本無三四に於ては真面二刀の極意に兩の拳を握つて陰陽に構へ口の中には破

邪顯正〜と阿蘇大明神に祈誓を掛けて妖魔の正體を見現はさんと身を固めて居る然るに忽ちにして家鳴りも静まり穏やかにになりました追々東も白みまして東雲告げる明け鳥、夜はほの〜と明け渡りました、二人の足輕は「ヤレ嬉しや」とホット一と息善「昨宵は能い鹽梅に何もなかつた、七助さんドーでした、久「でも強ひ音がありましたらうねへ七助さん、無三四平氣で「ハア惜しいことは化物が出ないで、残念なことをしました、戯談いつちや可けません、お前さん彼處が怖くないね七「エー怖くも何ともありません、私でなければ毎晩でも一人で泊り番を引受けます、毎晩居たら化物に出逢ふこともありません、兎も角今夜モー一と晩やつて見たくございませう 兩人「へエー」と呆れ返つて足輕組頭佐田丈右衛門へこの話をするとそんな大膽な男とは思はなかつた、當人が望むんならば人の否がる天守番を勤めることだから組の方から手當として一夜百銅づゝを渡さう』と宮本無三四の七助一ト晩百文づゝ貰つて天守の常番と極りました

第三十回

宮本無三四の足輕七助が天守夜番の定詰となつたがその身の災難で無實の冤罪を蒙るるといふ無三四の一身に取つては一生の大難に罹るこの講談の眼目と申す處に相成ります、播州姫路の御城内奥御殿に入梅の霖雨で御徒然の餘り御酒宴の御催ふしが夜に入りましても興が盡きません

星一とつ見つけし夜半の嬉しさは月にもまさる五月雨の空

といふ歌の通り梅雨な時は時には私達でもマア一寸一杯やろうといふ氣になります、大守は二十四萬石の木下權少將俊勝朝臣と申上げて太閤秀吉殿下の甥君に當る御方正面にお控へになり左右には重臣の面々居流れお盃を頂いて種々のお物語を申上げる、大守は大盃を下へお置きになつて「當今は世に不思議と申すこと會てなければ當城に於て一トつの怪異あり是のみ不思議とこそ存するなり誰かこの不思議

を見届け参る者はなきやドーぢや」と仰せに雨森縫殿介、席を進み出まして「恐れ乍ら當城に於ての怪異と仰せられまするは天守の儀にございまするか大如何にも天守の儀である、予殿下よりこの城を拜領なしたれども守護神たる小刑部大明神の崇りありとて一度も銃を明けて登りしことなし、承はれば近頃天守に怪しき物音あり又或る時は天守番の番を剪り取りなぞいたす趣であるが我持城に斯の如き怪異あるは残念なることである我日本は神國にして上天子より太閤殿下を始め奉り下つて諸侯に至り下は幾億の庶民と雖も神武天皇以來の武威を受継ぎ奉り狐狸妖怪に冒さるゝ者は一人もなし、然るに心得難き天守の怪異、傳へ承はるその昔攝津守頼光の臣、朝負丞碓井貞光は土蜘蛛を退治し渡邊内舍人源治の綱は羅生門にて鬼の腕を斬取りしと聞く、又遡つては紫宸殿の御庭内に源三位頼政が越といへる化鳥に矢を放つて猪の早太是れを刺し帝の御惱を愈し奉ると聞く、一ト目に見ゆる小城の天守何程のことやあらん、誰かある是より直に天守の怪異を見届る者

はなきやこの儀は如何にぞ」仰せられました、皆一同の面々は唯さへ氣味の悪るい評判の天守へ入梅の雨に今夜はかて、加へて風さへ交て物凄き晩ですから猶更一人として進んで天守へ登らうといふ者はありません、この時に又もや縫殿介が進み出で「恐れ乍ら申し上げます、君の命に背くやうではございますがこの御役を勤むる者は一人もございませぬ、如何となれば妖怪にせよ狐狸にもせよ神變不思議の魔術にて百雷の響きを出し又足輕の鬚を剪り取り穢き物を取散しなぞいたす、況してを或小刑部明神の祟りとも聞及びます處へ云はゞ犬死同然に進み入る者はありますまい戰場に於て君命に因り進んで一命を捨まするは臣としての本分にございませぬが斯様なことには誰に限らず一命は捨かねます……就ましては私一トつの考へがございませぬ近頃新規召抱への足輕七助なる者好んで一人天守の定詰と相成つて居ります、身分は卑けれどこの者に天守の鍵を渡し五重の上まで檢分いたさせては如何でございます大「ウム足輕にても苦しからず、是より直に天守へ登らせ神の祟りか

狐狸妖怪の仕業か見届けさせよ」との仰せに御酒宴はこの儘になされて七助の安否をお待受けになる、縫殿介が天守の定詰所へ來つて天守の鍵を七助に渡し君命の趣きを申聞かすと、七助の宮本無三四大に喜び「仰せ畏り奉る」とお受けに及んで支度に及ぶ、足輕のことですから溢染め紋付きの帷子に小倉の帯を締めまして大小を横たへ右手に五ツの鍵を持ち左りに蠟燭を點じたる雪洞の金網張りの柄を握り五重の下の錠をガツチリ明けて這入る、是から二重、三重、四重、五重と登るんでございます、雨森縫殿介は三十人の足輕を従へて如何なることに成行くかと天守前に控へて居る此方は宮本無三四が、第一番に這入つた、處が初めの段で凡そ千疊も敷かるかと思ふ大廣間、何も怪しいことがないから猶も二段目へ登らんとする時、盤石を投げ落すが如き音ドーンと響いたかと思ふとパーツと明るく輝き渡つた、蟻の這ふまで見へるくらひ、又バツと暗くなつて仕舞ひました

第三十一回

宮本無三四正明に於ては、愈よ播州姫路の城内天守閣へ登つて、その不思議を見届
 げやうといふことになつて、第五層の下段から四重、三重、二重頂上と進むの考へ
 然し城主木下俊勝公よりの命で、唯足輕の七助といふ格でこの冒険を行ふんで、木
 下公も無三四とは御存知ない、家中一統も知らないは道理でございます、その夜暴
 風雨の中を厭はずして、第五重の下段に来ると、グワラ〜ズシーンといふ物音、
 大体の者なら「キヤツ」といつて氣絶するが正明に於ては莞爾と笑ひ悠然として此
 處を通り第四層へ登ると、暗黒世界の一室、疊敷何枚敷けるか分らぬ位の大廣
 間、唯四方の窓にザア〜といふ雨の音と、ゴ〜〜といふ風の音で廣さが分るが、
 闇々冥々として暗黒地獄が斯くやと思ふ計り、他に變つたこともありません、是か
 ら第三重へ登りますと柳の五ツ衣を重ねたる官女の如き姿の婦人が立つて居る此

女に恐れず四方を見ると、燭臺に蠟燭を點して文臺を並べ、十二一重に柳の衣最ご
 綺羅びやかに姿を飾り、七人の美婦人が歌を詠むか、句を作るか思案の體、この時
 彼の登り口に居る美人が「その許は何國の賓客にして、何として斯る席へは推參あ
 りしや、合點參らず、願はくは御姓名御名乗りの上、お通りあれ」嬋妍なる美人が
 優しき中にも嚴めしく問掛けました、無三四大に憤つて「黙れ妖怪、汝幾何處は
 しき姿を以て我を欺かんとすぞ雖も、眞面二刀の妙術神に入りし某しが、破邦顯
 正の眞理を以て邪法妖術は、立ち所に見破り呉れん……阿蘇大明神、速かに利陰
 を垂れ給ひて、破邪顯正の妙を現はし給へ……破邪顯正〜」と唱へること二度
 美人は袖を翳して身を隠す、と見へしが、姿は朦朧として行衛も知れぬ眞の暗、七
 人の女も共に幻の如く消失せり、無三四合點の行かぬ中にも、心中には「扱は
 狐狸妖怪の仕業に相違なし、阿蘇大明神の神威に怖れて消へ失せたるならん、最早
 天守は二重と頂上何程のことやあるべき、イデ頂上まで登つてその正體を見顯はし

木下公始め諸人の惑ひを解いて呉れんと、勢ひ込んで二重へ登ると、夜も森々と更け渡り時ならぬ夜寒は肌に通り、ゾツと身に染む風は、背に水を懸らるゝかと思ふ計り、風雨は益々烈しく況して二重は鼻を掴まれても知れぬ眞の暗、流石の無三四も一寸躊躇つて透巡り、手探りに少しづつ歩む計り、折から一陣の醒風キツト吹來るかと思ふ時、無三四の眼は眩むかと思はれる、ピカリと輝やく燐火は青白く、スーッと消へれば舊の如く眞の暗、アツト思ふ一刹那誰とは知らず無三四の両手を曳く者がある緊く両手を握んで、クル／＼と引廻す、無三四のその手を振り離さんとすれども、その力は盤石の如く唯彼方此方へ引廻してクル／＼、暫くの間は無三四も是非なくそのなす儘に任せて置くと半時餘りも引廻して無三四の身體疲勞し氣も遠くなつた時分に、バタ／＼無三四を投げ出して、跡はヒソソリこの時無三四は氣が付いて胸を撫で下しホット一ト息、我に返つて兩眼を見開けば、又もやピーツと鬼火の光り眞蒼に照り渡る、天守の頂上に當つて『ツアハ、ハ、ハ、ハ』と高

笑ひの聲は何百人の聲とも知れず天守も頷る、笑ひ聲、流石の勇士も無念やる方なく切齒みをして口惜しがつたが、仕方がない、ア、萬物の靈長たる人間か、狐狸妖怪の爲に侮られ、斯る嘲けりを受くるとは残念だ、譬へ此城内に死なば死ね、ヤウカ妖怪の正體見届けずに置くべきと、氣を取直して口の中に阿蘇大明神を祈り立上る時燐火は消へたが、梯子段は知れて居るから、足踏み掛けて登らんとすれば、如何に最と清らかに奏でる妙なる音楽の響きは今迄の騒ぎに似もやらず、靜かに鳴り渡つて無三四も思はず耳を澄して聞き惚れて一ト足づつに登るに又も、ブーンと得やらの蘭麝の薫り、心中に考へた無三四が『我心を惑はす爲に種々なる手段を行なつて欺かんとする妖怪、如何なる悪魔か知らねど、是程迄に神通を得たるは容易ならざる怪物世の常の老狸野干の類にはあらざるべし、最早頂上一重にて萬事相分ることならん』と鬚勇を奮つて登つて参ります

第三十二回

頂上の階段を登り切ると何しろ姫路白鷺の城は天下の名城ですから天守は雲に從へ石垣高く深深くして要害堅固の構へ、天守より下を見下す時は冲天より下界を見下ろす如く姫路市中は申すに及ばず須摩の海より播磨灘といふ中國第一の早潮の大海が手に取るやうに見へる、又淡路島より紀州を左りに詠めて右に讃岐を望むといふ絶景更けし暗夜の大雨にかて、加へて暴風吹荒みまして譬へ方なき物凄さ、無三は景色なぞの事なご思ひもせず況して夜中ですから見へもしないに、不思議や天守の頂上は白晝の如く明るい、能くく見るに廣やかなる一室は左右に朱の塗り骨の行燈を照らし正面に二重臺を設け錦縁の御簾を深く垂れて奥床しく、やんごとなき御方の御座の間ともいふべき存らへ、無三四も心中に相馬の古御所の昔を思ひ出し妖怪の仕業とはいひ乍ら結構なる住居など感じて居ると、何處ともなく笙の音響

と渡り神々として心耳を澄す計り、その中に正面の御簾は自然に上に捲き上げられる、無三四は扱こそ妖怪の出現ならん、今不覺を取つたる返報に此度こそは、飛掛つて唯一挫ぎに挫いで呉れんと、拳を握つて相待つ、御簾の中に立つたる女は紗綾形の十二ト重に燃へ立つ計りの緋の袴を裾長に着なし、錦の襦袢を羽織り、頭は大内の下げ髪にして、手に檜扇を携さへたるその姿、美くしいの奇麗だの、別嬪だのと云ふのは通り趣して、唯清いア、勿体ないといふ容貌で人か神かと怪しむ計り、流石の無三四も暫らく見惚れる位ひ、思ひ直して妖魔が爲す業、譬へ美くしくとも外道邪惡の狐狸争下か是に欺かれんや」とヂリくと前に詰寄り目に物見せて呉れんと彼の顔を見詰めたる時に女は莞爾り打笑ひ「我はこの天守の守護神たる小刑部大明神たり、豫てより汝の來るを待つこと久し、今日計らずも汝を見るに世の常ならぬ骨格相貌、最と満足に思ふなり、就ては汝に頼みたき一儀あり早々城主へ申立て、何卒我身を救ひ呉れるやう、呉れもく頼み入る無、黙れ狐狸妖怪如何に詞を

巧みに申し欺かんとするとも、宮本無三四が眼力を以て見る時は破邪顯正の術に因つて惡魔外道は立ち所に相解るなり、イヤヤ正体を顯はし降參はいたせ猶ほこの上共に邪法を行なふに於ては、一刀兩斷に成敗をいたして呉れん』女は槍扇を持て是を制し、『否とよ無三四、狼狽へて神に逆らひ後悔あるべからず、心を静めて我云ふことを聞きなかし……無警へ何と申すとも神たるものが、守護神となり乍ら、足輕共の耳目を驚るかしてその髪を斷ち、或ひは穢き糞尿を降らし、種々の怪異を見するといふ儀があるか何故左様な振舞ひをいたすか、神は非力を喜ばず、聖人は怪力亂神を語らずとある、察する處老狸野干の移り住みて愚民を惑はす邪法であらう女』イヤその疑ひは尤ものことなり、先づ我いふ處を聞けよ、汝が察しの如く去る程より年老りし野干の眷族を引連れ、この天守へ移り住み様々の怪異を行ひて人を惑はすあり、夫を天守の守護神たる我爲す業と思ふは大なる僻事なり無守護神たる小刑部大明神が、多寡の知れたる野干を何故追拂ふことか叶はぬや女』其

疑ひも道理なり、されども、彼の惡狐は數百年を経し老狐にて天通自在を得たる靈狐なれば、神威熾んの時に非ざれば是を制すること能はず、又天變地妖は神力にて是を除くことは叶はぬなり、近き頃天守へは城主よりの供物を怠たり、我を蔑しらにいたすにより神威は消へて城中には陰氣籠り益す靈狐の勢ひ熾んなり因てこの後は我への供物を怠らず城中一同我を信仰して尊敬いたし神威を熾んならしめば、忽ち惡狐は立去るなり、今日汝の來るを疾より知つてこの儀を頼み聞ゆるなり努々疑ふこと勿れ……今日大膽にも此處へ參りし武勇に愛で一トつは斯る勇士に遇ひし嬉しさに此品を汝に取らすなり構へて人に告ぐることなかれ』と寶劍ともいひつべき短刀を錦の袋へ入れたる儘、手渡しをいたしました無三四も『扱は左様な儀でありつるか、知らぬことはいひ乍ら、神を罵しりしこの身の大罪』と平代して押頂だき、面を上げて見れば今まで明るく白晝の如き一室は眞の暗、夢に夢見る心地の宮本無三四遂に天守を下り、歸へりは別に不思議もなく、下段へ下りて金細張

りの行燈に能く見れば、貫らひし短刀は擬ふ方なき郷の義弘の寶劍でございます

第三十三回

實に嚴寒の氷を割つたる如き明光々たる短劍見るから冷氣肌に徹するかと思はれる程の名作、世にも稀なる郷の義弘が鍛へ上げし九寸五分、白鞘に納めて蒔黄綿の唐草模様、緋の打紐に同じ厚房を施こしまして、只見たのみで尊とい寶劍だといふことが分る、無三四は押載いて懐中へ入れ、ソコで、考へた、小刑部大明神が努々人に語るべからずとお告げになつたんだから、今夜の始末はウツかり人にはいへない、コリヤア夫となく天守の守護神を大切に守るやうに殿へもお薦め申すやうにして、天守のことはマアいはずに置かう』と獨語を申して決心しました、無三四が無事に天守から下つて来て翌朝の夜明けに出頭したから、足輕の細頭を始め大勢が不

思議に思つて四方から取圍みまして大騒ぎ、甲「七助殿能くマア無事で戻つて来なすつたぞーだい、頂上は奇妙なことがあつたらう、無イヤ天守には色々怪異もござつたが、重役へ申上げない中に濫りに是を洩すことは出来ない乙「ソナ意地の悪いことをいはずに少し計り、話して聞かせても能さうなもんだ、ナア七助殿同役の交誼に……、無イヤ是計りは可けません、この七助は新參でも殿よりの仰せに因て重役衆より申付つた昨晚のお役、いはや姫路の太守がお目鏡を以て勤める大役だ、未だ復命しない中には如何に同役でも古參のお方でも打明することは出来ない丙「ソナ難かしいことをいはずに……ドーダ出たらう無何がです甲「ソラ例の三ツ目入道が辨慶綱の大丹前で鼠の棒を突いて……出たらう無「ウーム乙「出たかな……島田齋の眞青な顔で展風の外へ首を出して行燈の油を甜めるのは……出たがナ、無「夫は何んです乙「轆轤首は……無「ウーム丙「出たナ、火の玉は轉がつて来なかつたかナ、鬼火がちらちら燃へたらう……一トツ目小僧

が茶を持つて来たであらう」なんて皆隠すことは聞きたいのが人情ですから、右左
りから蒼蠅く尋ねる、無三四の七助は只「ウム」「ウム」の一點張りで何んにもい
はない、その中に重役衆から足輕七助のことを尋ねになる、組頭から無事で戻のた
ことを申上げる重役衆も不思議に思はれて七助を早速お呼出しになりました、重七
助夜前は天守の頂上見届けの役を申付けたる處、無事に立歸つて満足委細の儀は
拙者から殿へ言上をいたし、他日御褒美の御沙汰にも及ばれるであらう、シテ天守
五重には何か怪異等はなかりしや、具に申立てい」といはれて七助の無三四が考へ
た待てよ今重役の前では是丈けをいつて仕舞ふのは雑作もないが少し勿休を付けて大
袈裟にやまかんをやらかし、一番太守の木下勝俊公にお目通りをして置く、何も褒
美などは貰ひたくない、出世もしたくないが若し今にもこの地へ佐々木岸柳が來
た時、岸柳は家中へ武術の指南をする位ひの者、この方は足輕でお目見得以下では
誠に都合が悪い一度君前へ出て置けば何かと都合が能いと心中に思案をして「御重

役へ申上げます、足輕風情が失禮を申上げるやうですが昨夜天守の頂上に於きまし
て忝なくも神の御託宣を蒙りましたるゆへ餘人へは何事も申上げられませんが、太
守勝俊朝臣へ直接にお目通りの上、言上仕ります他のお人へは如何に仰せられて
も一言も申上げることとはなりません」とキツバリいふ、重役も神の御託宣と聞い
たから少し驚ろいた「然らば暫時、控へて居れ我君へ伺つた上で沙汰をいたすか
ら」と是から殿へこの段を申上げると、勇壯活潑の君ですから「身分卑き者なりと
も苦しくない皆手が臣であるに依て、直に召出し目通りを申付けへ」との御意、宮
本無三四がヤマカンの計略、圖に當つてお目通りが出来る、是から重役、無三四の
七助に衣服を改めさせて大書院へ引連れて参りました大守、真面二刀の宮本無三四
とは知らずに居らせられる處でお目通りをしたのが一トつの災ひの基となつて宮本
無三四が一世の大難に罹るの一席

第三十四回

無三四も唯足輕七助の資格で木下侯にお目通りの上、小刑部大明神に口を留られてあるから『天守の怪異も悪狐の仕業であります、その悪狐を退散させるには神威を熾んにしなければならん、夫には神前に供物を備へて小刑部大明神を大切に御信仰なさるやう』と是だけ申上げて寶劔を貰つて来たことは秘して置いたのが、無三四一生の誤りでございます、ソコでその場は七助上首尾、御褒美の拜領物もあり酒肴を賜はつて殿中を下り、例の如く天守の常番を勤めて居ります、尤も是からは天守へは日々の供へ物をいたして、太守を始め家中一般が皆小刑部大明神を信仰いたして居りました、然るに京都より早打ちを以て奉書到来に及んだのは『關白殿下、この度郷の義弘の名刀御手に入りし處、鑑定家も是程の名劔に相成ると迂濶に折紙も付けられず、眞偽を見分ける爲に先般勝俊殿へ進せられし郷の義弘と引較べ、その鑑

質を試みるに依つて、早々義弘の短刀を御手許へ差上らるべしと、五奉行が連印しての令狀でございます重臣より君へ申上げてお許しの上、寶藏から取出しましたる桐の三重の箱に絹真田の紐打つたるを恭しく取出し使者の前へ差出しまして、重役『郷の義弘の名劔、御改めの上御受取り下さるべし』と是から紐を解いて箱の蓋を取ると大變、一同の顔色が變つたも道理、やは空蟬の藻抜けの壳、重臣も明いた口が塞がらず、慥に三重の箱に納めて御寶藏に安置したる物が失なるとは不思議も奇妙ともいひやうがない、使者も氣の毒に思つて、義弘の名劔は拜領の品ゆへ強ち粗器に扱はれしといふにもあらず、是にも深き仔細のあることならん、殿下の御前は適宜にお取成しをいたして置くに依つて、早々後より差上げらるゝやう』と詞を殘して使者は立歸られる、一時は濟んだが濟ぬは義弘の行衛です、萬一拜領の品を失なつたとなれば御家の瑕瑾とも相成る、サアドーしたら能らうと、城中は上を下への大騒ぎ、太守も是をお聞きになつて、多分は家臣の仕業であらう、草を分けて

も詮議いたし速に寶劍を差出すやう』との嚴命でございます。是より三日過ぎて愈よ手懸りもなく探り盡して今はモ一分らん知れんこと極りました。重臣藤井掃部もこの上は拙者が御寶藏の鍵預りなれば、切腹いたして申譯けをいたすより外はないと、決心をいたしました處が足輕組頭佐田丈右衛門が参りまして、藤井様へ申上げます、薄々承はりますれば郷の義弘とやら申す寶劍が失なつたので重役衆は御心痛で在つしやるさうですなア 藤「イヤ、ドーモいたし方がない取れば憂し取らねば物の數ならず捨つべきものは弓矢なりけりて、武士の本懐切腹をいたす積りだ 佐「夫は大變なことになりましたなア、然し今日私の参りましたのは少し申上げたことがございまして……その短刀といふのは拵らへや何かはドンな様子に出来て居りますな 藤「拙者も悉くは存せんが、昨年御虫干しの砌り拜見した處では白鞘で九寸五分の中刃、夫に萌黄錦の古金襴で唐草模様袋に入れ、緋の高房付いたる打紐が幾重ともなく、巻いてあつた』是を聞いて丈右衛門は吃驚り顔色を變じ「愈よ

夫です……解りました、御安心なさいましその盗人はチャーンと佐田丈右衛門が承知して居ります 藤「何んと申す、義弘の寶劍を盗んだ者を存じて居るか 佐「知つて居りますとも、義弘だか何んだか中身は未だ見ませんが袋の模様と寸法で分りました 藤「シテ何者だ 佐「新参の足輕で天守常詰めの七助でございます 藤「ウム、先日殿へお目通りをいたして、天守の模様を言上した大膽者七助であるか……彼は普通の足輕ではない面魂いと目を着けて居つたが拵は、彼奴の仕業であつたかシテ如何いたして夫が相分つた 佐「サア夫です、私も彼の淋しいお玉手へ一人で上る度胸は普通ではないと思つて居りましたが此頃何か懐ろで突張る者を持て居るんです訝しい〜と思つたらその萌黄錦の袋に這入つた短刀を持て居るんです昨晚風呂場で儘に私が見ました

第三十五回

重臣藤井掃部は膝を進むを覺へずいたして『ウム儘に見たナ 佐「へーガターリと取落して當人も狼狽へて隠しましたが怪しうございます、兎も角早々お捕押へになるのが肝腎でございます若し風を喰つて逃げ去るやうなことがあると大變ですから……』

藤「シテ七助は少々は武術の心得があるか 佐「別に腕前を見た者もありませんが、骨組も善し力量もあるらしいでございます、夫に眼の配り工合では劍術も相應に遣ふかと思ひますし、手の平には竹刀の疵が堅くなつてあります 藤「愈よ油断のならぬ曲者、此上は其方の組下なる足輕三十名を以て半棒にて召捕ることといたさう』是から組頭佐田丈右衛門が下知で足輕のお長屋から三十人が半棒を押取つて、無三四の居る天守の詰所へ向ひました、左様なこととは夢にも知らぬ、無三四の七助、日頃好みます左氏傳を縋いて毎夜詰番の友として居ります、處へ門口に

親ふ三十人無三四が書見に餘念の無いのを見て、時分はよしと戸を蹴開き『御用々々』と込入ります、無三四は身に露程の曇りもなき潔白な體を御用の聲で、取巻れたから、立腹してお控へなさい何ことござるこの身に犯せる罪なきに御用呼はり、足輕なりとも宮本七助、故なくお細は受けません 佐「ヤア、いふな七助、恐れ多くも太閤殿下より御當家へ拜領ありし世にも稀なる郷の義弘の寶劍、御寶藏より盗み取りし大罪人サア、尋常にお細を受けろツ』と聞いて無三四は合點が行かない、腕拱いて稍暫く考へたが、心中に思ひ當つた、扱は老狐の爲す業で先夜天守の頂上に於て、面會したは小刑部明神にあらすして悪狐であるな、我に無實の罪を蒙らせん爲め、寶藏より郷の義弘を盗出して我に與へて秘し置けといつたは、此事だな又小刑部明神の神威を熾んならしむる爲め、怠らす供物を供へよとの云付も愈よ怪し、と心付いたが今更その申譯をして居る暇もないから兎も角一旦繩に懸て重役の前へ出てからその申譯をしようと思ひましたから、尋常に細を受けます、三十人

は思ひの外手軽に抵抗もせず取押へられたから、喜び勇んで、遂に揚り屋へ入れました哀れや宮本無三四足輕の七助となるさへ氣の毒なるに今又悪狐の罠に懸つて獄屋の苦しみを受ける身の上となりました、早速丈右衛門が七助を引出して下調をいたします、無三四は繩取に曳れて白洲へ引出されました、佐三番の組下宮本七助「無へー藤面を上げへ……その方は何者に頼まれて義弘の寶劍を奪ひ取つた、その方詰所にありし義弘の短刀のみか、差料は志津三郎兼氏の刀、足輕風情の持物にあらず殊に柄頭に七九の桐あり、コハ天子拜領の太閤桐と申す紋、斯る品を所持のその方は名高き盗人の子分等にはあらざるか、夫れとも何者にか頼まれて當家へ住込み悪事を爲さんとする者ではないか、真直に白狀に及べ、無黙れ丈右衛門、身性正しき七助を盗人呼はりは奇怪千萬、義弘の短刀は人にも頼まれず仔細あつて所持いたす、その仔細を承はりたくば、我本名より名乗つて聞せる、佐田丈右衛門、頭が高いッ」何方が調べられるんだか分らない、七助の權識に「ハーツ」と

丈右衛門、首を下げた組頭が首を下げたから繩取りも「へー」と首を下げました無我仔細あつて本名を隠し、卑しき汝等の組下となつて今日迄日を送りしが賊は足利十三代將軍義輝公の御家人にて吉岡太郎左衛門無二齋の次男、當時蘇州廣島の城主にして中國十一州の太守毛利右馬頭輝元朝臣の臣吉岡清三郎景明の舍弟なり、故あつて肥後の國熊本の城主加藤主計頭清正侯の家臣宮本武左衛門秀明が養子となりし破邪顯正眞面二刀流の祖、幼名七之助と申し先年當姫路の城下松原に於て有馬喜平次を討取りしゆへ覺へもあらん、今は清正公より志津三郎の劍と御名の一字を頂戴して宮本無三四正明と名乗る、繩取「フ、一恐ろしい長い名だ

第三十六回

この鹽梅では到底足輕組頭ぐらひが調べても、白狀はしまいといふんで、佐田丈右衛門がこの趣きを重臣藤井掃部へ申立てる、スルト加藤清正公の家臣で眞面二刀の

宮本無三四と聞たから驚いて此段太守へ申上げる、太守を始め家臣一統吃驚して、ドーいふ譯でそのくらいの人物が當家へ足輕なぞに住込んだのか解らない、若しや偽者ではないか、然し天守へ登つた度胸といひドーも宮本らしい、夫なら何故に寶藏へ忍び入つて、寶劍を盗んだか先づ是から詮議をしなければならん若し其明りが立つて眞の宮本なら引上げて千石なり二千石なりに用ひやうといふ太守も重臣も心持ちは代りません、ソコで無三四を藤井掃部が調べると『郷の義弘は、天守に於て悪狐の毘に懸り小刑部大明神とのみ信じて、受取つて口止め通り今日まで隠して居りました、この上は無三四の潔白を立てる爲に再び彼の天守へ登り悪狐を退治し、人々の疑念を晴し申へし』との申條この段又太守へ申上げると然らば義弘は早速殿下の許へ差上げて置き、無三四は天守へ登らせて悪狐を退治せよ』との仰せ、是より其通りにいたしましたが無三四が今度天守へ登ると以前と替つて物音一トつせず誠に穩かた誰にも出合ひません、無三四も相手のない喧嘩は出来ませんから、是に

は殆んど閉口しました、然し退治しない中は寶劍を盗んだ科は晴れませんが、無三四の體は家臣雨森縫之助の邸へお預けと相成りました、茲に無三四が難義といふのは此度無寶の罪科に付いて一トつも申譯けが立たない、天守で小刑部明神に出逢ひ寶劍を貰つたといふのは誰も見た者もない、唯盗んだ本人のいふ處だけで又悪狐の仕業だから腕度取押へる退治するといつて天守へ上つて見れば、前に見た時と違つてモ一何事もなく無事だ、コリーヤモ一申譯けにはならない、又モ一シトつ困るのは何故あつて清正公の家臣が木下家の足輕なんぞに住込んだか、其譯がいへない、その譯は佐々木岸柳といふ父の仇敵が来るからといへばモ一岸柳が来なくなる、仇討ちのことはドーしても明せない、無三四も進退茲に谷まつて只心中に日頃信する阿蘇大明神を念じて此疑ひが早く晴れますやうと祈つてる、無三四も本名を名乗つてからは獄屋へは繋かれませんが、お預けの身ゆへ自由が利かず唯外出も出来なから庭や門を詠めるばかり『ア、今にも佐々木岸柳が此姫路へ来た處で、斯うい

ふ身の上では仇討ちは出来ない、世に神佛がないものか、無三四は生れてより今日まで曲つたことは、露程も行つた覺へもなきに、重なる憂き身に相成るとはと獨り述懐して居りますと、雨森の門口の方に當つて最と悲しげに琵琶を弾じる者がある、無三四は折の悪い彼のやうな淋しい音を聞せられては、猶々情けなくなつて來たと茫然として聞くともなしに耳を傾けて居ると、

懐かしやく十年の昔此里に住馴れし古し柴の門、立てる柳も我を知り、招くや風の便りさへ聞かす聞せず里人よ、變れることもあらざるか、山の鎮守の御社も共に詣でんいざ來れ、庄屋が刀自も健なるか、權左が孫は幾歳ぞや、指折り見れば己が身の、年波の皺は耻かしく奏でる琵琶の音色まで老ひはせぬかと思ふなり

無「ハテ聞いたやうな聲だ、俺も今の唄の通り十年の昔此姫在にあつて漸々久し振りに此地へ來れば、仔細あつて新見村へも立寄れば大望を抱へし身、思ふやうには行かぬもの、幼少の折の幼馴染、皆無事で居るかア、唄なぞといふものは、能く

も人の心を穿つたもの」と思はず、庭下駄を穿いて枝折り戸から門を見ると「一人の老法師が琵琶を掻き鳴して居たが、無三四を見ると其手を止めて「ヲ、七之助ではないか、無「我幼名を知られし法師は光勝寺のお師匠様ではございませんか、僧「イヤ七之助が十年を経て計らず又姫路に逢ふとは、豫ての奇夢に思ひ合せることあり七之助汝は當時其身に大難が罹つてあらう、無「老師にはドーして夫を御存知でありますか、光「如來の靈夢に因つて汝を救ひに參つたんぢや」

第三十七回

無「その靈夢と申しまするは」琵琶法師は容を改め「去ぬる夜、奈良の興福寺にありし時、日頃信する大日如來の靈夢に、西方の古巢に白鷹あり將に來らんとする黒鷲を啄んとすれども、金狐の爲に畏に陥る宜しく行てこれを救ふべし、白鷹に就て聞かば大に覺る處あらんと惟ら案ずるに西方の古巢とあるは奈良より西の姫路は、

我故郷なり即ち行李を收めて飄然この地に来つて求むること三日、計らず汝に會す就て聞かば覺る所あらんとは、如何なる儀か七之助先づ汝の身の上より物語れ」無三四はその靈夢に感じまして「イヤ恐れ入りました老師は御存知あるまいと存じますが、父吉岡無二齋はこの世にはモ一居りません法ギエー無何よりお話をいたして能いか……實父の方より先づ申上げませう、無二齋は莖州廣島の城主毛利公に見出されまして、廣島へ赴き祿高九百石とまで相成りましたが月に村雲、花に嵐の譬への如く、有馬湯治の歸る當姫路に於まして、佐々木岸柳なる者と一場の試合をいたし勝を占めて無事廣島へ歸へりましたる處、その岸柳なる者心能らぬ曲者でありまして父の後を慕ひ廣島へ下り己が打ち負けたる無念晴しとあつて暗夜密かに種ヶ島を以て父を欺し討ちと仕りましたる由、その實否は面會の上ならでは確とも申されませんが、十中の八九この者の仕業と心得ます、然るに兄清三郎は御承知の通り性來虛弱にして仇討ちの爲め諸國を巡り野山に起臥しなどは出来ぬ身でこ

ざいます、夫ゆへ私が代つて實父の仇討ちをいたさんの所存、尤も是は主君清正公の御慈悲と養父宮本武左衛門の情けにございます、然かる處岸柳の故郷出羽の最上より諸所相尋ねまして其の行衛が相分りませんが、不斗承はるに當姫路は數多くの門弟もあり、木下侯御氣に入りなれば遠からずして戻るとの噂を聞き、先頃より足輕と相成り當家へ奉公住みをしていましたが、天守の怪異を見届ける爲め頂上へ登りましたのが、私の不運で、悪狐の畏に罹り郷の義弘の短刀を盗みしといふ疑ひを受け、當時はこの雨森の家にお預けと相成つた身の上でございます」是を聞いて琵琶法師の光勝寺は、無二齋の横死を嘆けき清正公と養父武左衛門の義に感じ、且又た如來のお告げに驚き「是で残らず靈夢も相分つたが、扱七之助の上は一時も早く天守の悪狐を退治して盗人の汚名を雪がなければならんが、茲に一トつ屈竟のことがある、是なる如意は拙僧が先師たる善覺上人より授かりし稀代の珍品なり狐は年老るに隨ひ神通自在にして中々人力の及ぶ所にあらずといふ、この如意を以

て打つ時は如何なる老狸悪狐も必らず斃るこの如意は住古我が朝に一幹の桑ありこの根二ヶ國に跨りその枝葉繁りて天日を覆ふ、是が爲に五穀實らず、依て八百萬の神達集り給ひてその木を切捨られ後に是を如意に作るあり、如何なる天魔地妖なりとも數千年を経たる木を焚けばその烟り妖怪に懸り本性を顯はすなり、今汝の危急を見るに忍びず、この如意を汝に授く二枝の如意、一枝を焚きその正体を顯はさせ一枝を以て是を打たは容易くその身の曇りは晴れん、必らず疑ふこと勿れ七之助、イヤさ無三四随分共に堅固に暮せ、實父の横死も定まる定業歎くに足らずその又仇討ちとやらも敵と味方は輪廻の羅網、一度切れば一蓮托生、世捨て人なる琵琶法師淨世のことには何の用なし、南無大日如来……南無阿彌陀佛と、如意を投げてその儘飄然として立去りました、無三四は師の教訓に「ハッ」と頭を下げ有難涙「老師今一言お伺ひ申たきことありお師匠様」と呼んだが、遂に行衛も知れず相成りました、流石英雄の無三四も暫時師の恩に感じて茫然としてありましたが心を取直

し此上は師の命に従ひ是よりこの名木を焚いて悪狐を退治して呉れん、と直様雨森縫之助へ申出で「何卒今一度、天守へ登り悪狐を退治いたしたくこの義お許しを願ふ」との申立て、大守へ伺ひ濟みの上、日を撰みまして或夜のこと無三四この如意を以て天守へ登る、その日不思議にも仇敵なる佐々木岸柳が門弟青山門平押田佐吉の兩人を引連れ姫路へ乗込んで参りました

第三十八回

岸柳の來ることは、神ならぬ身の夢にも知らず、宮本無三四正明は今日こそ天守に於て彼の悪狐を退治して呉れんと、此度は白晝天守へ登ります、雨森縫之助は我郎へお預けと相成つた宮本の事ですから、ドーカ無實の災難を免がれさせんと此人賊に潔白な人物ですから、何かと心配をして居ります「宮本氏、白晝天守へお登りになつても狐狸は其姿を現はしますまいかと存するが此儀は何かお考へのあることで

すか 無「左れば此儀に就ては、拙者心中に目算が之有りましたして一トつ其術を行つて見やうと存じます、總て狐狸妖怪は陰なるもので有ますゆへ、夜陰に其魔性を現はすに相違ありませんが、其陰を逆に陽に返す一トつの法があります、故あつて此法を傳はり今日行ふのでございます、法は明かなるものでありますから白晝に限りませ、此明法は照されて必ずや悪狐の正体は顯はれるに相違ないと存じます「雨イヤ左様な明法のあるなれば、必らず首尾能く參るでござらう、拙者は唯、尊公の御災難をお氣の毒に存じ、一日も早く青天白日の身と致し君前に於て真面二刀の妙術を御覽に入れ、願はくば相當の縁にて奉公いたされ長く當國に足を止めて戴きたく思ひまするんで……」無「イヤ貴殿が御厚意は無三四永く忘却は仕らん」と無三四も兩眼に涙を浮べて、其身の不運を歎ち、雨森の厚意を謝し、當日は沐浴齋戒して身を潔め五重の階段を唯一人、登つて行く白晝と雖も唯陰々として薄暗く四層までは鬱々たる邪氣が籠つて居るが五重の頂上へ登つて見ると、前にも申上げたる如

く紀淡諸播と四ヶ國の絶景が見へるといふ雲に登ゆる天守懸、姫路城下は一目の下手に取る如くに見へる、先づ無三四に於ては琵琶道人より授かりし如意を二ツに折り一枝を口に嚙へて、一枝を下に置き用意の燈具を以つて是れに火を移つして焚く不思議や如意の煙りは五色の炎となつて炎々として閣内に籠り得もいはれぬ名木の薫りが、満ちて来ると天守の中は俄かに家鳴り震動を始め、グワラ／＼／＼／＼ツと天地も微塵に碎けるかと思ふ計りの物音、無三四は口に彼一枝を嚙へし儘座して泰然目若兩眼を閉ぢ合掌して「破邪顯正ノ」と三四度口に唱ふるかと思ふ時分「ゴーン」と一聲高く合天井の組板を破つて飛出した悪狐、無三四が見ると傳へ聞く三國傳來の金毛九尾の狐にも優るとも劣らぬか、思はれる、美しくしき白面三尾の白狐が牙を現はし爪を尖らし無三四を目懸けて飛懸らんとする様子、無三四はこの時なりと立上つて躍り込みざま如意を振上げて「エイ」と大喝一聲白狐の眉間の真直中を打つ「ゴーン」と悲鳴の聲を發して、痛みに堪へぬか彼處此處と狂ひ廻る、無三四

は是を追駆け追詰め打ちました、邊に白狐は息も絶へた様子、無三四近寄つて能く
く是を改ためる若しや死んだ真似をして居るのではないか、狸寐入りといふのは
あるが狐寐入りではないかと、引起したかモー正に死んだもの、無此位ひの古狐で
あるから眷族とやらもあらん……悪狐の眷族是へ出て来い、来んか「コーン」そ
んなことは申ません、ソコで猶能く見ますると彼の如意の徳は争はれぬもので、打
つ處は骨が碎けて居る無三四は琵琶道人の恩を心中に謝し又天守閣も細かど闊へて
見ると、天井裏に十二疋の子狐が皆死んで居る、是は普通の狐であるから焚いた木
の薫りだけで斃れたものと見へます、當時なら蚤取り粉を蒔いたやうなものでござ
います、十二疋居るから警察署へ持て行けば一疋五匁宛になつて、盲く行けば當
籤で百圓になる……コレハ大阪の賦ですが……扱宮本無三四は大小十三疋の狐
を引摺り下ろして、下段へ来ると雨森縫之助が待ち兼て「イヤ是はお手柄なこと
恐れ入つた先づ尊公の眼力に違はず……ソコ無三四殿、早速申上げるが今日

君の御意に入りの劍客者で佐々木岸柳と申す者が参つたが、種々妙術を尊覽に供
して殿も殊の外御機嫌能くお在になるが全体其岸柳といふ奴は奸智に長けたる者で
拙者大嫌ひ就ては尊公が是より直に君前へ出で彼の岸柳を一本打込んで下さるまい
か、無ナニ岸柳が参つた……ウム望む處でござる

第三十九回

茲に始めて宮本無三四と佐々木岸柳の出會ひに相成るんですが、無三四も岸柳がナ
ツキリ實父無二齋を殺害したに違ひないとは、見込みを付けて居るんですが本人が
自身殺したと口外するか、又は慥かな證據がなければ仇討ちを表向き名乗る譯には
参りません、裁判なら證據か自白か、なければ認定で判決の出來ないのと同いで、
少し困つたが兎も角一度面會して立合ひもし先方の舉動を窺ひ證據を見出すか白狀
させるかの二ツだと考へまして、丁度能い折と心得て雨森縫之助に誘はれて君前へ

罷り出る、此方は久し振り姫路へ歸りまして木下侯の御前へ出で御機嫌を伺ふと、以前に變らず御機嫌麗はしく、岸柳、其後は打絶へて便りを承はらなかつたが、何國へ參つて居つた岸「ハ、ッ、先年御當國龜島に於まして自見流の名人吉岡無二齋の爲に後れを取りましてからは、何卒致して腕前を磨き再び無二齋に逢ひ勝を占められるやうと、一心を籠めまして先づ三丹州地を巡り、北國へ入りまして到る所の道場を訪れ立合ひをいたし加賀の國白山へ登り、山中に籠ること六ヶ月、心腹を練り氣根を磨き、下山いたしてより京都へ出で奈良より浪華の地に入り紀州より伊勢の海路にて明石へ上陸いたし、是より直に藝州廣島なる吉岡無二齋の許へ立越へ、再び立會ひを頼み私が打勝つか又も後れを取るか、萬一打負けたる時は無二齋の門に入つて、修行致さんの決心にござりますが、道すがらのことゆへ久し振り尊顔を拜し奉りたく、今日お目通りを願ひましたる處早速のお許しを蒙りまして、岸柳身に取り難有く心得ます 木「イヤ今日に變らぬ其方が武術の執心、予も感服いたした

……然し無二齋のことは未だ知れぬか 岸「知らぬかと御意遊ばされますは、若しや無二齋も老體のことなれば病氣等にでも…… 木「存せんが、無二齋は其方と立合ひの後歸國いたして間もなく何者の爲にか殺害をいたされた岸「何と仰せられま

す、彼の無二齋先生が横死を遂げましたとか……ア、惜しき名人を失ひました、今一回教へを乞はんと存じましたに残念とは申し乍ら……氣の毒千萬なことを仕まつりました」と下俯向ひて涙を拭ひました、旨いことをいふ奴で、自分が殺して置きながら…… 木「死したる者はいふても返らぬこと、岸柳諸所にて熟練したる腕前、定のし以前に倍したることもあらん、何ぞ予が面前に於て見せますやう」岸「柳得たりと進み出まして『恐れ乍ら申上げます岸柳別に覺へましたる一ト手もございませんが、黒白撰みと申す一手を御覽に入れませう、是は其處にあります碁石の黒白を撰みず打交せまして、私へ一ト握みづ、お投付け遊ばすやう願ひます、然して私はその黒白を別けて受止めます、何様様に限らずお試し下さるやう願ひます』

太守には最と面白きことに思召されまして「コリヤ誰かある岸柳に碁石を投よ」
 臣「ハッ」と三三人の近侍が立上りまして此方にある碁器より取出しましたる黒白の
 碁石を打交せ、各々是を引掴みまして、岸柳を目懸けてバラリくと投げ付けます、
 岸柳に於ては座したる儘「ヤッ」「ヤッ」と氣合ひを掛けて鐵扇にて打落すバラリくと
 と落つる碁石は不思議にも、黒白を別けて彼方にバラリ、此方にバラリ、左右に黒
 白を別けて御覽に入れました、木下侯始め臣下一統感服して居ります、此時雨森綾
 之助進み出まして「申し上げます、木」何ごとである、雨「天守へ登りましたる宮本無三
 四、悪狐を退治いたし十三頭の獸類を曳ひて下りました、何卒お目通りをお許し下
 され郷の義弘を盗み取りし無實の罪は御赦免の程願はしう存じます、木「ナニ宮本が
 天守より下りしと此の處へ急ぎ召連れへ、雨「夫に控へし宮本無三四殿御前のお石
 し急いで是へ無「ハッ」と答へて十三頭の獸を曳かせて悠然として大廣間へ立出
 る、岸柳も無三四と聞いて此人は、驚が殺した無三四の次男だ若しや徳を獲敵に取

つては居ないかと、心中穏かならず、且つ閉く處に依ると眞面二刀の流祖、父にも
 優るといふがドノくらひの腕前かと心配して居る、處へ立出ました宮本無三四

第四十回

木下侯は何處までも無三四を疑ひ、岸柳を信じてお在になるから「無三四、悪狐を
 退治したるその方の手柄は天晴れながら、是にて義弘の短刀を盗みし罪、消へたり
 とは申難し、如何にしてこの申譯をいたす、無三四不肖にして悪狐の毘に罹り、
 義弘の劍を奪ひし罪と相成る、此の上御疑念あれば宮本無三四如何なる御成敗にて
 もお受け申さん、足輕なりとも一ト度當家の祿を食む上は、その身に誤ちあらば君
 へ捧げし一命惜むに足らず、御存分に遊ばすやう願ひます、岸「恐れ乍ら岸柳申上げ
 ます、拙者門弟二人押田佐吉青山門平と申します、この者等何人にも名人と聞ゆ
 るならば立合つて後學の爲と仕りたく、當人等の望みにございます、何卒兩人を以て

宮本と立合ひの儀願はしう存じます木ヲ、是は一段の興であらう、無三四は自身編み出したる二刀流とやらと申す流義あるよしこの處に於て速に立合ひをいたし、その術を見せよ、双方「ハッ」と答へて、岸柳は兩人の門弟にこの段申聞かす、青山押田の兩人は支度をいたして夫へ立出る、無三四は木劍二本を借受けて構へに及ぶ、兩人は宮本の腕前を存じませんから双方から打込んで来る、宮本は又斯んな者を相手にするのは赤子の腕を捻るより雑作もない、忽ち兩人を打伏せる十字止めも何もない、誠に他愛なく兩人の負け、木下侯は焦ちまして「コレ岸柳、この上はその方宮本と立合ひをいたせ岸ハーツ委細承知 仕りました、なれども今日は早夕景にも相成りますれば明日改めて試合ひの儀を願ひます木ウーム尤ものことである、明日は改めてこの處に於て兩人立合ひをいたせ」との上意、當日は一統是にて退散をいたす、此の時に打残りましたる岸柳が「内々君へ申上げたさ一儀がございます」と申し上げました、木下侯も「夫は何事であるか」と仰せられますと、岸柳

が「恐れ乍ら無三四なる者の太刀筋を見まする處、彼には偽はりの術が相見へます、明日は私が無三四と立合をば必らず偽はりの術を見現はしまするが、若し無三四に於て卑怯なる振舞ある時は君の御下知に御取り押への儀を願ひます、左様いたしさせんと岸柳が無三四に及ばずして無實の罪を被せるやうに餘人は思ひまするゆへ、伏兵の御用意を願ひまして怪やしと思ふ處うあれば合圖を仕ります無三四卑怯な術なれば直にお取り押への上重もさ罪科仰せ付けを願ひます」と岸柳は宮本に恐れてをりますから、何にか廉を立つて宮本を押へ罪に行ひ、自分は彼れを亡きものとして枕を高くしやうといふ悪策、夫と御存知がないから木下侯には三十人の伏勢を置いて當日は萬一無三四に怪しきことあらば取押へて重き刑に行ふといふ準備、宮本無三四は少しも存じません、此方は佐々木岸柳が自分の旅宿であります、豎町の當利屋へ歸つて「扱青山、押田、中々無三四手剛いなア青イヤ私共兩人も驚きました、シテ明日先生が無三四とお立合ひになつて勝つ見込みがありますか、

岸「先づないなア押ヲヤ〜困りましたなア、ドーなさいます岸ソコで此方にも考へがあるんだ青「ドーいふ考へで矢張種ヶ島の短銃でズドーンをやらかしますかへ岸「今度は木下侯の御前だから、さう旨くは行かん、が茲に一トつ反問苦肉の計略があるんだ「へー岸「俺が奈良で修行した時に、寶藏院禪覺坊胤榮が發明した文十字の管槍といふ物がある、この管槍から別れたのが振り杖といふな、この振り杖といふは杖が三尺であつてその杖を管として置いて一尺五寸の鎖を仕込みて遣ふから三尺で四尺五寸の役に立つ、斯んなことは無三四がト一から知つて居る、處でこの振り杖を用ゆれば無三四は四尺五寸として立合ふ、夫を俺が四尺五寸を延して五尺として五寸の違ひを拵らへて置く譬へ十字で受け止めても五寸延びれば鎖の玉で眉間を破り一命は立所に終る、若し夫も免るゝその時は殿へ目配せして、無三四が偽はりの劍術として罪に行ふといふ計略だ「兩人「成程さういふ旨い計略があるとは存じませんでした流石に先生は先生だけ恐れ入りました」と主従が何れ劣らぬ狡奸

邪智一夜の中に謀し合せて夜の明るを相待つて居ります無三四も明日こそは仇敵と目指す佐々木岸柳と立合ふかと思へば肉動き骨がビリ〜として、疝が高ぶり一夜眠られずに夜明けを相待つ愈よ翌日宮本と佐々木の立合一寸御免を蒙ります

第四十一回

愈よ播州姫路の城主木下權少將俊勝公の御前に宮本無三四が佐々木岸柳と立合ひになります、當日は馬見所の四方に幕を張つて幕外には數十人の捕手を伏せ置きその用意を調べ、先へ宮本無三四をお呼出しになります、無三四は、九曜太鼓の紋打つたる小袖に段小倉の袴を一着に及び、悠然として太守の前に出で平伏いたします木下勝俊公は無三四にお向ひ遊ばし、其方儀今日佐々木岸柳と劍術試合ひ申付るなり」と仰せに「無「畏り奉る」とお請けに及ぶ此時少し退ひて彼方を見ますと、佐々木岸柳は早床几に腰打懸け待受くる様子、その打扮には四ツ目結ひの定紋付いたる

黒羽二重の小袖に縹の袴を穿ち、朱翰線千段の大小を帯で控へたるが最と教養なる風情にて、佐々木岸柳でござるその許には始めて對面いたす、御邊は罪を犯したる悪人なれども大守其業を惜み給ひ、格別の御仁慈を以て我等と試合ひ仰せ付けらるゝ御邊某しに向ひ萬が一にも打勝つ時は、其身の幸ひその功に因て罪を免さるゝとのことなり、又打負けるに於ては愈よ重き所刑に行はるべき由なれば、能く心静めて勝負あれ誠に御邊の一命は今日の一擧にあり生死の境ひ、命の瀬戸際なれば其覺悟にて來られよと、飽までも廣言を放ちました、無三四心上に此奴が父無二齋を殺めたる俱不載天の仇か、ムラ／＼と怒り心頭に發するを心で心を制し荒爾り打笑ひまして「初めて面會をいたす、其許には無三四より尋ねたき一儀あれどコハ秘し事なり後日に問ふことといたし、兎に角君命に任せ立合ひに及ばん」と陰陽日月眞面二刀、右劍二尺三寸左劍一尺八寸の木劍を挿取つて立向ふ、岸柳は例の機械仕掛けの用意したる三尺の振杖を以て立上る、無三四も豫て知る寶藏院の振杖

は飛道具に等しきもの、三尺であれば鎖延びれば四尺五寸が寶藏院の法式なりと、胸に疊んで立向ふ此方は家老三輪五左衛門雨森縫之助、正木采女の面々は平生より岸柳の教養無禮を憎しと心得て居りますから、ドーカ宮本先生か一本の下に打据へてやれば能いと思つてる何にもせよ宮本佐々木は何れも天下に隠れなき劍道の達人にして、日本一と名乗つても耻かしからぬ双方の技量、然るに岸柳は如何なる隙を見出しけん、一聲叫んで眞向上段より振杖を稻妻の如く打込んだり、無三四は「心得たり」と是を發止と請止めてツルリ入り込ませて、得意の十字に止めた鎖に付いたる分銅はブーンと無三四の面上望んで飛來る、ヒラリと體を轉じ……此くらいなら四尺五寸であるから衝る氣支へはない大丈夫と無三四が心に思つて居ると豈計らんやツルリ五寸延びて無三四が眉間眉上の眞直中へ的印したから溜りません、肉を破られて鮮血淋漓と流れ面體朱を濺ぎし如く「アツ」と後へ飛下つたから十字も其効なく解けて仕舞つた、我々の打合ひなら五寸や一尺違つても何も左程のこともない

が……このくらいの名人同士の立合ひに五寸違つては大變羽織と着物ぐらい、違ふんで五寸違つたら右手屋でも質屋でも大分直が違ひます……飛んだお話になつて失禮……太守を始め知らん者は全く岸柳が手練で無三四の額を破つたと、威服をいたしました無三四は心中燃ゆるが如く、奸計の爲に誑かれたことですから無念骨髄に徹したが、是非なく布を以て疵口を緊かと縛り大音にて「只今の勝負は偽はりの術あつてその法に叶はず、尋常に今一本眞實の勝負こそ望ましく心得る、岸柳は二度は可けないから、豫て太守へ申上げ置いたる奥の手の計略を顯はすは此時と思つたから大音上げて、正に勝負の決したるを偽はりの術なりなご、は太守を始め奉り、一同を盲同様にいすも同然なり無三四こそは、諸人を惑はす偽はり者なり」と太守へ目で知らせた、太守は御怒りの聲激しく「ソレツ者共、無三四を縛め取れ」との下知豫て幕外に用意の三十名の壯士が各々突棒刺又を押取り無三四を取圍ひ、無三四案外の體に驚ろいたが、此處で又繩目に懸る時は何日娑婆へ出られる

か知れない且仇討ちが出来なくなると思つたから群がる三十人を左右に打拂つて此處を落ちやうかと考へました、太守は御聲鋭く、手向ひいたさは斬捨へ」

第四十二回

太守より斬捨よの命が出たから三十人の外なる連中が皆抜劍に及んで何十人となり甘きに集る蟻の如く四方八方から無三四目懸けて斬込んで来る無三四は彼方へ抜け此方へ馳せ、木劍を以て向ふ者を打倒し跳ね退け蹴退けて一方の落ち口を作らんといたしました、大勢は一度に追つて来るを飛鳥の如くに身を躍らし左右の木劍を電光の如く振閃かし、當るを幸ひ薙ぎ立る名譽手練の働らきに何じよう雑兵等の敵すべき、瞬く暇に木劍に當つて即死する者十一人、手負ひとなる者數知れず捕手の者共は今恐怖の念が起りまして唯「ヤア〜」と遠巻きにする計り、岸柳も黙つて見て居る譯にも行かず、透を見て斬掛け殺して仕舞ふが上分別だ俺を仇敵と視ふ奴この

世にあると枕を高く寐る事が出来ないと思つたから、無三四の大分疲れたる様子を
見て背後から物をもいはずバツと飛懸つて二の腕を左右の手にて羽翼縮めに締付け
た、無三四「心得たり」と身を沈ませ藻抜けの早業、身を捻つて兩足を拂つたから岸
柳はドターン打倒れるかと思ふと流石は、名譽の達人忽ち身を轉じて振打ちに斬付
けたり、無三四も「左は知つたり」と抜合せ上段下段丁々發止と打合せたが、無三四
は是を父の仇と思ふ孝子の一心で勞れた身體に益々勇氣が加はり、勇みに勇んで斬
懸る今一ト太刀にて岸柳眞二ツと見へたる時に「イヤ待て暫し」と無三四考へた、
今斬つて仕舞ふは最と易きこと乍ら、今此處で打取つたんでは敵打ちにはならない
又岸柳が父無二齋を殺したと白状もせず、證據もなし折角主君加藤清正公より夫と
なくお許しの仇討を曖昧模糊の中にするといふのは武士のすべからざることである
残念だが今は討すに置う、といつて大守の爲に生捕られて繩目の耻辱を受けその上
仇討が出来なくなつては猶困る、単怯のやうだが一時此場を落延び、後日明らかに

名乗て表向き仇討をするより外はない、と脛く決心した宮本無三四、岸柳に向て強
ち自分からは打込ず、唯受け太刀くとなつて馬見所の塀際まで後退に引付て、隙
を窺ひ時分は能しと思つたから、塀の上にとヒラリと飛上るよと見へつが姿は陽炎稻
妻の如く何處ともなく立去ました、猶岸柳は後逐駆けて取押へんといたしますを俊
勝朝臣は是を止め給ひ「ヤヨ岸柳、長追ひ無用なり、今日其方が日本無双の無三四
を苦もなく打破つた手の中、天晴れ感じ入る……此上は其方を予が師範と頼み、
當家へ召抱へん」との御意、岸柳がお受けをしない中に、雨森縫之助進み出まして
「恐れ乍がら君の仰せに背くやうにございませうが、岸柳をお召抱への儀は追て後日
の御沙汰に及ばれますやう願ひ上げます」太守は最と不審に思召し「とは又何故ぢ
や」今度は御家老三輪五左衛門が「縫之助と共に手前にも少し思ふ所存もございま
すればこの儀は後日の御沙汰に願はしう存じます」といふので岸柳少し當が違つた
が、大層な拜領物を頂いてその日は退出に及びましたが、その後で雨森縫之助が主

君の前に進み出まして「御老臣を差置き、私が差出がましようはございますが岸柳の今日いたす處に付き聊か卑見を陳べます、今日の勝負は真劍の戦ひにあらず木劍と振杖の戦ひなり、然るを岸柳は分銅に鐵の玉を用ひ無三四の額を破りましたは卑怯な振舞ひにございませぬ、又奈良なる寶藏院覺禪坊から分れましたる眞の振杖は鎖と共に四尺五寸を法式といたすもの、是を濫りに延ひ縮みを作りましたるは逆法にございませぬ、譬へば尺度、度量の目を商人が掠めて暴利を貪ると一般、五寸を杖の中に機械として繰込んであるものと存じます、決して尋常の勝利ではございませぬ、無三四が申ましたる如く偽はりの術にて我君を始め奉り我々までも盲人同様に心得て居ります岸柳なる者は憎むべき奸佞の者にございませぬ決して御召抱への儀は御無用に遊ばすやう願ひます、是に引替へ無三四は悪狐の爲に御不審を蒙りしも今日明らかかに悪狐十三頭を退治致し城中の憂ひを除き、諸人の疑念を解きましたる玉晴れの英雄、且惟ら考へまするに無三四はその身が無實の罪をいひ解くは易けれど、い

ひ解く時はその身の罪より先つ寶藏番の役人が悪狐に寶劍を盗まれし落度を擧げねばならず、又我君御領分の城内に於て狐狸の爲に怪異ありしを今日まで見顯はすことの叶はざりしなご我君の不徳をも擧げねばならん、當城君臣の非を擧るを快しとせず、その儀を申開かざる義心感するに餘りあり、最早無三四の行衛御詮議は此儘に遊ばすやう願ひ上げ奉ります」

第四十三回

面を冒して忌憚る所なき大忠臣が切諫でございませぬ、木下侯も理の當然に下俯向ひて居られます、猶三輪五左衛門進み出まして「唯今縫之助が申上げたる如く岸柳と無三四とは雲泥の相違にございませぬ、又承はるに岸柳は京都に於ても、日本一の金看板を上げましたる爲に太閤殿下より薄田隼人の正を以て洛中追放を仰せ渡しに相成つたる由然るに是を憚らず當家に召抱へる時は太閤殿下の御思召しも如何と存

じます、岸柳儀は早々當姫路を御追放仰付けられまして、無三四の罪はお赦しあるやう願ひ上げます」理害を説ひての諫言、尤も始めから岸柳を城中へ入れることは兩人が御異見を申上げたのを木下侯がお聞入れがなかつたんで……素より明君の勝俊侯「ウム尤もである兩人能きに計らへ」との上意です、扱又岸柳は御褒美を頂戴して歸つたがお召抱への方はドーなることであらうと心配して居る、門弟の青山門平が「先生、私共兩人も先生にこの度再會いたしましたのがまだ運勢の盡きない處で、ナア押田イッまでも旅を歩行いて修行も能い加減なもんだナア、先生グツグツすると一生田舎廻りで終ることになりますからモ一此邊で足をお止めになるやう願ひます押青山の申す通りです、私共も先生に付て居なけりやア、押借りか追廻ぎをするより外にすることがないんです、今度は知行が少し安くてもモ一落着いて下さいまし、宿屋には拂ひが溜るばかり……」といふ處へ下婢が「お客様へ申上げます、唯今雨森縫之助様といふ立派なお武家様がお出になりました青」来た

な五百石か三百石か、女中はへお通し申すんだ、眞盆へ火を入れて押「ヲイ茶は玉露でなけりやア可かんせ、羊羹は厚く切つて来いよ、早く〜」といふ處へ雨森縫之助が「岸柳殿、君命でござる

一此度宮本無三四と試合ひの砌り偽はりの奸計を以て諸人の眼を惑はす條、不屈き至極なり急度罪科申付へのき處特別の憐愍を以て追放申付る者也

佐々木岸柳へ

雨「この上は一日たりとも當城下に止宿成らず早々に立退かるべし、若し遅刻いたす時は町奉行より急度申付け方あり」と嚴重な申渡し、案に相違の佐々木主従、青山押田は泣出しさうになつて「ナア押田、ナゼ斯う間が悪いだらう押生てるも否になつた、寧ろ二人情死しやうか、青「男同士の心中があるか」イヤ岸柳も驚ろいた、ソコで三人が又此處を立退きます、岸柳といふ男も腕は立派なもんだが心惹氣が悪い計りに不運に出合ひます、此方は宮本無三四姫路を落ちる時、何分にも姿が

亂髮で血汐に塗れて居るから、若し人に疑はれて又城主の方から捕方を差向けられやアしないか、といふ心配があるから一心に阿蘇大明神を念じて漸やくにしてその夜高砂へ出でました、何分懐中に路用もないことですから泊ることは出来ず是非なく晝夜兼行で、明石の町まで参りましたが丁度夜明けて鍛冶屋、豆腐屋など朝の早い家はモー戸を明けて稼いで居る、無三四は如何に豪傑でも草臥れたのど腹の空いたには勝てないから、豆腐屋の門に暖かい絞粕に煙の立つのを指を嚙へて詠めて居るスルト「ヤア〜お面、お小手」参つた」ボン〜と劍術の稽古をして居る様子、是屈竟と思つたから「コレ豆腐屋、向ふに撃劍の音がするが何と申す人の道場だ、豆」ハア、彼れですかな彼れは未だ年若の先生ですが、中々遣ひ手ださうでして門弟衆にも誠に親切で評判が能うがすよ、夫に自慢がなくて腰の低いお方で私共の前をお通んなすつても御挨拶をするると叮嚀に首をお下げなすつて……マア若いには珍らしいお方で……エーお名前は……斯ツト、有馬喜兵衛様と申しますよ」無

三四は心中に「ハテ聞いたやうな、ヲ、我十三歳の昔鷲城に於て討果したるは有馬喜平次と申したな若しやその身寄りの者ではないか兎も角左様な優しき人物なら面會して一飯を乞ひ受けやう」と豆腐屋に一禮を述べて喜兵衛方へ来る、無三四は自分が岸柳の親の仇と狙ふ身であり乍ら計らず打果した喜平次の倅喜兵衛が無三四を親の仇と狙つて居るのに出會する復讐の又復讐といふお話

第四十四回

演劇で演ると、宮本無三四の能い處は風呂場の立廻りと、木曾の山中に異人出會ひの場といふ、この二た幕が宜しい處です、備前岡山の城下に白倉源五右衛門の悪策に罹つて無三四が、風呂の熱湯に入るを白倉の娘白萩が情けにて、無三四の危急を助けて自害をするといふ能い幕で……夫から木曾山は幕明きが大陸摩で大雪の中に童子に化けたる熊を退治し、薄ドロにて異人が術を遣ひ無三四が怒つて二本の木

劍で打込むを、異人は圍爐裏に掛けたる鍋蓋で相手になる、鳴り物は雪霽しに木魂をあしらつて、ド、ンドン〜〜〜ボン〜〜といふ、實に能い立廻りです、追々此面白處に相成つて参ります、扱又無三四に於ては空腹の餘り有馬喜兵衛の道場へ訪問れて一飯を乞ふと云ふ淺ましき身の上と相成りましたも是皆仇敵佐々木岸柳の爲す所で、氣の毒な次第でございます、然るに先年姫路の松原にて一ト打ちの下に殺したる有馬喜平次の親戚か知らんが有馬喜兵衛といふ劍客者だから不思議に思ひまして玄關に案内を乞ふと、今稽古をして居た門弟が「コレは〜何御用でござる 無拙者は九州邊の浪人でござるが昨夜計らず災難に出合ひまして、一錢の貯へもなくこの地まで参り空腹となつて難澁いたす者で……甚だ卒漑なるお願ひにございますが一飯の食をお恵み下さいませうなら、有難い仕合せに存じますと、面目なげに申しました、何處でも劍術の道場へはチョイ〜武者修行が来て、草鞋錢を呉れ一泊させて呉れなんざいふのは有り勝ちですから、門弟も無三四と知らず何處

までも馬鹿にして「ア、諸國御修行かな、宜しい唯今先生へ願つてやる暫く控へて居さつしやい」應て又出て来た「サア臺所へ行て充分喰つしやい」可哀相に宮本無三四、有馬の臺處で飯を食せられる、素より武者の常で外見と飾がないから、無三四ムシヤ〜バク付て「イヤ御馳走であつた、お蔭で先満腹をいたした扱折角當道場へ来たことだから少し教てやらうか」今度は此方が威張り始た門「コレ腹が出て来たと思て威張るな、風體の様子では碌なことは出来まいが、先づ道場を拜見する冥加に頭へ瘤の一ツも拵へて歸れい無アバ、サア道場へ案内しろ」是から道場へ這入、門弟四五人居が何れも無三四を馬鹿にして 甲「ヲイ誰か出て少し廻つてやらんか 乙「貴公出る 丙「マア尊公から 甲「誰でも能い、慰みに……ヲイ品川氏、川崎、大森、鶴見、なんて怪しい連中が集つてるその中の一人「ヲイ腹減しの飯食い劍術一本來い 無何も喰い稼ぎの世の中、食事を消化す爲め……サア來い、別に支度もせず双方木劍を取て立向ふ「ヤアポーン、早い早くないのモ一打れた

餘り早く打れて面目ないから小さな聲で「参つた 無ナニナなんだか聞へんポー
ン」痛い参つた 無ナニ分らん」ポーン「痛い、参つた 無拙者耳が遠いんで分
らん」ポーン「痛い」慥に参つた 無「ア、恐れ入つたといふのか………ツイ
腹消化にするんだから、モット大勢で一遍に塊つて来い一束でも一箱でも………」
イヤ門弟驚ろいた、處へ立出ました有馬喜兵衛「拙者は當道場の主人有馬喜兵衛で
ござる、唯今門弟へ御教訓千萬忝い願はくば拙者も一本のお立合ひを願ひたい、
無「イヤ御主人か、始めて御意得る拙者は九州熊本城主加藤主計頭清正の臣宮本武
左衛門の養子同苗無三四正明でござる、昨夜災難の爲めに一厘の時へもなく空腹に
堪へ兼て御無心を申入れたが早速の御承知で、腹一杯御馳走に相成つて千萬忝い
唯今門弟衆と腹こなしに一本やつた處で尊公なら拙者も望む處だサアお相手をいた
さう 有「扱は貴殿が眞に宮本氏か 無「左様」正真正銘、外に類なしの正明でと
ざる」是を聞いたる有馬喜兵衛は面色を變じて「ウーム願ふてもなき尊來満足に心

第四十五回

得るサア夫へ出さつしやい、喜兵衛は袴の股立ちを高く取上げ、前髪立ちより持別
れし木劍を取つて進む、宮本は例の如く二本の木劍を借りて立上つた、喜兵衛は父
の仇たる宮本無三四、先づ其腕前を見て置てから仇敵打ちと名乗つて真劍で懸らう
といふ量見です、双分一分の隙もなく構へました

有馬喜兵衛が烈しく打込んで来ると、無三四は例の十字止めの法を以てスボンと二
本の木劍の間へ挟んで「ヤッ」と受止めた、喜兵衛は焦つて「ヤッ」と矢聲を懸け
て抜かんとしたが抜けない、前に押切らうとしたが押切れない「ウーム………ウー
ン」と木劍に満身の力を籠めて押せども引けども破れ、ばこそ、背汗はチリ／＼額
口から顔に垂れて唯ウーンと迂鳴る計り門弟一統も皆手に汗握つて控へて居ります
孝心一圖なる有馬喜兵衛は心中に思ひまするは、ア、情けないことである現在父の

仇たる無三四と眼前立合ひながら、力及ばずして打取ることの叶はざるといふは實に残念千萬と切齒をして口惜しがつたが何思ひけん持たる木劍を手より放すが早い
か此方に置いたる大劍押取り引抜きざま、無三四に斬付けた無三四も不意だから驚
いたが引外して『エイ』と小手を打て刀を打落し肩口をボンと打据へ、前に打倒
れる喜兵衛を膝下に押へ付け『卑怯なる立合ひ、真劍を用ゆるとは劍法の實義に違
ふ、一刀の下に斬殺して差問へはないんだが、一飯の食を振舞れし恩に免じ一命だ
けは助けてとらす、斯様な處に永居は無用』と悠然としてこの道場を立去りました
跡に打残つた喜兵衛は無念の涙ハラ／＼と男泣きに泣きまして門弟に向ひ『扱お
前方も縁あればこそ、師となり弟子となり今日までは暮して居つたのだが、モー今
日限り師弟の縁を切つて呉れるやう、身共の如き未熟なる師匠ではお前方も腕は上
らん、然るべき師を撰んで随分共に怠らす修行をさつしやい、唯今身共が卑怯なる
振舞ひをいたして真劍で無三四を斬付けたのは、お前方は不審に思ふであらうが、

何を隠さう身共の父は當國姫路に於て有馬一陽軒信賢といつて日本一の看板を上げ
しゆへ、身共がこの日本一といふ文字に就て父を諫めたが、父は是を聞入れず、遂
にその高慢の鼻柱を挫く爲とて唯今立去つた無三四殿幼名七之助の爲に討れて敢な
き最斯、夫より身共は何卒して無三四に面會いたし父の仇を報ひんとその在處を探
し居つたる處、今日計らず面會いたし、ヤレ嬉しや己れやれ父の仇一本の下に打据
へて然る後名乗りを上げ、更に真劍の勝負して本懐を達せんものと、思ひしことも
鰐の嘴、却つて十字の法に懸り打勝つこと叶はざる故、卑怯と知りつゝ真劍を用ひ
たのである、この上は父の故郷攝州有馬へ赴き山深く入つて、宮本の十字を破る工
夫をいたし再び無三四に面會して仇討ちをいたす所存である、又縁あれば重ねて
面會することもあらう各々さらは……』と弟子の止めるも聞かずして有馬へ歸り
ました姫路から父の遺骨は故郷の檀那寺に改葬してありますから、その墓に詣で
まして仇に出逢ひながら討得ざりし詫を申し、是より攝州摩耶山の奥深く木樵山

賤も通はぬ山中に籠つて一心に修行をいたします、古昔は皆熱心な人は山中へ籠り
ますが人跡途絶へた處は氣が散りませんから何事も一生懸命このことにはかり精を
出すといふ是は能い考へで、當時は勉強するお方がゴタ／＼した學校へ遁入つて氣
根を詰めて修行なさるから直に肺病なぞといふことになる、コリヤア山の中が宜し
い氣は散らず誠に心が晴れ／＼として、心膽を練つて工夫する場所は山に限りませぬ、
伯海も何處か深山の……富士より高いといふ臺灣の山へでも登つて修業しやうと
思ひますが、そんな山の中では誰も聞いて呉れる人がないから駄目だと思つて止め
ました、扱喜兵衛が毎日／＼一本の木剣を持つて松の木の枝を折ります『ヤツ』バタ
／＼、旨く落ちる是から少し堅い樫の木なぞを『ヤツツ』バタリ打落す、是から木
の股を割る、木の股といふものは中々裂けるものでありません、細いの中から段々太
いのを割る、或る日のこと一心を籠めて『ヤーツ』『ヤーツ』と木の股へ打込んで
『この位ひ太い股が裂けなければ宮本の十字は破れない……ヤーツ』突然背後の方

に聲あつて『若者、何故左様に木の股を裂くと咎められたから、喜兵衛吃驚して振
返ると一人白髮の髭を垂れたる老僧が手に琵琶を携へて立つてる

第四十六回

有馬喜兵衛、振返つて見ると見たこともない琵琶道人ですから『拙者は劍道修業の
爲にこの山に籠り鍛練いたして居るのだ、琵琶夫は解つて居るが、木の股を割るのは
合點が行かん、是はドーいふ譯ぢや差問へなくば話して聞せよ』といふ様子を喜兵
衛が篤と見ますと白髭に童顏仙骨の凡庸ならざる崎人ですから道人御念の入つたお
尋ね、然らばその仔細を申上げるが、拙者は當國有馬の里より出たる有馬喜平次一
陽軒信賢の一子喜兵衛秀種と申す者、父喜平次は武術の人に優れたる處から慢心い
たして播州姫路の城下に日の下開山の看板を上げたが拙者も一二度は異見もいた
したが聞入れず、遂に姫路に居りし吉岡無二齋の一子七之助と申す少年の爲に看板

に樂書されてその上に一打に撲殺されたり無念止み難く、その七之助を斬て仇討ちをなさんといたしたが、七之助の行衛は知れず。然るに七之助は生長なして天下の名人真面二刀の宮本無三四と雷名を轟かす人物と相成る、拙者も充分修業なして無三四を打んと存じ明石の浦に道場を開き居る處、計らず無三四に對面なし立合ひをなしたれど拙者の腕前、無三四に及ばざること遠く十字止めの法に止められ現在仇を眼前に見ながら打つこと叶はず依て當山中に籠り十字を破る修業として木の股を割り日々苦心いたして居る儀でございます、道人嘆息して「ア、廻る因果は小車とやら、不思議なこともあるもの……然し喜兵衛、その許が何程木の股を割りしとて宮本の十字は破れん、木は活きたる活物なれども草木は無心といふ、心無きものを割つたる術にて真面二刀の有心術は破れぬものぢや宮本如何に術ありとも弱能く強を制すと金言を思ひ、能く懐まぬ精神こそ誠に強敵を服さすの理なり、徒らに深山に籠つて無心の修業より有心の修行こそ本望を達する捷徑なり努を疑ふこと

勿れ」と飄然として立ち去りました、跡に茫然として道人の後ろ姿を見送つた喜兵衛思はず手を打つて「ア、誤つたり、無心の草木を相手の修業は死物に教へを乞ふと同じ、この上は道人が詞の如く活物の有心術でなくては本懐は達せられぬ……夫にしても今の道人は凡人に非ず……何處の聖賢であるか」と背ろ姿を伏拜みしました、是は扱置まして宮本無三四正明に於ては、兵庫へ出まして實父の門人に計らず出合ひ、路用の支度が出来ましたから、京都へ登りまして暫く姫路なる佐々木岸柳の舉動を窺つて居ります、京都は昔しは王城の地だけ姫路との行通ひが多くございましてから忽ち知れました意外にも岸柳の奸計が譯つて追放になつたといふ、行先は知れないが岸柳も路用がないから遠は行れまい近い處に居るだらう、といふだけ知れました、ソコで無三四も此邊には居られないから、又姫路は取つて返し太守には御目通りはしない、内々に岸柳の様子を聞いて少し心當りがあるから但馬路へ入りまして探して解らない、是から作州津山へ出ました、その頃は浮田家の領地で

あります、抑もこの浮田の本領と申しまするは、備前の國兒島と作州津山の兩城を兼帯いたし近國に並びなき大名、その高五十七萬石なれども藏入りは百萬石を越へると申すくらひ、浮田中納言秀家卿といつて父君は兒島和泉守直家と申し、中納言は天正六年豊臣關白秀吉公の御猶子となられて、一字を賜り秀家と名乗り官位は從三位、飛ぶ鳥落す勢ひでございませう、この浮田家の家臣に伴兵藏、宮田重左衛門、鶴殿兎平といふ三人の豪傑がおりまして三人とも養父宮本武左衛門とは莫逆の交はりがあるといふと豫て聞き及んで居りますから、この三人へ尋ねて参りました、三人も豫て武左衛門の二子に眞面二刀の無三四といふ者があるのは聞いて居りますから、珍客であるといふんで大層な優待しです、無三四はドーカ本名は隠して置て貰ひたい少々差問へることであるからとこの一件を三人にもいひ合めて置きますと、伴兵藏の宅で無三四遊んで居る處へ鶴殿兎平と宮田重左衛門の兩人が参りまして「宮本氏今年はこの津山へ豪傑の集る年か知らんが、唯今京都で有名なる象房又三郎先生が

参られた

第四十七回

此象房又三郎先生のことに就て一寸申上げて置きます、この人は京都の紺屋で形付け職人で友染や小紋の形を置のが稼業でありまして、毎日一尺計りの竹籠で仕事をして居るのに夏は群がる蠅がうるさい、當時は追々考へて蠅除け玉を天井へ釣したり箱子の壇の下から蠅が這入つて水の中へ落ちて死ぬといふやうな、工夫がありませんが、紺屋の又三郎は竹籠で五月蠅い蠅を「エイ」と打落す、是が毎日のことですから段々馴れて来て百發百中、飛ぶ蠅を「エイ」と打つと屹度落ちる、夫が又熟練の功を積んで、仕舞ひには「エイ」と氣合ひを懸けると籠が當らなくとも蠅が落ちて死ぬくらい、名人になりました、詰らないもの、名人で蠅殺しの名人です、犬殺しなら未だしもだが蠅殺しは別に雇ひ主もない、何でも其術が神に入つて玄妙と

なると思議なもんです、又美濃の國の齋藤山城入道、道三といふ人は山城の關山崎の油商人であつたが數年の練磨で錢の穴から油を注ぐことの妙を得まして一滴も外へ灑さず、又錢の穴を汚さず五合が一升でも糸を引いたやうに徳利の口へ注ぎ込むといふ手品遣ひ見たやうな男であつたが、元來大量の人物ですから熟々と考へて我、金銀を集めることに妙を得るより武術を學んで妙を得、一國一城の主ともならんと決心して遂に油屋を廢め、名を瀧口庄九郎と名乗り三間柄の鎗を遣ふことを修行いたして、その奥を得美濃の國の土岐兵部大輔定頼に仕へ遂に高名なる齋藤道三と相成りました、唯今でも小紋形に兼房、小紋又は兼房染めといふのがあります、全く吉岡又三郎兼房の考へたのでございませう、で三人が、宮本氏、一度眞面二刀の極意を拜見したいと存するが、兼房先生なら相手として耻かしからんと心得るが、一トつ君前に於て立合ひをいたされては如何でござる」といはれて無三四も高名な兼房なら一トつ後學の爲め立合ひたいから 無三四も宜しくお願ひ申す」とい

ふんで三人喜んでこの段を秀家卿へ申上げる、中納言お喜びになつた今天下に隠れなき兼房又三郎が武術を見るは喜ばしいと思召して、早速お許しになる愈よ御前試合となりませう、この邊は前にもその試合ひの有様が申上げてありますから、略して言上いたします兼房又三郎本年積つて五十五歳、古今獨歩武藝の達人一尺五寸小太刀の木劍を取つて立出た、宮本無三四今日は假名を用ひて堂前七十郎と名乗つて二本の木劍を持て立上る、無三四角突に構へ兼房は上段構へた、双方木劍を構へたなりで打込ない、唯双方が隙を窺つて居る計り他で見ても餘り面白くない劍術だ浮田中納言秀家卿は武術熱心の君ですから兩人の一舉一動に悉く目を付けてお在になるが、何時まで經つても打込ない、家來は小聲で「ドーするんでせう、早くスポンと威勢能くやれば能いに……」乙「木偶の坊同然に突立つて何にを考へて居るんであらう」などと評をして居ります、この時秀家卿お氣が付いたは兼房の眉間に血汐が流れ晒しの鉢巻は朱に染つて來たから、ハ、ア目にも見へぬ早業とはこの

どであらう、何時の間に打込んだかと思召して「兩人控へい、勝負相判つた、兼房が額の疵口厚く療治して遣はせ」と仰せられました、この時宮本無三四前へ進みまして、恐れ乍ら未だ互角の勝負にて勝敗は相見へませんに何故勝負相判つたと仰せられまするやこの儀、七十郎伺ひ上げまする、秀兼房が眉間には血汐が流れ居るを知らんか、七「恐れ乍ら兼房は白の鉢巻ゆへ目立つて見へます、私は溢染めの鉢巻ゆへ目立ちませんが斯の通りにございませす」と無三四鉢巻を取ると同じく眉間に血汐が流れて居る、不思議に思召して「七十郎、是は如何なる次第ぢや」この時に兼房又三郎進み出まして「憚りながら又三郎申上げます、堂前七十郎なる者と私とは同流にございませす、私は吉岡無二齋より習ひ覺へましたる流義彼七十郎も又その流義に寸分違ひません且又互角の腕前なれば双方に打たずして血汐を見たのでございませす、その上二刀を使ひまする處より考へます、七十郎と申すは變名にて恐らくは無二齋の一千真面二刀の流祖宮本無三四正明ではないかと存じます」と流石に兼房

是を見抜いた

第四十八回

宮本も今は是非なく、後なる方へ飛退つて平伏いたし「唯今兼房又三郎が眼方にいつて、見顯はされ面目次第もございません、本名を包みし大罪は如何なる御所刑を蒙りましても厭いません、がその仔細一應お聞取りを願ひます、實父吉岡無二齋は曲者の爲め飛具道を以て狙撃いたされ、敢なき最期を遂げ候處、私兄なる清三郎性來虚弱にして仇討ちの儀難かしく、然るに養父宮本武左衛門が義に厚きこそその主君加藤清正公の御情けとのニツにて他家へ養子となりし身が又、實父の爲に仇討ちお許しと相成り、今日迄は様々の艱難辛苦或る時は山賊の住家に危難を蒙り、又或る時は悪狐の崇りに無實の難に陥り、喰ふに食無くして縁無き家に一飯を乞ひ、又この度も御當家の家臣伴、鶴殿、宮田の三氏は養父が刎頸の友と承はり尋ねて實を

明し、食客と相成り計らす今日御目通りの策に預り候へども、敵を探る日蔭の身上、君を恐れずして假名を用ひし段は恐入り奉ります、然しながら無三四が苦しき心中御推察の程願はしう存じ上げますと申上げて猶居流れたる老臣方と兼房の方へ向つて一禮をいたす、殿を始め、統は兩眼に涙を浮べ無三四が仇討ちの心勞を察します、秀家卿は無三四にお向ひ遊ばして「ウム天晴れなる精神感服いたす又是迄の心勞は氣の毒に思ふが、その仇たる者は何國の者にしてその姓名は何と申す、無三四ハ、ッ有難き仰せなれども、是のみは申上げかねます、秀「ウム尤もことである強て問はんが随分共に身を大切にいたし一日も早く本望を達するやう……又本望を達したる曉は、今一度當國へ参つて目通りをいたせ、無三四お情けのお詞有難く存じ上げます、秀「コソ……無三四に引出物を取らせへ」と旅中のことですから層高の物は迷惑するであらうと老臣が察して、黄金百兩を拜領しました、無三四旨くやつた姫路以來貧乏して一錢の貯へもない處へ百兩、如何に豪華でも一文なしは

心細いが百兩あればモ一岸柳に出合ふまで大丈夫と心中に喜び、御禮を申上げる、仲、鶴殿、宮田の三人も共に御禮を申上げて君前を退く、兼房又三郎は無言茫然として是も君前を引下り懸て伴方に居る無三四の方に訪問れて、人目も耻ぢず瀧なす涙を流して、ア、始めて承はつた我が師の最期君前には、餘りの悲しさに碌々口さへ利けず、止むを得ず當家へお尋ね申したが……抑も拙者が御尊父に受けたる大恩は須彌蒼海にも譬へ難し、伴氏もお聞き下さい、拙者元は京都の染物紺屋に形付け職人でありましたを、無二齋殿が見出されて竹篋の遣かひ方に妙あり、竹篋にて蠅虫を打つも刀劔にて人を斬るもその理は一トつ、その氣合ひを以て身を護るの備へさへ怠らずば天晴れなる劔客者とならん、生涯職人となつて、紺屋の手間取りで身を終らんよりは槍一ト筋の主人となれよとの懸命、遂に篋を投げて師に従ひ吉岡兼房と名乗り諸國を巡ること三年、師に於ては足利家のお召しに依り京へ登られ、拙者は修業の爲め諸國を巡る中、足利家離散に相成り師の御行衛を知らず、拙者も

早五十五歳と相成り何卒して一回恩師に再會致さんものと思ひ居りし處、今日始め
て師の大難を承はり、残念に心得る此上は共に仇を詮議いたして助太刀に及び師の
妄執を晴さんの考へ、何卒仇の本名をお打明しを願ひたい」と涙ながらの物語り、
ソニで無三四も伴にさへ是は打明してない一件、初めて佐々木岸柳といふことを打
明す、兼房又三郎横手を打つて「能くお打明し下さつた、その岸柳は先頃備前岡山
に道場を開く一刀流の劍士にて奥州浪人白倉源五右衛門方に逗留いたしたるを拙者
面會を遂げた、頗る倭辯利口の痴者にて油断ならざる奴と存じたが腕前は中々侮り
難き太刀筋、その折拙者が吉岡無二齋の門弟と申したるに彼の面色變りしを唯今思
ひ當つた、この上は直に御同道申して、尊公は父の仇、拙者は師の仇、共に本懐を
達し申さう、無イヤ夫は屈竟のことを承はつた、直に是より岡山へ乗出しますすが
……、尊公の御厚意、侍るやうではござるが、養父の申付けもあれば助太刀だけ
はお断はり申上げる、此儀は悪しからず兼夫は御尤も……然らばその仇討ちの

場合一言の詞添へだけでもお許し下さるやう、無承知いたしました伴は是を聞いて
大に喜び、賴殿宮田を呼んで、門途の盃をする、伴無三四殿一人で充分であるに兼
房氏といふ殿りがあれば、龍に翼を添へたる如く大丈夫、最早岸柳は掌中に握つた
も同然でござる、無然らば是にてお暇を告げると吉岡又三郎兼房と宮本無三四正明
の兩人が愈よ備前岡山を指して参りました

第四十九回

吉岡又三郎兼房一名兼房又三郎と名乗るこの人白倉源五右衛門にも岸柳にも面會し
て顔を知つて居るから先づ旅宿を取つて置いて無三四を待せて自分一人岡山城下で評
判の高い一刀流指南の白倉方へ参りました、源五右衛門に面會して一別以來の挨拶
が終り、早速岸柳のことを尋ねると源佐々木氏は備中備後の國境ひなる権現山の
麓に高田村といふ在の豪農、高田重兵衛方に門弟、押田佐吉、青山門平の兩氏が居

らるゝとかにて今朝出立いたされました」兼房心中に「しまった、遅かりし」と思つたがその心を色にも現はさず、イヤ左様でござるか、拙者も急ぎ今日京都へ立歸ることに相成つたるゆへ一寸貴殿と佐々木氏にお暇乞ひをいたさうと存じて参つた白「左様でござるか、兎も角今日は御一泊なすつて……」兼「有難いことであるがこの度は取急ぎまするゆへ勝手ながら是にてお暇を告げ申す」と白倉の止めるを聞かず、旅宿へ歸り無三四に向つて「扱宮本氏、残念ながら今朝岸柳は備中権現山の麓なる高田重兵衛なる者の處に弟子が居るんで、是へ向つて出立したと申す、無」兼「ウーム残念、然らば是より直に高田方へ……」兼「イヤ待つしやい……拙者熱々考へるに白倉は中々偽はり多き人物なれば、必らず夫へ参つたと限らすことに因ると未だ岸柳が岡山に居るか是も分らず、といつて高田の方を捨置く譯にも行かん……處で斯様いたしてはドーであらう、尊公は白倉の顔を知らんから名を偽はつて白倉方へ入り込み、普通の武者修行で白倉の食客となり、岸柳の様子を探り出す、

拙者は権現山の方へ参つて岸柳の落付く先を突き止めて、尊公をお迎ひに参る、旨く行けば今朝立た岸柳だから拙者も随分足は達者ゆへ途中で追付けば、引捕へて岡山へ連れ歸り、尊公に打せるとも又岸柳の行先まで参つて尊公へ早飛脚で知らせるともいたさう、斯ふして二方に手分けをして探したら分るであらう「イヤ是は名案だ、宜しい仰せの通りにいたさう」ソコで兼房はその日の中にモー出立をする、無三四は一泊して翌早朝に相成ると白倉方へ参る取次ぎの門弟が、誰殿でござる、無拙者は九州浪人瀧本又三郎と申す者、諸國修行の道すがら白倉氏の御雷名を承はつて参つた、御道場拜見、旁々御教示に預りたく……この儀先生へ宜しくお取次ぎを願ふ門「暫くお待ち下さい奥へ這入つたが纏て又出て來た」瀧本氏とやら此方へお通り下さい……唯今幸はひ先生も道場にお立出でになつてる無「左様でござるか然らば御免蒙る」と道場へ這入ると、正面一段高き處に白倉源五右衛門、大兵肥滿の立派な人物「瀧本氏は尊公か、イヤ初めて御意得る、拙者が源五右衛門